一般国道18号(野尻バイパス)
埋蔵文化財発掘調査報告書4

—信濃町内その4—

川久保遺跡

2004.3

国土交通省関東地方整備局
長野県埋蔵文化財センター

長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 64
一般国道18号(野尻バイパス)埋蔵文化財発掘調査報告書4 ー信濃町内その4ー

下記の箇所に誤りがありましたので、訂正くださいますようお願いいたします。

頁・図版番号	誤	正
4ページ上から15行目	約25年前	約25万年前
37頁上から22行目	くの字	「く」の字
57頁第40図		天地が逆
		キャプションに(縮尺2:3)を追加

一般国道18号(野尻バイパス)
埋蔵文化財発掘調査報告書4

―信濃町内その4―

川久保遺跡

2004.3

国土交通省関東地方整備局
長野県埋蔵文化財センター

川久保遺跡出土土器

北陸系（左）と信州系（右）口縁と底部

序

信濃町は黒姫山麓にあって新潟県と境を接し、野尻湖や俳人小林一茶の里として知られる町です。野尻湖は、野尻湖発掘調査団によって湖底の発掘が継続して行われており、この発掘は全国各地から参加者を集め、長年の調査研究によって、ナウマンゾウやオオツノシカなどの狩りをした人々の生活の様子や当時の自然環境が明らかにされつつあります。また、化石が発見された湖底の遺跡だけでなく、湖の周辺に広がる野尻湖遺跡群も、日本の旧石器文化を代表する遺跡の密集地として知られています。

また、野尻湖周辺は古代、信濃と越後の国府を結ぶ東山道の支道が通過し、「沼辺（ぬのべ）」という駅があったと推定されています。江戸時代には北国街道がこの地を通り、野尻宿として栄えるなど、古くから交通の要衝となっていたものと思われます。

本書の川久保遺跡は、野尻湖の西側に隣接する低地縁辺部と丘陵斜面部に位置し、国道18号野尻バイパス建設に伴って調査されました。その結果、信濃町では極めて資料の少なかった古墳時代の土器をはじめ、縄文時代から中世に至る多くの資料を得ることができました。特に古墳時代には、長野県だけでなく北陸地方の土器が数多くみられるとともに、遠く畿内地方や東海地方の土器も出土しました。これらは、長野県と新潟県を結ぶ峠付近に立地する遺跡の性格を考える上で、大変興味深いものがあります。今回の調査結果が研究資料として活用されることを願ってやみません。

最後となりましたが、発掘調査から本書刊行に至るまで、深いご理解とご協力をいただいた国土交通省関東地方整備局・信濃町・同教育委員会などの関係機関、地元の地権者・関係者の方々、発掘・整理作業にご協力いただいた多くの方々に、心より感謝申し上げます。

平成16年３月19日

財団法人　長野県文化振興事業団
長野県埋蔵文化財センター

所長　深瀬弘夫

例　言

1　本書は長野県信濃町に所在する川久保遺跡の発掘調査報告書である。

2　調査は国道18号野尻バイパス建設に伴う事前調査として実施し、建設省関東地方建設局からの委託事業として、財団法人長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センターが実施した。委託者である建設省関東地方建設局は国の中央省庁再編に伴い、平成13年１月６日に国土交通省関東地方整備局と名称が変更された。発掘調査および整理作業の契約は、建設省関東地方建設局長野国道工事事務所と国土交通省関東地方整備局長野国道事務所の両者があるが、紙面の都合上現行の名称に統一して記述する。

3　上記遺跡の概要は、長野県埋蔵文化財センター刊行の『長野県埋蔵文化財センター年報』16ほかで紹介しているが、内容において本書と相違がある場合は、本書の記述が優先する。

4　本書に掲載した地図は長野国道事務所作成の野尻バイパス平面図（1：500）、信濃町作成の都市計画図（1：2,500）をもとに作成したほか、国土地理院発行の地形図（1：50,000、1：200,000）を使用した。

5　本書で扱っている国家座標は、国土地理院の定める平面直角座標系の原点（長野県第Ⅷ系、X＝0.000、Y＝0.000）を基準点としている。なお、この測地系は2002年以前の日本測地系（旧測地系）である。

6　石器の実測およびトレースを㈱アルカ、樹種同定を㈱パレオ・ラボ、遺物写真撮影を長野フジカラーに委託した。また、骨鑑定は茂原信生氏（京都大学霊長類研究所）、種実同定は伊東徳治氏（同志社香里中・高校）、古銭鑑定は藤沢高広氏に依頼し、ご教示をいただいた。

7　執筆分担は次のとおりである。

鶴田典昭　　第１章第２節２、第２章、第３章３(1)、第４章(1)

土屋　積　　第６章２

山崎まゆみ　上記以外

8　本書の執筆・編集・校正は土屋積、鶴田典昭、山崎まゆみが行い、平林彰、市澤英利が全体を校閲した。

9　遺物の図版番号は本文・挿図・表・写真図版のすべてに共通する。

10　発掘調査から本書の刊行に至るまで多くの方々のご指導・ご協力を得た。本文中にお名前を掲げさせていただいたが、厚く感謝申し上げたい。

11　発掘調査の図面・写真などの記録および出土遺物は、報告書刊行後信濃町教育委員会に移管する。

凡　例

1　本書に掲載した実測図の縮尺は原則として次のとおりで、該当箇所のスケールの上に記してある。

1）おもな遺物実測図

土器拓本　1：3　　土器　1：4　　石器　2：3　　土製品　1：2　　木製品　1：4

金属製品・石製模造品　1：1

2　本書に掲載した遺物写真の縮尺はおおよそ次のとおりである。

土器　1：4　　土器拓本　1：2　　木器　1：4　　石器　1：1

3　実測図中のスクリーントーン等は次のように用いた。これら以外の場合は、当該項目の中で説明または凡例を示した。

川久保遺跡目次

序

例言

凡例

本 文 目 次

第1章　発掘調査の概要……1

第1節　調査の経緯……1

1　発掘調査に至る経緯……1

2　調査体制と調査期間……1

3　調査の経緯……2

4　指導者・協力者……3

第2節　遺跡周辺の環境……4

1　遺跡の地理的環境……4

2　遺跡の歴史的環境……6

第3節　調査の方法……10

1　発掘調査の方法……10

(1)　遺跡範囲と調査区の設定　(2)　遺跡記号と遺構記号　(3)　グリッドの設定と呼称法　(4)　遺物の取り上げと記録方法

2　整理作業の方法……13

(1)　遺物の整理方針　(2)　整理収納の方針

第4節　発掘調査結果の概要……14

1　基本土層と遺跡周辺の地形……14

2　遺構と遺物の概要……17

第2章　縄文時代の遺構と遺物……21

1　調査成果の概要……21

2　遺物の出土状況……21

3　出土遺物……22

(1)　石器　(2)　土器

第3章　弥生時代・古墳時代の遺構と遺物……29

1　調査成果の概要……29

2　遺構と遺物の出土状況……29

3　出土遺物……30

(1)　弥生土器　(2)　土師器　(3)　須恵器　(4)　土製品・石製品・金属製品

第4章　奈良時代以降の遺構と遺物……55

1　調査成果の概要……55

2　遺構……55

3　出土遺物……57

(1)　奈良・平安時代の須恵器　(2)　中・近世の焼き物　(3)　銭貨　(4)　木製品

第５章　自然遺物……61
1　種実同定……61
2　昆虫同定……62
第６章　結語……63
引用・参考文献
写真図版
報告書抄録

挿図目次

第１図　遺跡周辺の地形図
第２図　信濃町遺跡地図
第３図　野尻湖周辺遺跡一覧
第４図　調査区設定図
第５図　グリッドの呼称と設定図
第６図　遺物集中状況
第７図　トレンチ２土層断面図
第８図　トレンチ４土層断面図
第９図　トレンチ７土層断面図
第10図　トレンチ・テストピットの位置と柱状図
第11図　遺跡全体図
第12図　グリッド別重量分布密度（縄文土器）
第13図　縄文時代の石器１
第14図　縄文時代の石器２
第15図　縄文時代の土器１
第16図　縄文時代の土器２
第17図　縄文時代の土器３
第18図　グリッド別重量分布密度（弥生土器）
第19図　グリッド別重量分布密度（弥生時代後期～古墳時代の土器）
第20図　SF01
第21図　弥生時代中期の土器
第22図　集中地点別出土土器（弥生時代後期～古墳時代）
第23図　甕形土器の口縁部形態分類
第24図　土器の底部形態分類
第25図　甕形土器１
第26図　甕形土器２
第27図　甕形土器３
第28図　甕形土器４
第29図　甕形土器５
第30図　甕形土器６
第31図　甕形土器７
第32図　底部・台付甕脚部
第33図　壺形土器
第34図　坏１
第35図　坏２・高坏１
第36図　高坏２・小型壺
第37図　銀環・石製模造品・土製品・鉢・その他の土器
第38図　ST01
第39図　SM01・SM02・SK01
第40図　SM02出土ウマの歯
第41図　須恵器
第42図　銭貨
第43図　木製品
第44図　寺山古墳立地図
第45図　墳丘図

挿表目次

第１表　信濃町遺跡一覧
第２表　川久保遺跡出土の剥片と砕片
第３表　川久保遺跡出土の石材観察表
第４表　川久保遺跡出土木製品樹種同定
第５表　川久保遺跡出土の種実
第６表　中・近世遺物観察表
第７表　縄文土器観察表
第８表　弥生中期土器観察表
第９表　弥生時代後期～古墳時代土器観察表

第1章　発掘調査の概要

第1節　調査の経緯

1　発掘調査に至る経緯

川久保遺跡の発掘調査および報告書作成のための整理作業は、国土交通省関東地方整備局から委託を受けて、財団法人長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センター（以下「センター」という）が実施した。

発掘調査の契約面積は平成11年度が6000㎡、平成12年度は500㎡である。

発掘調査は国土交通省関東地方整備局による国道18号野尻バイパス改築工事の第2期工事に関連して行われた緊急調査で、遺跡の記録保存を目的とする。

従来長野県においては、高速道等にかかわる埋蔵文化財保護は広域にわたる統一的措置が求められることから、長野県教育委員会（以下「県教委」という）が対応し、発掘調査はセンターが実施してきた。また、側道拡幅などこれらと一体的に行われる開発についても、市町村と協議の上、センターが調査を行う場合があった。国道工事は、これまでの通例では市町村教委が対応してきたが、野尻バイパス事業第1期工事に関しては、県教委、町教委、建設省（現国土交通省）、センター間の協議の結果、事業規模、遺跡の重要性等を考慮して、センターが受託することとなった。今回の第2期工事区では、南から貫ノ木遺跡、照月台遺跡、仲町遺跡、川久保遺跡の4遺跡が調査の対象となった。第1期工事区と同様に4者による協議が行われ、仲町遺跡の一部についてはこれまでの野尻湖発掘調査団による調査の一体性、継続性の観点から町教委が、それ以外についてはセンターで受託することとなった。受託範囲には取付け道等、一体施工の県道・町道および国道除雪部分も含まれる。発掘および整理は、当初に5年間の調査計画の概要を協議の上、年度ごとに国土交通省とセンターとの間で委託契約が結ばれて実施された。

川久保遺跡は、国道18号線沿いの平坦地が縄文時代および奈良・平安時代の遺跡として周知されていた。丘陵斜面部では事前調査で遺物が表採されていたが、試掘調査の結果、池尻川低地部分にも古墳時代の遺物包含層が確認され、調査に至ったものである。

調査範囲は国道新設部分や町道付け替え部分などであったが、地形や工程上の問題で分割して調査を行わなければならなかった。そのため調査区設定・調査方法・調査時期などが、埋蔵文化財調査の観点からふさわしくない点もあろうが、最善を尽くした結果であり、当初の目的は達成できたといえよう。周辺も含めての調査区域・調査年度などは別項に記した。

2　調査体制と調査期間

調査体制および調査期間は以下のとおりである。

(1)　平成11年度（平成11年5月7日～平成11年10月29日）

調査体制	所長	佐久間鉄四郎
	副所長（兼）管理部長	山崎悦雄
	調査部長	小林秀夫

	管理部長補佐	宮島孝明
	調査第二課長	土屋　積
	調査研究員	西山克己　　白田広之

(2)　平成12年度（平成12年5月17日～平成12年6月29日）

調査体制	所長	佐久間鉄四郎
	副所長（兼）管理部長	春日光雄
	調査部長	小林秀夫
	管理部長補佐	宮島孝明
	調査第二課長	土屋　積
	調査研究員	西山克己　　白田広之

(3)　平成14年度

調査体制	所長	深瀬弘夫
	副所長（兼）管理部長	原　聖
	調査部長	小林秀夫
	管理部長補佐	田中照幸
	調査第二課長	土屋　積
	調査研究員・調査員	鶴田典昭　　山崎まゆみ

整理作業内容　　遺物の分類、接合、実測、遺物・遺構のトレース

(4)　平成15年度

調査体制	所長	深瀬弘夫
	副所長（兼）管理部長	原　聖
	調査部長	市澤英利
	管理部長補佐	上原　貞
	調査第二課長	平林　彰
	調査研究員	鶴田典昭　　山崎まゆみ

整理作業内容　　遺物の分類、実測、遺物・遺構のトレース、図版組み、原稿執筆

3　調査の経緯

平成11年度（1区～5区の調査とTP3～TP12の掘削）

5月7日　2区東端に重機でトレンチ調査を開始（TR1）。
　地表下1.3mで古墳時代の土器片出土。
5月12日　1区東西トレンチ調査。盛土部分と遺物包含層を確認。
　2区西端重機によるトレンチ調査を開始（TR2）。
5月13日　1区中央に南北トレンチを入れ包含層の確認（TR4）。
5月14日　1・2区の精査開始（7・8層）。
5月17日　2区から古墳時代の土器が多量に出土。
5月31日　2区南端7層から土錘が出土。
6月9日　2区単点測量による遺物取り上げ開始。
6月21日　2区7・8層面調査終了。
6月22日　2区9層面調査開始。
7月13日　2区9層面調査終了。
7月14日　1区南北トレンチより西側の8層面調査。
7月23日　1区8層面の地形測量。
7月27日　1区東側重機により10層上面の検出。
8月3日　1区風成層部分テストピットによる調査開始。
　3区7層上面まで重機にて掘り下げ。7層上面より銅環出土。
8月4日　1区風成層部分遺物・遺構なく調査終了。
8月5日　2区調査終了し埋め戻し。

8月6日　3区7・8層面精査開始。土器多量に出土。
8月10日　1区の一部埋め戻し。
　3区遺物分布範囲の単点測量。
8月23日　TP3掘削。遺構・遺物は確認されないが、AT層の堆積を確認。
8月24日　TP4・5を掘削。遺構・遺物は確認されない。
8月25日　5区重機による排土作業と調査面の検出。
　ほ場整備により9層付近まで撹乱されていることを確認。
　TR1・2の一部深掘り。遺構・遺物は確認されない。
8月26日　TP6掘削。遺構・遺物は確認されない。
　5区9層面の精査と遺物の単点測量。遺構は検出されず、一部埋め戻し開始と排土の移動。
9月2日　プレハブの移設と駐車場の整備。
　プレハブ下、重機による検出。

平成12年度（6・7区の調査）

4月25日　町道付け替えに伴う調整と立ち会い。
5月1日　坑口付近の試掘。遺物・遺構の出土なし。
5月17日　6区重機による表土剥ぎ開始。
5月19日　6区黒色土中から縄文土器が出土。
5月23日　6区精査と、7区重機による表土剥ぎ開始。
5月29日　7区7～8層面の精査開始。中世の掘立柱建物跡1棟を検出。
9月6日　4区重機にて検出。
9月8日　3区埋め戻し終了。
9月10日　4区7～9層面、重機併用で精査開始。
9月13日　4区7層より土製の紡錘車出土。
10月1日　5区にTP7を入れる。遺構・遺物は確認されない。
10月4日　TP3の再掘削。地表下3.65mでATを検出。
10月6日　4区調査終了。
10月8日　4区にTP8を入れる。遺構・遺物は確認されない。
10月13日　4区埋め戻し開始。
10月18日　TP9・10掘削。遺構・遺物は確認されない。
10月19日　TP11・12掘削。遺構・遺物は確認されない。
10月25日　調査区北東の山裾に古墳と思われるマウンドを1基確認。
10月29日　調査終了式。
6月1日　6区遺物の単点測量による遺物の取り上げと地形測量。
6月13日　6・7区遺物の取り上げと7区の地形測量。
6月29日　6・7区調査終了。

4　指導者・協力者

発掘調査と整理作業にあたり、下記の方々や機関にご指導ご協力を得た。お名前を記して感謝したい。
（敬称略・五十音順）

青木一男　伊東徳治　春日真実　菊地芳郎　近藤洋一　茂原信生　滝沢規朗　土屋　積
中村由克　藤沢高広　渡辺哲也　信濃町教育委員会

第2節　遺跡周辺の環境

1　遺跡の地理的環境

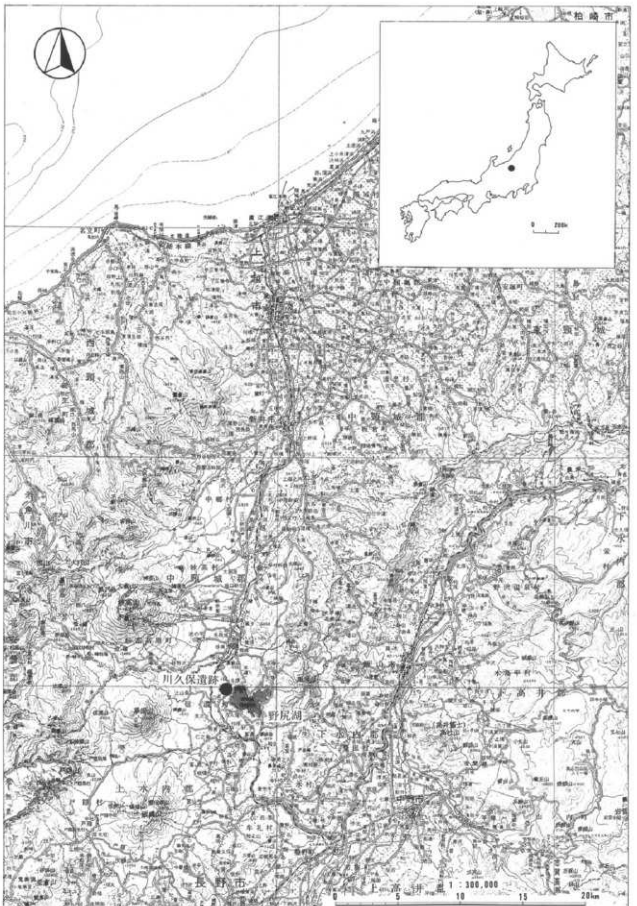
野尻湖は長野県北端の上水内郡信濃町に位置する。この湖の西側を中心に北西一南東方向に約6km、北東一南西方向に約4kmの範囲に旧石器時代から縄文時代草創期の約40の遺跡が集中しており、野尻湖遺跡群と呼ばれている。川久保遺跡はこの野尻湖遺跡群の北端に位置する。

野尻湖は日本海に面する高田平野と内陸の長野盆地との間にあり、古くから日本海側と長野県北信地方を結ぶ交通の要衝であった。湖の西側には北から妙高、黒姫、飯綱の火山がほぼ南北に8km間隔で配列し、東側には斑尾山が存在する。また、妙高山の北西には焼山が位置する。これらの山々に囲まれた野尻湖の水面標高は654m、面積は3.96㎢を測る。

野尻湖から流出する唯一の河川である池尻川は、湖の西岸から南西方向に流れ出し、池尻川低地を過ぎたところで北に進路を変えて赤川と合流し、関川を経て日本海へと注いでいる。

野尻湖周辺には火山の影響によりローム層が堆積している。主たる火山灰の供給源とそれぞれの活動期は次のとおりである。斑尾火山は約70万年前と55万年前ごろに活動をしていたが、約30万年前には活動をやめていたと考えられる。飯綱火山は約34万年前と約20～15万年前の2回の活動期があり、約12～13万年前には活動を終了している。黒姫火山は約25年前に活動を開始し、その後2回の活動期が認められている。古期の活動が約16～11万年前、新期の活動は約6万年前ごろから活発となり、約3万年前ごろには活動が衰えている。妙高火山の古期の活動開始年代は約30万年前であったが、約10万年前ごろ再び活動を開始している。約2万年前にはカルデラを形成する大爆発を起こし、約6000年前には中央火口丘を形成して現在に至っている。推定される最新のマグマ噴火は約4200年前の大田切川火砕流を噴出させたものであるが、確認できる最後の活動は約2600～3000年前に起きた水蒸気爆発で、このとき黄橙色を呈した火山灰を降下させたことが確認されている。焼山は約3000年前ごろに活動を始め、歴史時代に入ってからもマグマ噴火や水蒸気爆発を繰り返している活火山である。昭和期にも3回の水蒸気爆発を起こしており、現在も活動中である。旧石器時代には飯綱、黒姫、斑尾火山はすでに活動を休止しており、その後活動していた火山は妙高火山であり、縄文時代には妙高火山と焼山が活動をして、降灰を繰り返していたものと思われる。

野尻湖は、約7～6万年前に起こった黒姫火山の崩壊に伴って生じた池尻川泥流が、斑尾山西麓からの川を堰き止めたことによって誕生したといわれている。その後、湖西側の仲町丘陵の隆起と湖東側の沈降により、形を変化させながら現在の野尻湖が形成された。湖周辺の丘陵地帯では隆起・沈降が激しく、旧石器時代には現在の地形とはかなり異なった様相を示していたと思われる。仲町丘陵と池尻川低地との間には断層が存在し、これを境として東側の丘陵が隆起し、湖を東西の2つの水域に分けた結果、西側の池尻川低地では浅い水域の湿地的環境となっていった。約6万年前頃の野尻湖底堆積物である貫ノ木層は、貫ノ木遺跡の丘陵頂部と低地部において約50mの高低差が確認されており、約5万年で50m近く隆起したことになる。したがって、川久保遺跡が位置する池尻川低地は、旧石器時代には野尻湖の一部であったが、仲町丘陵の隆起により次第に湿地化されていったものと考えられる。また、断層を境として低地西側の向新田側も隆起し、池尻川低地が東に傾いて沈降するといった傾動運動の結果、前述の池尻川は低地の南端で縁辺部を迂回して北流するといった現象が生じているのである。



第１図　遺跡周辺の地形図（国土地理院発行１：200,000地形図を縮小・加筆）

2　遺跡の歴史的環境

信濃町内には173箇所の遺跡が確認されており（中村2001）（第2図、第1表）、その多くが旧石器時代から縄文時代前期までと、平安時代以降の遺跡である。弥生時代から古墳時代の遺跡は少なく、野尻湖畔の川久保遺跡、仲町遺跡のみである。信濃町は、新潟県と県境を接しており、本遺跡を理解する上で新潟県側の遺跡との関連が重要である。山間部にある野尻湖を中心に南北に視点を広げると、北に向かうと高田平野、南に下ると長野盆地がある。便宜的に、平野部、山麓部、盆地部と区分することができる。ここでは、長野県と新潟県との県境の山麓部の遺跡について、特に発掘調査例を中心に時代別に概観していく（第3図）。

旧石器時代：野尻湖の西部から南部を中心に約40箇所の遺跡が野尻湖遺跡群と呼称されている。近年高速道路関連の調査などで膨大な資料が蓄積されているが、本遺跡では関連資料は出土していない。

縄文時代：縄文時代草創期では皇光山荘B遺跡・仲町遺跡・貫ノ木遺跡など隆起線文土器から多縄文系土器の良好な資料が知られている。さらに、これらに先行すると考えられる無文土器と石器が日向林B遺跡と東裏遺跡で少量出土している。表裏縄文土器～押型文土器の遺跡数は多く、貫ノ木遺跡・東裏遺跡・日向林A遺跡・七ツ栗遺跡・大道下遺跡・市道遺跡・塞ノ神遺跡（信濃町）、関川谷内遺跡・中ノ沢遺跡（妙高高原町）などに良好な資料がある。沈線文系土器では八斗蒔原遺跡（中郷村）、貫ノ木遺跡（信濃町）などで、まとまった資料が出土しているが、早期末の資料は少ない。

前期では、日向林A遺跡・日向林B遺跡・七ツ栗遺跡・市道遺跡（信濃町）などで比較的まとまった資料が出土しているが、いずれも遺物が出土したのみで遺構は確認されていない。盆地部に近い丸山遺跡（牟礼村）で竪穴住居が、上浅野遺跡（豊野村）で配石遺構が確認されている。

縄文時代中期に入ると野尻湖周辺の信濃町では遺跡数が減り、断片的に土器片が出土するのみであるが、野尻湖から北へ12kmの和泉A遺跡と前原遺跡（中郷村）では中期前半と中期中葉から後葉の集落がそれぞれ発見されている。長野県側では野尻湖から南へ約11kmの三水村上赤塩遺跡で中期前半の集落が確認されている。

後期の集落跡は山麓部では確認されていないが、仲町遺跡・川久保遺跡・山手遺跡・仁之倉A遺跡（信濃町）、箱清遺跡（妙高高原町）、松原B遺跡（妙高村）、南田遺跡・籠峯遺跡・小丸山遺跡（中郷村）などで遺物が出土している。

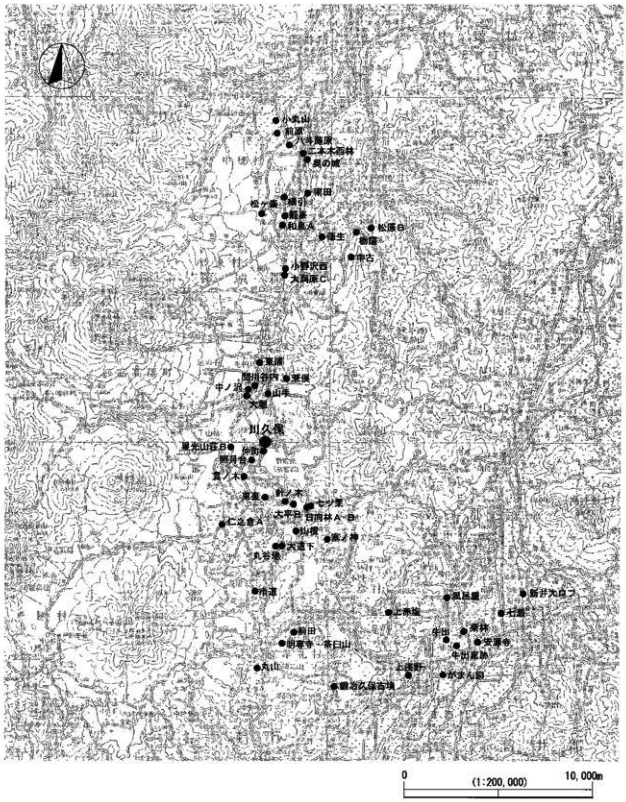
晩期では、和泉A遺跡で晩期～弥生前期の土器と掘立柱建物跡などが発見され、同時期の土器が仲町遺跡などで出土した。この他、稚生遺跡（妙高高原町）、籠峯遺跡・奥の城（西峯）遺跡・二本木西林遺跡・小丸山遺跡（中郷村）では晩期の石棺墓（石棺状遺構）が確認されている。長野県では野沢温泉村岡ノ峯遺跡で同種の遺構の調査例がある。野尻湖近辺の信濃町内では皇光山荘B遺跡、仲町遺跡、川久保遺跡、仁之倉A遺跡などで晩期の遺物が出土している。

なお、新潟県側の妙高山麓の東側には田口岩屑なだれ堆積物（早期）、赤倉火砕流（早期末～前期初頭）、大田切火砕流（中期末～後期初頭）などの下に埋没する遺跡が想定されている。表採などでは確認できない縄文時代草創期・早期の遺跡が妙高山麓に存在する可能性を考慮したい。

弥生時代：山麓部の弥生時代の遺跡は少ない。中期では、山根遺跡（信濃町）で竪穴住居跡が発見されているほかは、仲町遺跡・川久保遺跡・七ツ栗遺跡（信濃町）などで土器のみが出土している。弥生時代後期では川久保遺跡・仲町遺跡・大平B遺跡（信濃町）で土器採集されているが、集落は確認されていない。

古墳時代：以前は、山麓部の古墳時代の遺跡はほとんど明らかにされておらず、遺跡の空白地帯となっ

第２図　信濃町遺跡地図



第３図　野尻湖周辺遺跡一覧

第1表　信濃町遺跡一覧

番号	遺跡名	所在地	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良平安	中近世
1	腰沢A	古海・腰沢		○			○	
2	腰沢B	古海・腰沢		○			○	
3	滝屋A	古海・滝屋					○	
4	滝屋B	古海・滝屋					○	
5	滝屋C	古海・滝屋		○			○	
6	滝屋D	古海・滝屋					○	
7	林畔	古海・林畔		○			○	
8	花ヶ入	古海・花ヶ入		○			○	
9	古海城跡	古海・城ノ腰						○
10	鉢合城跡	古海・菅川						○
11	菅川A	古海・菅川		○				
12	菅川B	古海・菅川		○			○	
13	守護	古海・菅川		○			○	
14	舟瀬	野尻・舟瀬		○			○	
15	桐久保	古海・市河の内桐久保		○	○			
16	丸木舟出土地	古海・市河の内桐久保		○				
17	山手	熊坂・山手		○				
18	赤川・赤川城跡	野尻・赤川		○			○	○
19	大本道A	野尻・大本道		○				
20	大本道B	野尻・大本道					○	
21	大本道C	野尻・大本道		○			○	
22	小本道	野尻・小本道		○				
23	野尻湖城跡	野尻・城ヶ入						○
24	家老路城跡	野尻・家老路						○
25	城帰りA	野尻・舟場		○	○		○	
26	城帰りB	野尻・城ヶ入		○	○			
27	蛭ヶ崎	野尻・家老路	○	○	○			
28	旧野尻湖中学校	野尻・舟場		○	○			○
29	杉久保	野尻・舟場	○	○			○	
30	琵琶島	野尻・琵琶島	○	○	○		○	○
31	立が鼻	野尻・海端	○	○				
32	海端	野尻・海端	○	○	○		○	
33	川久保	野尻・川久保		○			○	
34	土橋稲荷	野尻・土橋		○				
35	小丸山・土橋城跡	野尻・川久保	○	○				○
36	向新田A	野尻・高山	○	○			○	
37	向新田B	野尻・土橋		○	○			
38	雨池	野尻・高山		○				
39	昭明台	野尻・高山	○	○				
40	仲町	野尻・一杯清水	○	○	○	○	○	○
41	神山北	野尻・上ノ原	○					
42	狐久保	野尻・狐久保	○	○	○			
43	神山A	野尻・神山	○	○			○	
44	神山B	野尻・神山		○				
45	神山C	野尻・神山						
46	照月台	野尻・滝沢	○	○				
47	貫ノ木	野尻・貫ノ木	○	○			○	○
48	星光山荘A	野尻・下山桑		○				
49	下山桑A	野尻・下山桑		○				
50	下山桑B	野尻・下山桑		○				
51	下山桑C	野尻・下山桑		○				
52	下山桑D	野尻・下山桑		○				
53	駒爪	野尻・高沢		○				
54	上山桑A	野尻・上山桑		○			○	
55	上山桑B	野尻・上山桑		○				
56	瑞穂A	野尻・瑞穂	○				○	○
57	瑞穂B	野尻・瑞穂					○	
58	大久保A	柏原・日向		○	○		○	
59	大久保B	柏原・日向					○	
60	大久保C	柏原・中山		○			○	
61	大久保南	柏原・向山	○	○				
62	西岡A	柏原・西岡	○	○				
63	西岡B	柏原・西岡	○					
64	毛無	柏原・毛無		○				
65	上ノ原	柏原・上ノ原	○	○			○	
66	緑ヶ岡	柏原・毛無	○	○			○	
67	野尻湖団地	柏原・小丸山					○	
68	小丸山公園	柏原・小丸山	○	○			○	○
69	役屋敷	柏原・役屋敷		○			○	○
70	東裏	柏原・東裏	○	○	○	○	○	○
71	裏ノ山	柏原・裏ノ山	○	○				
72	伊勢見山	柏原・裏ノ山	○					
73	東裏城跡	柏原・東裏						○
74	柴山	柏原・柴山					○	○
75	熊倉	柏原・堀下		○			○	
76	新田川	柏原・新田川		○				
77	五輪堂	柏原・五輪堂		○			○	
78	仁之倉A	柏原・仁之倉		○	○		○	
79	仁之倉B	柏原・仁之倉					○	
80	仁之倉南	柏原・黒姫山		○			○	
81	長水A	柏原・長水					○	○
82	長水B	柏原・長水		○				
83	鳥居川第二発電所	柏原・西原		○				
84	上島	古間・上島		○				
85	柳原	古間・柳原	○				○	
86	一里塚	古間・一里塚		○			○	○
87	陣場A	古間・陣場	○				○	
88	陣場B	古間・陣場					○	
89	小古間	古間・久根添					○	
90	清水東	古間・清水東	○	○			○	
91	清水尻	古間・清水尻					○	
92	吹野原A	古間・吹野原	○				○	
93	吹野原B	古間・吹野原	○				○	
94	山根	富濃・山根					○	
95	古間支館裏	古間・下島					○	
96	大平A	富濃・大平	○	○			○	
97	大平B	富濃・大平	○	○	○			
98	針ノ木	富濃・針ノ木		○			○	
99	砂間	富濃・西原	○	○	○			
100	琵琶ヶ崎	富濃・西原		○	○			
101	宮沢	富濃・宮沢		○				
102	諏訪ノ原	富濃・諏訪ノ原		○			○	
103	美野里	富濃・諏訪ノ原		○			○	
104	日向林A	富濃・日向林		○				
105	日向林B	富濃・日向林	○	○			○	○
106	七ツ栗	富濃・七ツ栗	○	○			○	
107	普光田	富濃・普光田		○			○	
108	庚申堂	富濃・庚申堂					○	
109	面久保	富濃・水穴					○	
110	水穴	富濃・水穴					○	
111	大日方A	富濃・大日方					○	
112	大日方B	富濃・大日方					○	
113	富濃原	富濃・原		○			○	
114	鍋ガ岳	富濃・城山						○
115	滝沢	富濃・滝沢		○			○	
116	東原	富濃・東原		○			○	
117	鳴沢	富濃・鳴沢					○	
118	南原A	富濃・南原					○	
119	南原B	富濃・南原					○	
120	乙原	富濃・南原		○			○	○
121	中村	富濃・中村					○	
122	目細A	富濃・目細					○	
123	目細B	富濃・目細					○	
124	薬師岳城跡	富濃・舟岳山愛棟						○
125	舟岳	富濃・成仏		○			○	
126	向ノ原	富濃・向ノ原					○	
127	塞ノ神	富濃・塞ノ神稲荷		○				
128	勘蔵	富濃・勘蔵					○	
129	戸草城跡	富濃・福沢						○
130	戸草	富濃・清水		○	○		○	
131	正徳寺	荒瀬原・正徳寺		○			○	
132	荒瀬原原	荒瀬原・原		○			○	○
133	大原	荒瀬原・大原					○	
134	則心院墓	荒瀬原・山神						○
135	石原	荒瀬原・石神		○			○	○
136	帽塚	富濃・荒瀬原・帽塚		○				
137	月影	荒瀬原・月影					○	
138	北ノ原A	平岡・北ノ原					○	
139	北ノ原B	平岡・北ノ原		○			○	
140	宮原	平岡・宮原		○			○	
141	丸山	平岡・丸山					○	
142	北山道	平岡・北山道					○	
143	御料	平岡・裏屋敷添		○			○	
144	向原	平岡・向原		○			○	
145	丸谷地	穂波・丸谷地	○	○			○	
146	大道下	穂波・原・大道上・大道下	○	○			○	
147	落影（五輪山）	穂波・五輪山・峰・古道畑					○	○
148	上の山	穂波・上の山					○	
149	北中島	穂波・北谷地					○	
150	中島	穂波・鳴崎・中畔			○		○	
151	辻屋	穂波・南平・道下					○	○
152	宮ノ腰	穂波・腰巻・南原		○	○		○	
153	富ヶ原Ⅰ	大井・富ヶ原					○	
154	富ヶ原Ⅱ	大井・富ヶ原		○			○	
155	富ヶ原Ⅲ	大井・富ヶ原		○			○	
156	富ヶ原Ⅳ	大井・富ヶ原		○				
157	富ヶ原Ⅴ	大井・富ヶ原		○				
158	富ヶ原Ⅵ	大井・富ヶ原					○	
159	富ヶ原Ⅶ	大井・富ヶ原		○				
160	北信	大井・霊仙寺		○			○	○
161	膳場	大井・膳場		○			○	
162	七瀬	大井・霊仙寺		○			○	
163	カジカガワ	大井・カジカガワ		○			○	
164	霊仙寺跡	大井・家添						○
165	石橋	大井・西谷地					○	
166	市道	大井・市道		○			○	
167	高山	大井・高山		○			○	
168	清水久保	大井・向原		○			○	
169	長山	大井・長山		○				
170	宮浦B	大井・長山	○					
171	植池	柏原		○				
172	星光山荘B	野尻・下山桑		○			○	
173	大平C	富濃・諏訪原	○	○				

ていた。近年の発掘調査により、古墳時代の遺跡の存在が明らかとなってきた。川久保遺跡もその一つである。集落遺跡は発見されていないが、大洞原Ｃ遺跡・小野沢遺跡（妙高村）、川久保遺跡（信濃町）からは多量の土器が出土しており、集落跡の存在が想定されている。この他、東裏遺跡・仲町遺跡（信濃町）、篭峰遺跡・横引遺跡・和泉Ａ遺跡（中郷村）などで少量ではあるが土器が出土している。また、仲町遺跡では古墳時代後期から奈良時代の年代値が得られる木製品が出土した。山麓部では古墳は確認されていないが、野尻湖に望む山麓に古墳の可能性がある塚が１基確認されている。野尻湖近辺は古東山道の沼辺駅(註)の推定地とされており、その前身の道が古墳時代に整備されていた可能性をうかがわせる資料が蓄積されつつある。川久保遺跡もそのような遺跡の一つであると考えたい。

また、盆地部に弥生時代末から古墳時代前期にかけて北陸系の土器を出土する集落跡があり、川久保遺跡付近を経由するルートが注目される。弥生時代では七瀬遺跡・がまん淵遺跡（中野市）、古墳時代では柳町遺跡・上野遺跡・須田ケ峯遺跡などの集落跡で北陸系の土器が指摘されている。

奈良・平安時代：平安時代になると山麓部に遺跡が多くみられるようになり、集落跡と思われる住居跡も多数調査されている。中ノ沢遺跡・関川谷内遺跡・兼保遺跡（妙高高原町）、仲町遺跡・貫ノ木遺跡・東裏遺跡・針ノ木遺跡・七ツ栗遺跡・丸谷地遺跡（信濃町）、前田遺跡・丸山遺跡（牟礼村）などで発見された住居跡はほとんどが９世紀以降のものであるが、仲町遺跡などでは８世紀末から９世紀初めと思われる住居跡が検出されており、山麓部では古い集落といえる。

中世・近世：近世では北国街道が野尻湖畔を通過しており、仲町遺跡（信濃町）では、野尻宿関連の遺構が調査されており、これらの集落は中世にまで遡ることが確認されている。その周辺で、中世または近世のものと思われる道跡も確認されており、中世から近世にかけて交通の要衝であったことをうかがわせる。

（註）国史大系「延喜式」による

第３節　調査の方法

１　発掘調査の方法

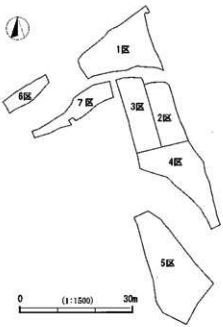
(1)　遺跡範囲と調査区の設定

川久保遺跡は池尻川低地北縁の丘陵斜面部と低地部に位置する。平成11年度にはバイパスのトンネル坑口直下の斜面部と、仲町丘陵西縁に至る南側の低地部分を調査した。従来、川久保遺跡は国道18号沿いの平坦部が、縄文および奈良・平安時代の遺跡として周知されていたが、今回、低地部分の試掘調査を行ったところ遺物包含層が確認されたため、調査範囲とした。

平成12年度には町道の付け替え工事により、前年度調査区西側の丘陵斜面部と低地部分が対象となりトレンチ調査に基づき調査範囲を設定した。低地部分から仲町丘陵に至る調査ではテストピットにより遺物・遺構の有無を確認した。

本遺跡の調査工程は、排土処理のための用地および運搬道路の確保や年度を越える調査範囲の拡大などで、調査区を細かく分割して調査を行う状況が生じた。そのため地区名称に重複が生じ、整理作業進行上の利便性から地区名を以下のように改めた。なお、遺物の注記、写真、図面類は変更を行わず、調査時の地区名称を用いている。

本報告書の地区名称	調査時の地区名称	
1区	(平成11年度調査)	上段・上段西
2区	(平成11年度調査)	下段東区
3区	(平成11年度調査)	下段西区
4区	(平成11年度調査)	下段南東区
5区	(平成11年度調査)	下段南区
6区	(平成12年度調査)	上段
7区	(平成12年度調査)	下段



第4図　調査区設定図

(2) 遺跡記号と遺構記号

本書で報告する遺跡記号は「MKA」である。

この遺跡記号は、本遺跡に関係する遺物の注記、図面、写真などすべての資料について使用されている。記録、注記などの便宜を図るために遺構名称は記号を用い、遺構番号は時代等にかかわらず種類ごと、検出順に付した。遺構記号は原則として検出時に決定するため、主として平面的な形態や遺物の分布状況等を指標としたもので、必ずしも遺構の性格を示すものではない。

なお、本書の遺構記号はセンターで共通して用いているもので、以下のとおりである。

[SD]　帯状に細長く連続する掘り込み（溝跡等）
[SK]　平面形が小さな掘り込み（土坑、陥し穴、貯蔵穴等）
[ST]　小さな掘り込みや石が一定間隔で方形に配置されるもの（掘立柱建物跡）
[SM]　方形、円形、もしくはそれらが組み合わさった形の盛り上がり（古墳、墓跡）
[SF]　単独で存在し、火を焚いた後が面的に広がるもの（火床等）
[SQ]　遺物が面的に集中するもの（ゴミ捨て場、祭祀跡）

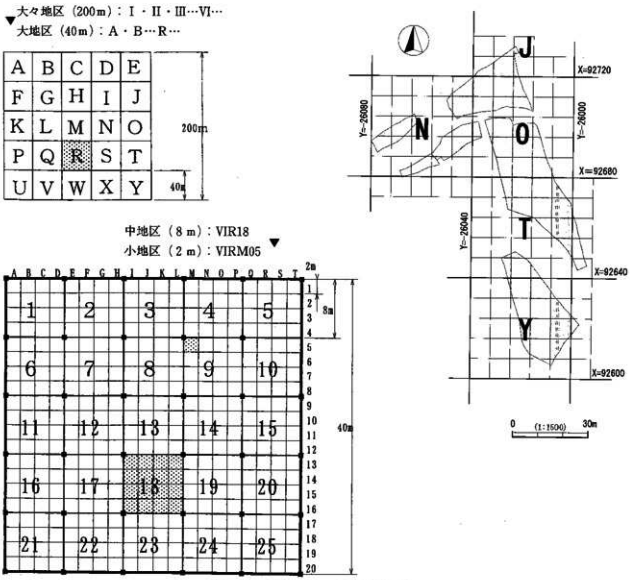
(3) グリッドの設定と呼称法

グリッドの設定にあたっては、国家座標を基準として大々地区、大地区、中地区、小地区の4段階に区分し調査を行っている。調査区全体にかかる200m×200mの区画を設定し、これを大々地区としてⅠ・Ⅱ・Ⅲ……とローマ数字で表記した。大地区は大々地区を40m×40mの25区画に分割し、AからYまでの大文字アルファベットを用いた。その大地区を8m×8mの25区画に分割し、北西から南東へ1から25の算用数字で表記したものが中地区である。

今回の調査では、遺物の取り上げに光波トランシットを使った単点測量を行ったため、特にグリッドの設定は行わなかった。しかし、調査区によって遺物の取り上げ方法が異なったため、遺物分布状況を把握することが困難となり、整理作業の段階でグリッドを設定することとした。本書では中地区を用いて遺物の単位面積あたりの出土重量を算出した。

(4) 遺物の取り上げと記録方法

遺物の大半は測量業者に委託し、光波トランシットを用い単点測量を行って取り上げた。センターは成果品として編集図面、観測成果簿、観測データの3種を所持管理している。遺物の取り上げ方法は、原則として1点の遺物について1番から番号を付したが、遺物集中部分はその範囲を同一の番号（1J2865-1、1J2865-2……1J2865-7など）やSQ番号で表し、一括して取り上げた（第6図）。



第5図　グリッドの呼称と設定図

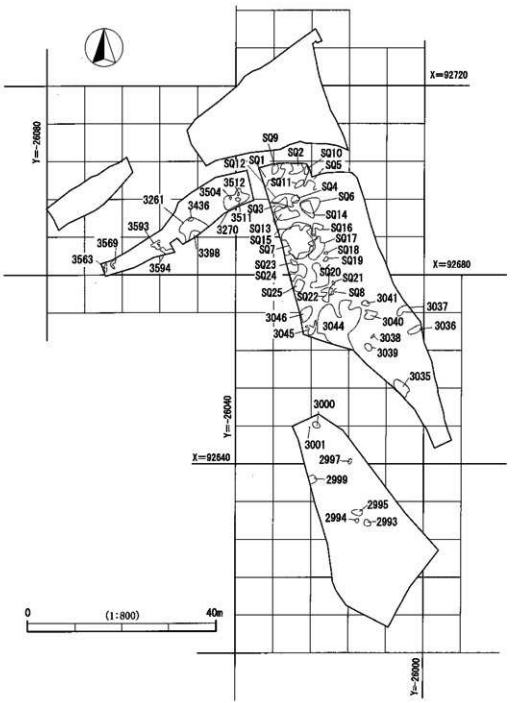
各地区のおもな取り上げ方法は次のとおりである。

1区　　単点測量および包含層ごとの一括取り上げ
2区　　単点測量
3区　　遺物集中範囲別の一括取り上げ（単点測量併用）
4・5区　遺物集中範囲別の一括取り上げ（単点測量併用）
6区　　単点測量
7区　　遺物集中範囲別の一括取り上げ（単点測量併用）

調査時の遺物集中部分のうち、3区ではSQ1～SQ25のSQ番号を付してあるが、これらは取り上げ時の便宜的な呼称であって、必ずしも遺構の性格をあらわすものではない。そのため整理段階で上下、または隣り合ったSQやSQ外の土器の接合もみられた。また、4区・5区・7区についてはSQ番号でなく、取り上げ番号が遺物の集中範囲を示している。

なお、遺物の注記は以下のとおりとした。

検出面出土遺物　　MKA.2612、MKA.2865
遺構内出土遺物　　MKA.SD10①、MKA.SD10②、（SD10内の集中部分①、②）



第６図　遺物集中状況

２　整理作業の方法

(1)　遺物の整理方針

遺物は注記終了後、土器、石器、礫を分別し、それぞれに作業を進めた。

本書で報告する遺物の大半は遺構に伴わず、取り上げ方法も調査区によって異なるため、出土状況を比較検討することは困難であった。そのため土器集中、グリッド、包含層一括取り上げごとに土器の重量測定を行い、分布密度の概要を示すこととした。なお、２つ以上のグリッドにまたがって一括して取り上げられた遺物（土器集中など）の重量は比例配分して各グリッドの数値に加えた。

接合は、土器集中（SQ）や8ｍグリッドごとに行ったが、隣り合ったSQやグリッド間の接合も試みた。また、1区のように層一括で取り上げ、出土位置を示すことが困難なものは層ごとに調査区内での接合を行った。

実測図、拓本などの資料化した遺物はすべて整理番号を付した。その際、遺物の種類または時期によって以下の番号を用いた。なお、木器は現場での整理番号をそのまま用いている。

縄文時代土器	No.1～
弥生時代土器	No.1001～
古墳時代土器	No.2001～
古代以降須恵器	No.3001～
石器	No.4001～
金属製品・土製品などの特殊遺物	No.5001～

縄文時代・弥生時代の土器は量的にも少ないため資料化できるものは拓本または実測を行った。

古墳時代の土器は原則として口縁部1/3以上か、器形が判断できるものについて実測を行ったが、外来系の土器など特徴的な破片などは、残存率に関係なく実測した。

遺物写真は原則として実測図に則し掲載した。

(2)　整理収納の方法

遺物類は整理番号を付し図版に掲載したものと、整理番号は付したが、掲載しなかったものや図化しなかったものを分けて収納した。それ以外のものは時代別に口縁部・底部を抜き出した後グリッドごとに収納した。写真は撮影順にアルバムやファイルに整理し、実測図など記録類は通し番号を付して収納した。

第4節　発掘調査結果の概要

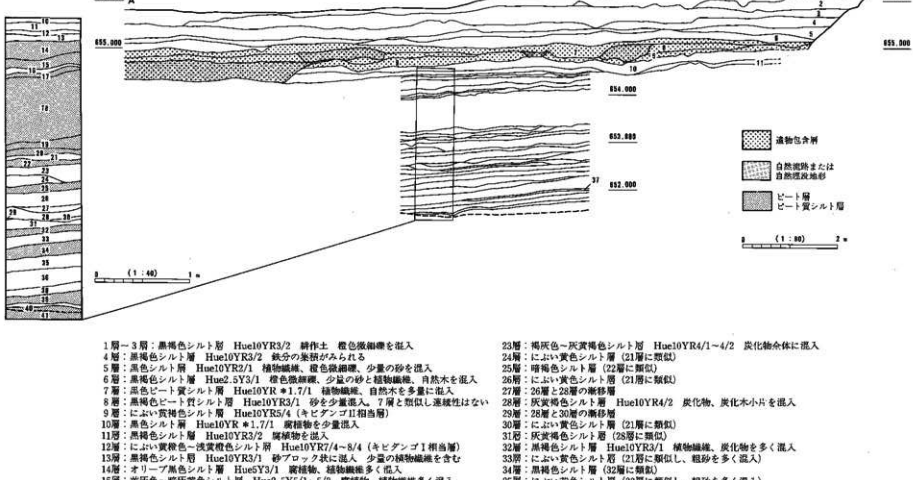
1　基本土層と遺跡周辺の地形

本遺跡の調査範囲は、ほぼ20ｍの道路幅で北西から南方向へ約120ｍに及ぶ路線区間と西側の町道部分である。地形は、調査区の大半を占める池尻川低地（2・3・4・5・7区）と低地北縁の丘陵斜面部（1区）、風成層堆積部分（6区）の3つに区分される。各地区は地形的に分断されており、統一した基本土層を捉えることができなかったため、地区ごとに基本層位を定めた。以下に地区ごとの土層断面図と各層の特徴を示す。なお、色調観察には新版標準土色帳を用いた。

池尻川低地（2・3・4・5・7区）（第7図）

本地区は池尻川泥流によって古水系が堰き止められたことによって形成された古野尻湖に位置する。古野尻湖は、下部・中部野尻湖層の時代に徐々に仲町丘陵が隆起したことにより分化され、東側に深い湖が、西側に浅い水域の湿地的環境の池尻川低地が形成されたといわれている。

調査区の層相は、ほとんどがピートやピート質シルトといった有機物を多く含む堆積物で、その中に野尻ローム層の火山灰層が挟まれる。9層は約4000年前の火山灰キビダンゴⅡ、12層は約6000年前のキビダンゴⅠに相当する。いずれも妙高火山を供給源とする黄褐色の火山灰で、陸上では柏原黒色火山灰層中にブロック状に挟在される。現場所見による植物繊維とは葦の繊維、炭化物はピート質の有機物のことで、ピートとピート質シルトが互層状に堆積する状況は、池尻川低地が浅い水域であったことを示している。7・8層からは古墳時代の土器が多量に出土し、特に2・3区に集中する。2・3区では北東一南西方向の自然流路（SD1～SD11）が確認され、北東方向の斜面部から池尻川低地に向かって流路ができていたも



1層～3層：黒褐色シルト層　Hue10YR3/2　耕作土　橙色微細礫を混入
4層：黒褐色シルト層　Hue10YR3/2　鉄分の集積がみられる
5層：黒色シルト層　Hue10YR2/1　植物繊維、橙色微細礫、少量の砂を混入
6層：黒褐色シルト層　Hue2.5Y3/1　橙色微細礫、少量の砂と植物繊維、自然木を混入
7層：黒色ピート質シルト層　Hue10YR ＊1.7/1　植物繊維、自然木を多量に混入
8層：黒褐色ピート質シルト層　Hue10YR3/1　砂を少量混入。7層と類似し連続性はない
9層：にぶい黄褐色シルト層　Hue10YR5/4（キビダンゴII相当層）
10層：黒色シルト層　Hue10YR ＊1.7/1　腐植物を少量混入
11層：黒褐色シルト層　Hue10YR3/2　腐植物を混入
12層：にぶい黄橙色～浅黄橙色シルト層　Hue10YR7/4～8/4（キビダンゴI相当層）
13層：黒褐色シルト層　Hue10YR3/1　砂ブロック状に混入　少量の植物繊維を含む
14層：オリーブ黒色シルト層　Hue5Y3/1　腐植物、植物繊維多く混入
15層：黄灰色～暗灰黄色シルト層　Hue2.5Y5/1～5/2　腐植物、植物繊維多く混入
16層：黄灰色～暗灰黄色シルト層（15層に類似し、黄橙色の火山灰を斑状に混入）
17層：黒色シルト層　Hue10YR ＊1.7/1　腐植物、草物繊維を多量に混入
18層：黒褐色ピート層
19層：灰黄褐色～黒褐色ピート層　シルトを少量混入（18層と20層の漸移層）
20層：暗褐色シルト層　Hue10YR3/3　腐植物を多く混入
21層：にぶい黄色シルト層　Hue2.5Y6/4　砂粒、炭化物を混入
22層：暗褐色シルト層（20層に類似し、炭化木小片を混入）
23層：褐灰色～灰黄褐色シルト層　Hue10YR4/1～4/2　炭化物余体に混入
24層：にぶい黄色シルト層（21層に類似）
25層：暗褐色シルト層（22層に類似）
26層：にぶい黄色シルト層（21層に類似）
27層：26層と28層の漸移層
28層：灰黄褐色シルト層　Hue10YR4/2　炭化物、炭化木小片を混入
29層：28層と30層の漸移層
30層：にぶい黄色シルト層（21層に類似）
31層：灰黄褐色シルト層（28層に類似）
32層：黒褐色シルト層　Hue10YR3/1　植物繊維、炭化物を多く混入
33層：にぶい黄色シルト層（21層に類似し、粗砂を多く混入）
34層：黒褐色シルト層（32層に類似）
35層：にぶい黄色シルト層（33層に類似し、粗砂を多く混入）
36層：にぶい黄色シルト層（21層に類似）
37層：黒色ピート層
38層：にぶい黄色シルト層（33層に類似）
39層：灰黄褐色シルト層（28層に類似　炭化物を多く混入）
40層：にぶい黄色シルト層（21層に類似）
41層：灰黄褐色シルト層（39層に類似）

第7図　トレンチ2土層断面図

のと思われる。調査区の土層断面からSD6～SD11は７・８層堆積後の流路で、SD1～SD4は８層堆積以前の流路であることが確認された。これらの流路は、高低差もほとんどなく、きわめて不規則な流形を呈する。また、７区にはSD5・SD10の続きと考えられる流路が検出されており、東端の低地部分はSD10、ほぼ南北の流路はSD5の続きと考えられる。流路の方向からこれらの地区は南西方向に向かって水域が退行していったものと推察される。４・５区では自然流路は検出されず、遺物の出土量も少なくなっている。

丘陵斜面部（１区）（第８図）

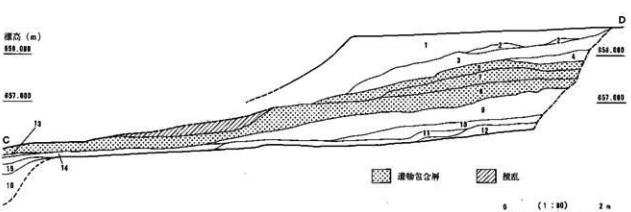
本地区は池尻川低地に向かって緩やかに傾斜している。１区と２・３区との間には水路があり、地形の変換点を明確にすることはできなかったが、７層以下は、低湿地性の堆積土層として捉えることができよう。

なお、５層以上の層から少量出土している古墳時代～縄文時代の土器片は、耕作による攪乱や斜面上部からの崩落によるものと考えられる。５層は中・近世の陶磁器片の多くが出土しており、この時期に堆積したものであろう。７層～８層からは古墳時代を中心とした土器が多量に出土し、北陸地方や東海地方、畿内地方などの外来系土器とともに弥生土器の混入が認められた。遺物の大半は８層から出土しており、低地部の７・８層に対比されると考えられる。16層は１m以上の層厚があり、調査区南では14層以下が低地に向かって急に落ち込んでおり、低地の縁辺部の状況を呈している。また、調査区の北東部分には上部野尻ローム層（風成層）が確認されており、７層以下は黒色シルトまたは砂質シルトの層相を示すなど、丘陵斜面部は一時的に滞水する汀線付近であったと考えられる。調査区内にはほぼ南北方向の自然流路SD5が検出されている。

風成層堆積部分（６区）（第９図）

カッコ内のローマ数字の層名は、センターで用いている信濃町内の標準層序名である。

本地区は１区と同じく低地に向かって緩やかに傾斜しているが、風成層堆積部分である。２層～５層はセンターで用いているII層柏原黒色火山灰層で、６・７層は上部野尻ローム層に対比されるIII・IV層である。本地区における遺物の出土は６層までで、７層からは出土していない。遺物は縄文時代草創期末～前



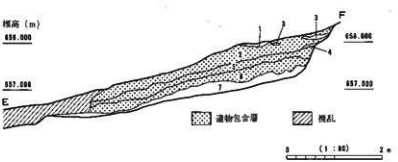
1層：暗褐色シルト層　Hue10YR3/3　耕作土　炭化物粒を含む
2層：明黄褐色～黄褐色シルト層　Hue10YR6/6～5/8　耕作土
3層：暗褐色シルト層　耕作土
4層：暗褐色～黒色シルト層　Hue10YR3/3～2/1　３層と５層の混合土
5層：黒色シルト層　Hue10YR2/1　灰黄褐色シルトをブロック状に混入
6層：明褐色砂質土　Hue7.5YR5/6　レンズ状に堆積し、粘性はない
7層：黒色シルト層　５層に類似するが細粒で、赤褐色のもろい礫を混入
8層：黒色シルト層　細粒で、拳大～人頭大の凝灰岩礫を多く混入
9層：黒色シルト層　７層に類似するが細粒。上面に、にぶい黄橙色火山灰（Hue10YR6/4）を５～10cmの厚さでブロック状に混入（キビタンIII）
10層：黒色砂質シルト層　Hue10YR＊1.7/1　粘性はなく締りゆるい　横筋繊維を少量混入
11層：黒色砂質シルト層　φ１mm位の細砂を多く混入
12層：灰～オリーブ灰色砂層　Hue10Y4/1～4/2　粘性なく締り強い
13層：黒色砂質シルト層
14層：オリーブ黒色シルト層　Hue5Y3/1　粘性あり締り緩い
15層：14層と16層の漸移層
16層：にぶい黄橙～にぶい黄橙色砂質シルト層　Hue10YR6/4～5/4　粘性少なく締り強い

第８図　トレンチ４土層断面図

期を中心としたものが多く出土している。標準層序のⅣ層には拳大～人頭大の礫の混入はみられないことから、７層は二次堆積の可能性が考えられる。

第10図に計画路線に沿った池尻川低地部のテストピットとトレンチの土層柱状図と、７・８・９図の位置（A－B、C－D、E－F）を示した。

路線は池尻川低地の縁に近い部分を通過しており、TP5付近まではピートやピート質シルトが堆積する、湿地的環境の層相を示している。TP12ではピート層の堆積が認められたが、徐々に消滅し、仲町丘陵に近い地点では表土・耕作土下で川砂の堆積や風化岩盤が露出するなど、層相が乱れてピート層の堆積はみられない。これは池尻川低地と仲町丘陵の間に存在する断層により、仲町丘陵が隆起した結果生じたものと考えられよう。



1層：黒褐色シルト層　Hue10YR3/1表土、耕作土（Ⅰ層）
2層：黒色シルト層　HueN＊1.5/　橙色小礫を混入（Ⅱ層）
3層：にぶい黄褐色シルト層　Hue10YR5/4（キビダンゴⅡ）
4層：にぶい黄褐色シルト層　Hue10YR5/3（キビダンゴⅠ）
5層：黒色シルト層　HueN＊1.5/　橙色小礫やや多く混入（Ⅱ層）
6層：黒褐色～褐色シルト層　Hue10YR3/1～4/4　橙色小礫混入（Ⅲ層）
7層：褐色～暗褐色ローム層　Hue10YR4/4～3/4　拳～人頭大の礫混入（Ⅳ層）

第９図　トレンチ７土層断面図

また、TP3では地表下約3.5ｍでAT層が確認され、TP7・TP8でも試料を水洗した結果、少量のATを確認した。これらは野尻湖調査団による、池尻川低地の［ヌカⅠ］上面の深度とほぼ一致している（野尻湖地質グループ　1990）。

2　遺構と遺物の概要

川久保遺跡は、従来国道18号線沿いの平坦地が遺跡範囲として周知されていたが、今回の調査では、丘陵斜面部や低地部で多量の土器が出土した。遺物の出土状況は各地区によりその様相が異なる。

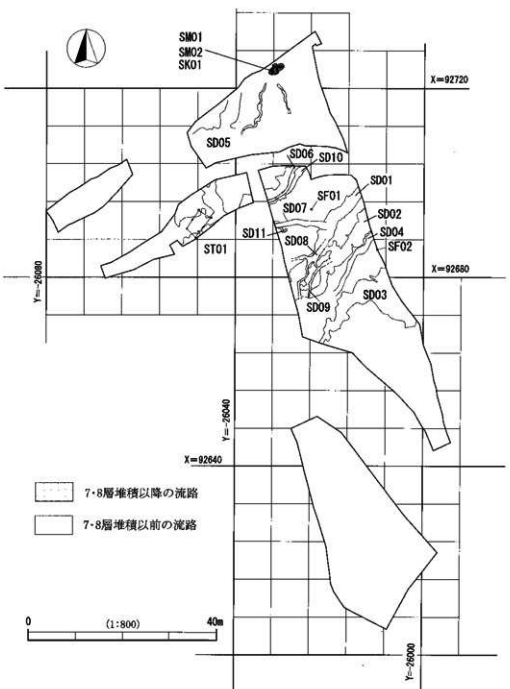
縄文時代の土器や弥生時代末～古墳時代前期の北陸系、東海系など外来系の土器は、丘陵斜面部から多く出土している。特に、縄文時代草創期末～前期を中心とした縄文土器は、６区風成層の柏原黒色火山灰層から多く確認されている。また、後期～晩期の縄文土器は１区西側の斜面上部を中心に低地部分の２区と４区の東側、７区から出土している。包含層は水成層であり、土師器も同一層から出土していることから、これらは斜面上部からの崩落や低地縁辺部からの流れ込みと考えられる。また、中期土器は１点のみ出土した。

弥生時代中期から後期の土器は１区と２区、３区を中心に分布が認められたが全体に遺物量は少ない。古墳時代の土器は１区と低地部の２・３区から非常に多く出土しているが、破片での出土が大半で、甕が多い。前期の外来系の土器はおもに１区の丘陵斜面部から出土し、中期の高坏、坏、小型壺は低地部に集中部分が確認された。また、４区南側や５区など、池尻川低地縁辺部から離れるほど遺物量は希薄となっている。その他、石製模造品や銀環、土製紡錘車、土錘等がわずかに出土したが、特に有意なまとまりはみられない。２区と３区で古墳時代の遺物検出面で焼土と思われる橙～黄褐色土が２箇所検出されたほか、遺構は確認できなかった。また、調査時106基の土坑を検出しているが、これらのほとんどが低地部の９層面で検出され、覆土は遺物包含層である７層の自然堆積である。発掘時の所見によると約1/4は壁面や底部に９層土が堆積しており、土坑の形成時期と覆土や遺物との関係から不自然な部分が多く、人為的な土坑とするには疑問が残る。ピート層が厚く堆積する低湿地での検出であることなどから、自然地形であると判断した。

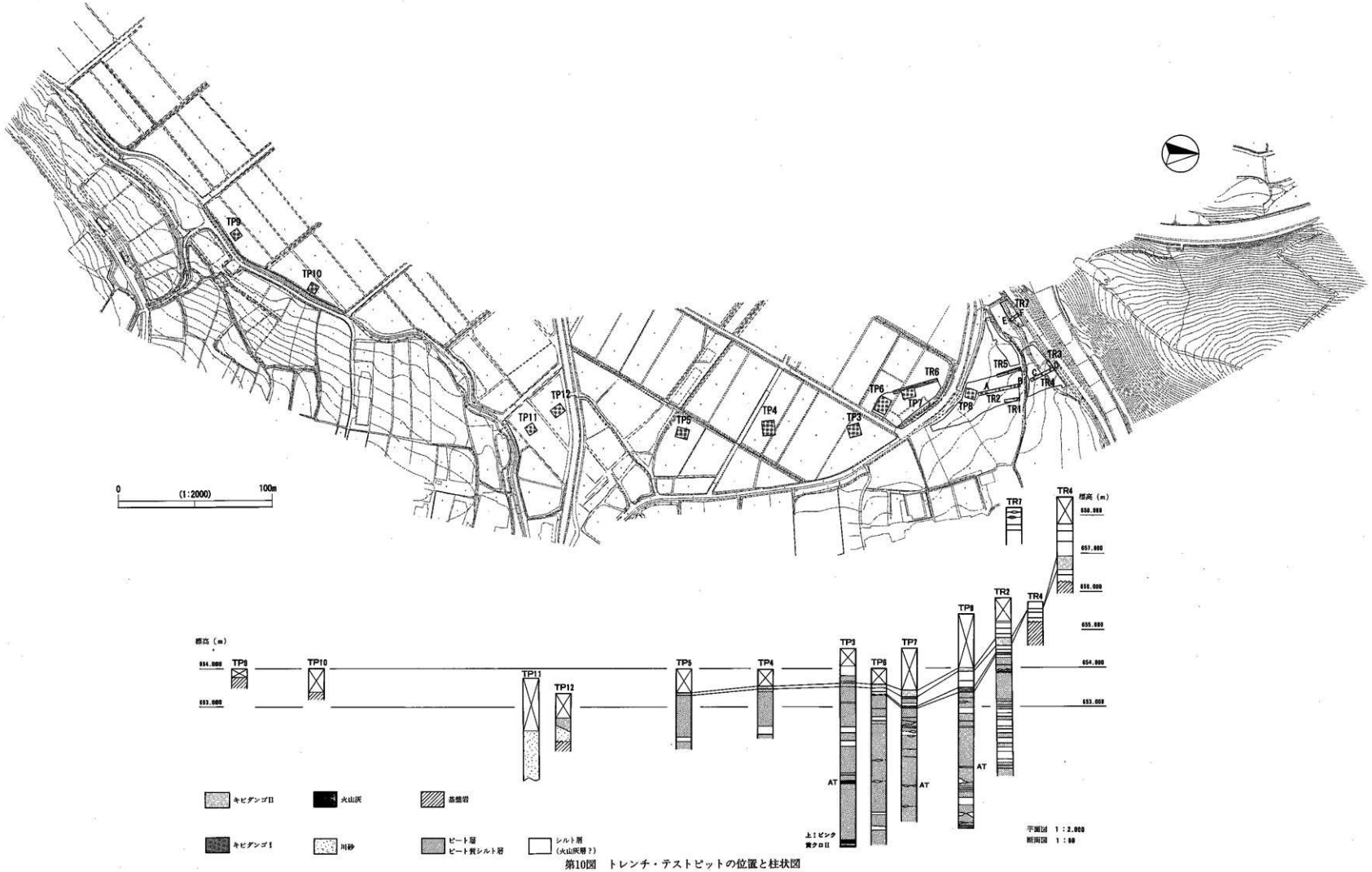
奈良・平安時代では僅かに遺物が出土したのみである。中世以降では時期不明の土坑、掘立柱建物跡が検出され、遺物は珠洲焼、陶磁器、古銭、木製品が少量出土したに過ぎない。

調査区内には北東一南西方向の流路が検出され、古墳時代の遺物包含層を切る流路と、古墳時代の遺物包含層堆積以前の流路が確認された。これらは高低差も少なく極めて不規則な形状を呈し、丘陵斜面部から浅い水域であった池尻川低地に流れ込む自然流路や、水域が退行する渇水期に低地の中心に向かって流れた流路であった可能性が考えられる。

なお、数箇所にテストピットを開けて調査したが、旧石器時代の遺物の検出には至らなかった。



第11図　遺跡全体図



第10図　トレンチ・テストピットの位置と柱状図

第２章　縄文時代の遺構と遺物

１　調査成果の概要

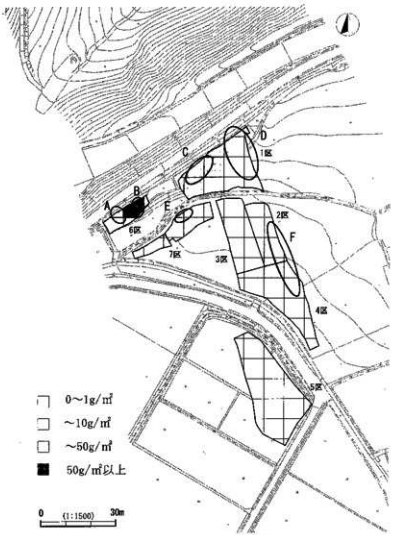
遺構は確認されず、低地部（２区～５区・７区）にある古墳時代の包含層の下層で当該期と推定される自然流路が数条確認された（第11図）。

遺物は５区を除くほぼ全域から出土したが、北側の一段高い丘陵斜面部の調査区（１区、６区）にまとまっている。土器は草創期表裏縄文、前期諸磯ａ式並行期、後期後半から晩期のものがほとんどで、他の時期は数点出土したのみである。石器は石鏃と削器などの剥片石器を中心とした石器組成で、明確な石皿・磨石などは認められず、剥片・砕片もわずかである。剥片・砕片も含めて141点の石器のうち道具類の占める割合は24.8%である。他の集落遺跡に比べ、道具類の割合が高い。

時期別に分布傾向をみると、草創期と前期の遺物は上段の６区のみで出土しており、後期・晩期は１区、２区、４区、７区に分布する。すなわち、前期以前は丘陵斜面部に遺物が残されており、後期以降になり低地部にも遺物がみられるようになる。低地部の水田の下には泥炭層が確認されており、低地部には湿地が広がっていたと想定される。前期以前の遺物が低地部にみられないことから、縄文時代の古い段階には低地部に湿地（または湿潤）が広がっており、後期以降に汀線が退いて、低地部の２区～４区に遺物が残される環境になったと想定している。

２　遺物の出土状況

遺物の取り上げは、調査区一括、集中範囲一括、単点測量による点上げなどがあり、調査区全域にわたる均質なデータは示せないが、第12図にグリッド別の重量分布密度を示した。１区と６区では調査区一括で取り上げているため、細かな分布は示せないが、調査時の記憶をもとに作図している。丘陵斜面部に土器が集中する傾向にあるが、低地部でも比較的多くの土器がまとまる地点がある。これらを便宜的に土器集中Ａ～Ｆとした。土器の接合はそれ



第12図　グリッド別重量分布密度（縄文土器）

ぞれの土器集中範囲内で納まり、異なる土器集中区との接合はみられない。草創期と前期の土器は土器集中A・Bに限定される。

石器は集中した出土状況を示さないが、土器集中Bに削器(19)、石匙(23)、石鏃(8)、礫器が、4区に第13図14～16の石鏃が比較的まとまって出土している。剥片・砕片は106点と少ないが、土器集中BとE周辺に比較的多くみられる。土器集中A内に無斑晶質安山岩が、土器集中B内に流紋岩の剥片・砕片が比較的まとまっており、遺物集中Eの南側には珪質頁岩の剥片類のまとまりがみられる。

3　出土遺物

(1)　石器（第13・14図）

石器34点、剥片82点、砕片24点が出土。石器の器種組成は石鏃18点、石匙2点、削器3点、掻器1点、ピエス・エスキーユ1点、不定形石器1点、二次加工のある剥片5点、微細な剥離がある剥片1点、礫器1点、敲石1点、台石1点である。いずれも同一の包含層より出土しており、層位的に時期を区分することは不可能である。また、弥生時代中期の土器が出土しており、弥生時代の石器も含まれていると考えられる。全出土石器の石材および法量は第3表に示す。

1～17は石鏃で、無茎石鏃（1～8）が8点、有茎石鏃（9～17）が9点、不明1点である。石材は黒曜石5点、珪質凝灰岩4点、珪質頁岩3点、チャート2点、凝灰岩3点、玉髄1点である。10（珪質頁岩）の表裏面には矢柄の装着痕跡と思われる黒色の付着物がみられる。

18は掻器、19～21は削器、22・23は石匙で、21の削器の刃部には顕著な磨耗痕がみられる。不定形石器はヘラ状石器または尖頭器の未製品の可能性があり、18の掻器と類似した珪質頁岩を用いている。敲石としたものは長楕円形の端部に剥離痕がみられるもので、敲打痕は顕著ではない。台石としたものは、平坦面をもつ楕円礫であるが、半分欠損しており、加工・使用痕跡は明確でない。

剥片、砕片、石材組成は第2表に示した。石材名は上信越自動車道関連の信濃町町内の発掘報告書の名称に従った。

(2)　土器（第15図～第17図）

1から5は表裏縄文土器である。いずれも、表面はRLの縄文を縦位施文、裏面は口縁部にRLの縄文を一段横位施文している。1の表面は縦位の縄文施文の後、口縁部と口唇部に横位の縄文施文がみられ、内面は指頭圧痕が顕著に認められる。

6～8は羽状縄文で、いずれも胎土に繊維を含む。7・8は胎土に金雲母を含む。9・10は同一個体と思われ、上半部は円形刺突文と半截竹管による爪形文とコンパス文で、下半部は縄文が施文される。

11～15は同一個体で、胴下半部にRLの縄文を施文したのち、3条一対の櫛歯状の工具による肋骨文とその下端に平行する押引文（連続刺突文）を描いている。また、文様の割付けのための沈線が円形刺突文の下に確認される。

16・17は同一個体と思われる。胴部に隆帯をめぐらせ、胎土に繊維を混ぜ表面はていねいに磨かれている。17は波状もしくは突起部分であることから、16に示したような単純な平縁の器形ではなく、波状口縁もしくは突起をもつ浅鉢であろう。

18は本遺跡では唯一の中期後葉の土器である。

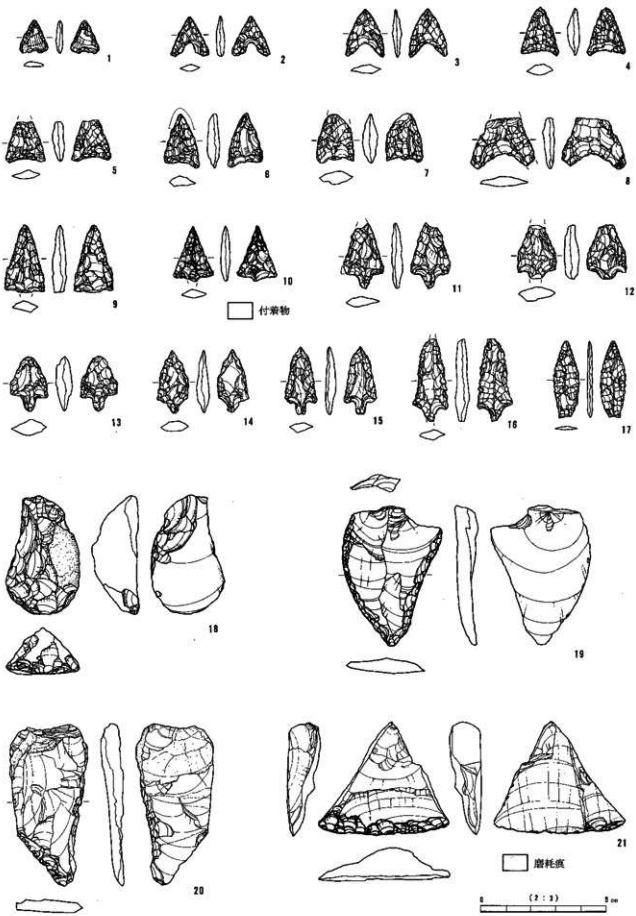
19～69は後期・晩期の土器である。19・20は後期後葉の羽状沈線文土器である。21は晩期から弥生時代に属する可能性があり、仲町遺跡県道地点に類例がみられる。22～25は無節の縄文で棒状工具による沈線または刺突がある。27は棒状工具による沈線と刺突がみられ、いずれも晩期前半である。28はRLの縄文施文後に太い沈線で工字文状の区画をしたものと思われる。30は口縁部に横断面三角形の貼り付けをした

第2表　川久保遺跡出土の剥片と砕片

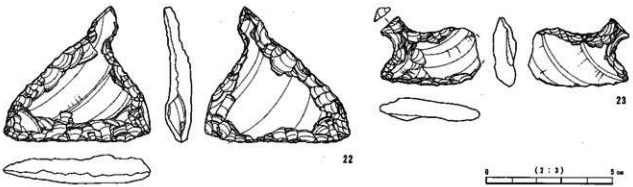
石　材	剥　片	砕　片
チャート	7	5
砂岩	2	
珪質頁岩	12	2
凝灰質頁岩	16	
珪質凝灰岩	6	6
黒曜石	8	6
凝灰岩	7	1
無斑晶質安山岩	9	
玉髄	10	4
蛇紋岩	4	
水晶	1	
合計	82	24

無文土器である。31は3本のキザミがある小突起をもち内面に浅い沈線がある。32は後期の浅鉢と思われる。

33～48は縄文施文の土器で、確実に後期または晩期に比定できないものも含まれる。34・35・40・44は無節、43はLR、他はRLの単節縄文である。36と46、38と39、41と42と47、45と48がそれぞれ同一個体と思われる。33は緩い波状を呈し、34・35は波状の小突起を有する。なお、36・37・41～44・46・47は胎土が白色をおびていて、北陸系の胎土といわれている。50～56は無文土器である。54・55は輪積み痕を残すが、他の外面は粗いナデ調整が施される。52は口唇に棒状工具キザミがみられ、53は小突起がある。また、無文土器にはいわゆる北陸系の胎土は認められない。57・58は注口土器の注口部である。59・60・64は3単位の波状口縁である。64は波頂部の貼り付けが欠損しており、胴部上半に縄文を施文したのち、弧線を組み合わせた図形を横に配し、その間の縄文を磨り消している。61～63は同一個体で、2個一対の瘤状の貼付文と細い集合沈線で描かれた文様があるが、器面が脆く文様が明確でない。65はLRの縄文で、外面は丁寧に磨かれているが、胴部内面はケズリ痕が顕著である。



第13図　縄文時代の石器１

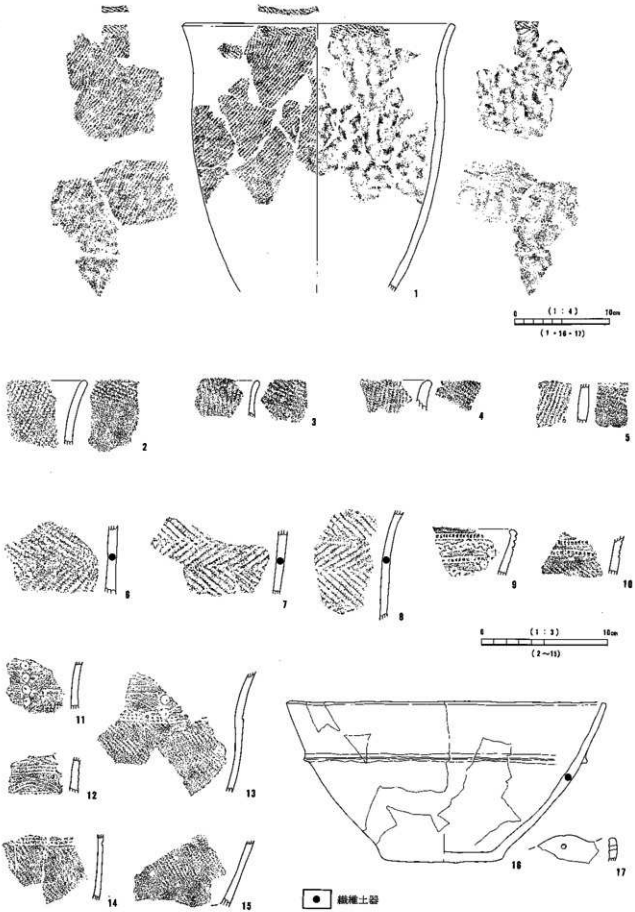


第14図　縄文時代の石器２

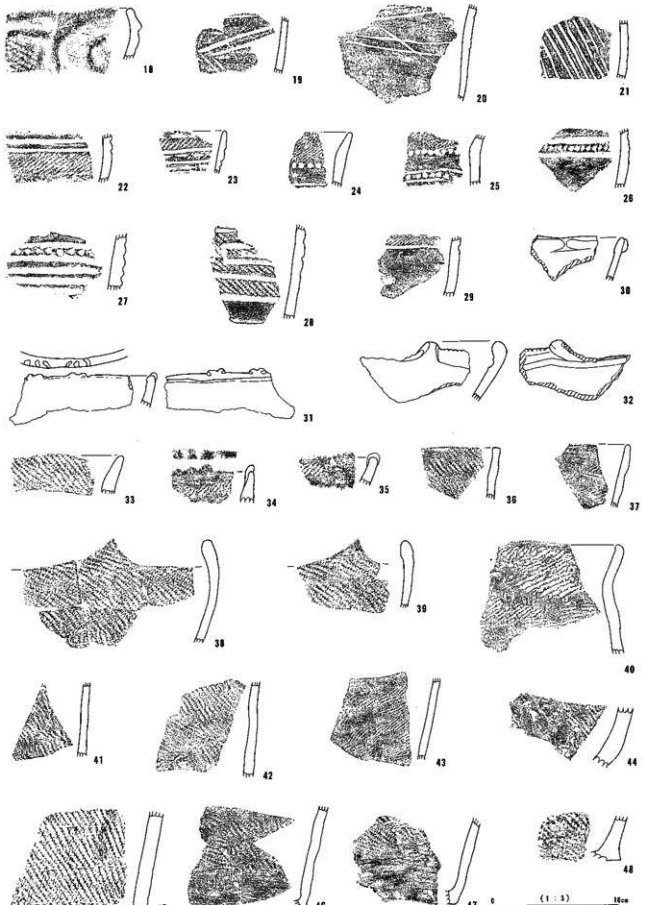
第３表　川久保遺跡出土の石材観察表

図版番号	地区名	遺構名 グリット	層位名	器種名	石　材	欠損 状況	重さ (g)	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	取上 番号	整理 番号	備　考
第13図-1	7区	N-19	8層	石鏃	黒曜石	完形	0.34	1.34	1.13	0.31	3364	4028	
第13図-2	6区	N-12	6層	石鏃	チャート	完形	0.48	1.62	1.53	0.3	3219	4024	
第13図-3	7区	N-19	8層	石鏃	凝灰岩	完形	0.67	1.92	1.57	0.4	3382	4027	
第13図-4	7区	N-20	8層	石鏃	黒曜石	完形	0.93	1.86	1.51	0.47	3259	4021	
第13図-5	7区	N 20	8層	石鏃	黒曜石	欠損	0.96		1.58	0.44	3351	4022	
第13図 6	1区	O-02	5層以上	石鏃	黒曜石	完形	1.23	2.04	1.44	0.48	2662	4009	
第13図-7	1区	z	10層上面	石鏃	黒曜石	欠損	1.36		1.5	0.55		4014	
中13図-8	6区	N-12	2～5層	石鏃	珪質凝灰岩	欠損	1.36			0.45	3218	4023	
第13図-9	3区	O-19	9層	石鏃	珪質凝灰岩	完形	1.87	2.69	1.57	0.54	2807	4006	
第13図-10	2区	O-19	7層	石鏃	珪質頁岩	完形	0.87	2.21	1.59	0.38	456	4010	付着物あり
第13図 11	1区	z	10層上面	石鏃	凝灰岩	欠損	1.45		1.6	0.44		4015	
第13図-12	1区	N-10	5層以上	石鏃	珪質頁岩	欠損	2.03		1.6	0.63	1595	4011	
第13図-13	2.3区	SD2		石鏃	チャート	欠損	1.66		1.48	0.66		4008	
第13図-14	4区	T-02	7層	石鏃	珪質凝灰岩	完形	1.08	2.49	1.21	0.5	3047	4007	
第13図-15	4区	T-08	7層	石鏃	凝灰岩	完形	1.17	2.7	1.26	0.38	3048	4013	
第13図-16	4区	T-03	7層	石鏃	珪質凝灰岩	欠損	1.98		1.38	0.6	3027	4012	
第13図-17	7区	N-15	7層	石鏃	珪質頁岩	完形	0.59	3.08	1.01	0.22	3253	4026	
第13図 18	3区	SD10	SD10-9層	搔器	珪質頁岩	完形	22.34	4.76	2.92	1.83	2909	4004	
第13図-19	6区	N-12	6層	削器	チャート	完形	13.91	5.58	3.95	0.89	3216	4025	
第13図-20	2区	O-24	8層	削器	チャート	完形	15.24	6.44	3.17	0.77	946	4003	
第13図-21	1区	O-07	5層以上	削器	珪質頁岩	完形	18.05	4.51	5.2	1.29	2751	4002	
第14図-22	4区	T-04	9層	石匙	チャート	完形	26.1	5.42	5.82	0.96	2811	4005	
第14図 23	6区	N-12	2～5層	石匙	珪質頁岩	完形	8.57	3.03	4.01	0.89	3217	4029	
	1区	O-03	5層以上	石錐	玉髄	欠損	0.28				2711	4001	
	3区	SD10	SD10-6	re.FI	玉髄	完形	14.17	5.01	2.98	1.42	2907	4016	
	4区	T-09	7層	u.FI	無斑晶質安山岩	欠損	25.39				3020	4017	
	1区	J-22	7層	不定形石器	珪質頁岩	完形	21.92	4.88	2.72	1.81	2623	4018	ヘラ状石器か？
	2区	一括	7・8層	re.FI	珪質頁岩	完形	19.95	6.05	1.31	2.38		4019	
			表採	PEQ	チャート	完形	5.16	2.31	2.03	1.14		4020	
	6区	N-11	6層	re.FI	黒曜石	完形	3.27	2.76	1.78	0.79	3241	4030	
	7区	N-15	8層	re.FI	無斑晶質安山岩	完形	3.71	2.85	2.21	0.55	3372	4031	
	6区	N-12	6層	re.FI	珪質凝灰岩	完形	33.74	5.11	6.07	1.62	3557	4032	
	6区	N-12	2～5層	礫器	砂岩	欠損	192.4		7.96	2.17	3073	4033	
	1区	O-06	5層以上	敲石	輝石安山岩	完形	256.9	12.69	4.98	3.17	1638	4034	
	1区	一括	8層	台石？	輝石安山岩	欠損	2529		13.4	7.75		4035	

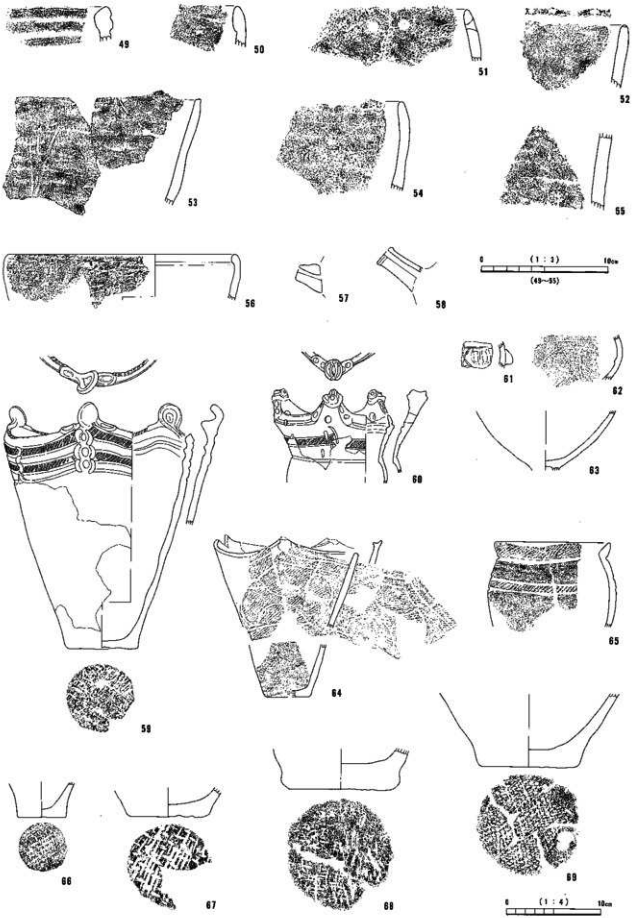
法量欄の空白部は欠損のため計測できないためである



第15図　縄文時代の土器1



第16図　縄文時代の土器２



第17図　縄文時代の土器３

第３章　弥生時代・古墳時代の遺構と遺物

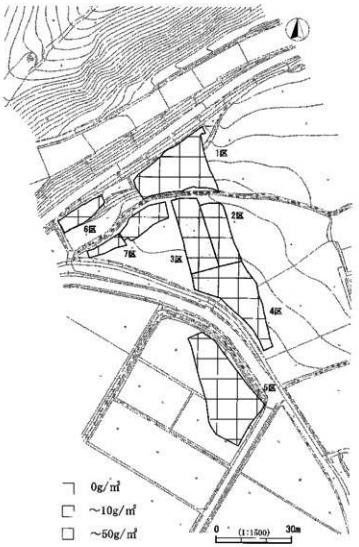
１　調査成果の概要

遺構は、焼土跡２基が遺物包含層中より検出されたのみであるが、多量に出土した古墳時代の遺物に関係した遺構であると想定した。

遺物は弥生中期・後期の土器が少量と、多量の古墳時代の土師器が出土している。このほかに、古墳時代の土錘・土製紡錘車・石製模造品・銀環などが数点出土した。弥生時代～古墳時代の遺物は調査区のほぼ全域にみられ、特に低地部分には全出土量の約70％近くが集中し、その大半は７層（黒色ピート質シルト層）から出土している。

古墳時代では、前期から中期の土師器が主体を占める。前期には、外来系の土器の混入がみられ、畿内、東海系の土器と共に、多量の北陸系の土器が出土し、越後と信濃の交流が窺える貴重な資料となった。S字口縁甕や千草甕といった外来系土器など古墳時代前期の遺物は丘陵斜面部の１区に多い一方で、中期の坏、高坏、小型壺は低地部の２・３区に集中し、時期により遺物の分布範囲が異なる傾向がみられた。

２・３区では当該期と推定される北東―南西方向の自然流路が多く検出されているが、自然流路底部の高低差が少ないことや流形から類推しても、多量の遺物の流れ込みは考えにくい（第11図）。また、遺物も流路に影響された出土状況を示していない。出土状況の違いが、古野尻湖だった池尻川低地の汀線の変動に関係があったとすると、古墳時代前期には１区斜面の中段付近まで水域が広がっていたが、古墳時代中期になると２・３区まで汀線が後退したと推定できる。２・３区で多量に出土した土器は、南ほど希薄となり、５区南側ではほとんど出土していない。つまりこの時期４・５区はまだ水域であって、水辺となった２・３区付近で祭祀や土器の廃棄が行われた可能性が考えられる。



第18図　グリッド別重量分布密度（弥生土器）

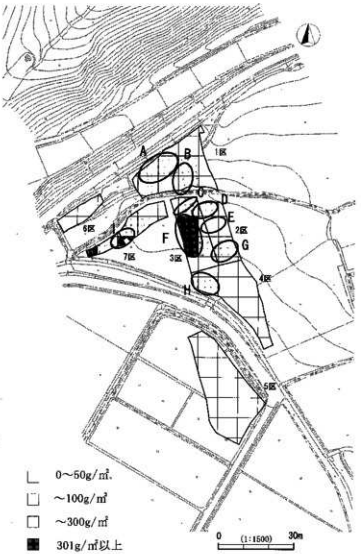
２　遺構と遺物の出土状況

弥生時代　中期の土器は２・３・４区の低地部に分布し、他の調査区にはほとんどみら

れない。後期には1区などに分布を広げる傾向にあるが、出土量は少なく、特に有意なまとまりは見出せない（第18図）。

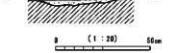
古墳時代　遺物の取り上げ方法は調査区によって異なり、均質なデータを示すことができなかったため、大まかではあるがグリット別の重量分布密度図（第19図）を作成した。当該期の明確な遺構は検出されなかったが、遺物がまとまって出土している地点が9箇所確認され、A～Iとした。第22図に各集中地点で出土した土器を示した。

これによると丘陵斜面部のA地点では北陸系の甕や、タタキ甕、S字口縁甕など外来系の古墳時代前期の土器が多く出土している。また1区の包含層一括で取り上げられた土器も同様の傾向が窺える。低地部では外来系の土器や前期に該当する土器も少量みられるものの、中期が中心となる。特に約70%がF地点から出土し、坏・高坏・小型壺が集中する。高坏は坏部にくらべて脚部の出土量が極めて少ない。C地点は自然流路SD6・SD10出土のものが多く、北陸系の前期土器に混じって坏類の混入もみられるが、地形の変換点付近であることから丘陵斜面部からの崩落も考えられる。E・G地点でも前期土器と中期・後期土器が混在するが、主体は中期土器である。



第19図　グリッド別重量分布密度
（弥生時代後期～古墳時代の土器）

2・3区遺物包含層中より2基の焼土址が検出された（第11図・第20図）。3区より検出されたSF01は35cm×45cmの円形で、厚さ2cmの橙色～褐色土である（第20図）。表面に明確な赤化や硬化部分は認められないが、土器集中部分と同一面であり、当該期の遺構と想定した。SF02は2区調査区境付近で黄褐色土が不規則に分布した状態で検出されたが詳細は不明である。



第20図　SF01

6区では柏原黒色火山灰層中から2箇所の赤褐色土が検出されている。これらは硬化面を伴わず、プランもあまり明確ではない。柏原黒色火山灰中で検出される、縄文時代早期の火山灰の可能性が考えられる。

3　出土遺物

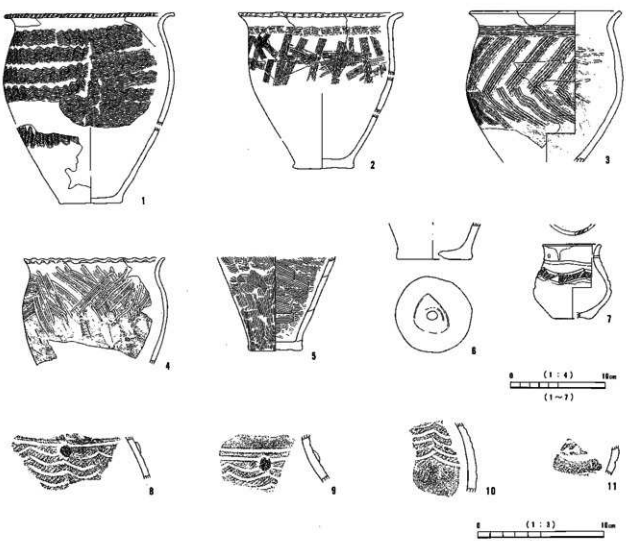
(1)　弥生土器

中期の土器（第21図）

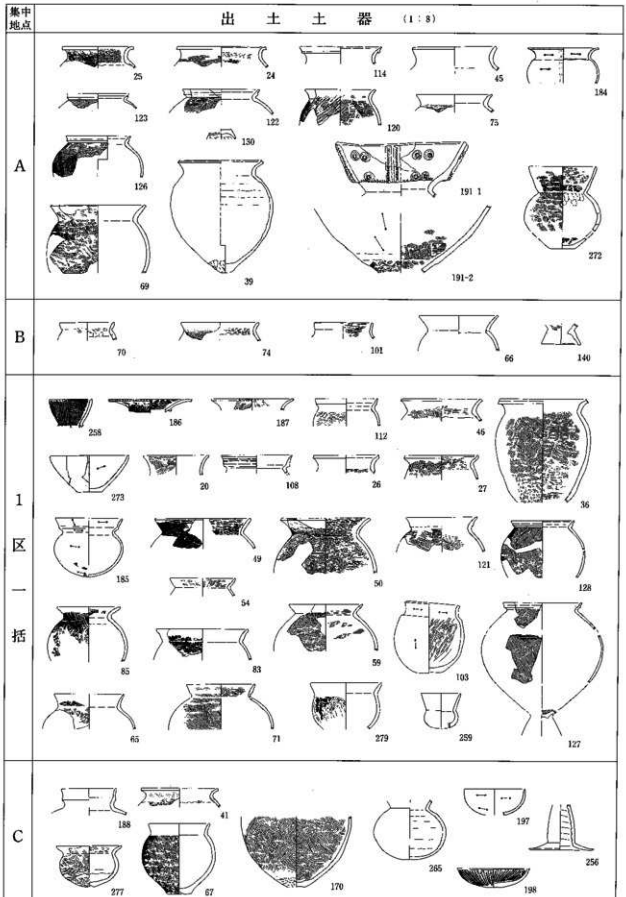
第21図1～11が中期の土器で、5以外はすべて栗林式である。1～5は甕形土器である。1は口唇部に

LRの縄文、胴部に８本一単位の櫛描波状文が施文される。胴部内面には浅いハケ目がみられる。２は頸部に簾状文、胴部上半に不規則に交差した浅い直線文がみられる。これらは４本一単位の櫛描文であるが、浅く明瞭でない。口唇部は剝落しているが、刺突列がめぐっているものと思われる。内外面ともにハケ目調整はみられない。３はハケ目による器面調整の後、外面はハケ目をナデ消し、５本１単位の櫛描文を描く。横羽状文の後に頸部の直線文を施文する。胴部内面には浅いハケ目が明瞭に観察される。４はヘラ状工具もしくは竹管状工具による縦羽状文を意識した文様構成であろう。内外面に器面調整のハケ目が認められ、胴部上半の縦羽状文はハケ目をナデ消した後に施文されている。口唇部は小波状を呈する。５は内外面にハケ目調整が顕著な甕形土器で、器形から小松式と考えられる。６は焼成後に底部穿孔された甕形土器で、磨耗著しいが内面にわずかにハケ目がみられる。

７～11は壷形土器である。７は頸部に一本の沈線、胴部にLRの縄文を充塡した一帯の連弧文がみられ、口唇部にわずかな縄文が認められる。口縁部の穴は直径2.5㎜ほどの焼成前の穿孔であるが、欠損のため、単独か対になるのかは不明である。８～10は壷形土器の胴部で、LRの縄文地文に重弧文を描き、ボタン状の貼り付けをしている。11は重弧文の間にLRの縄文と刺突列がみられる。

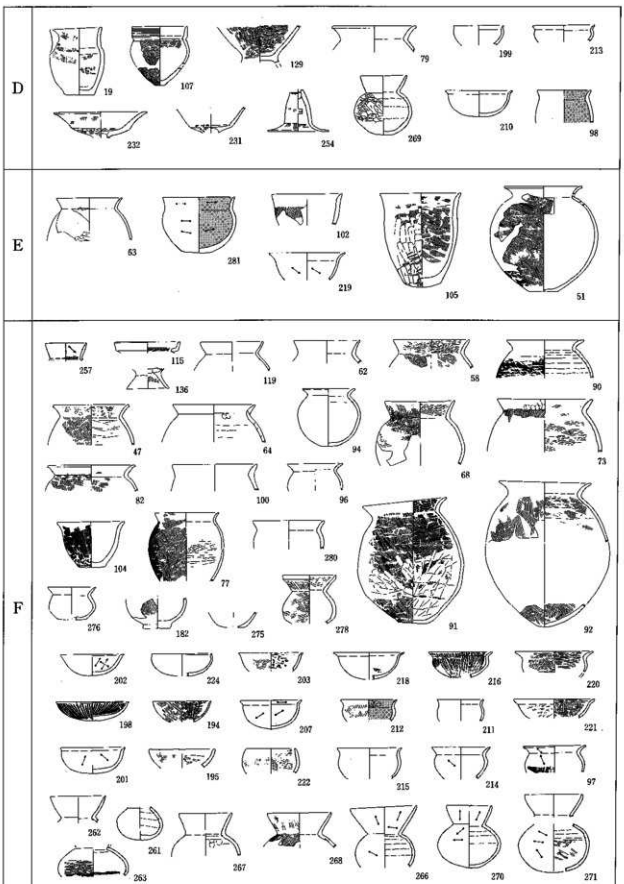


第21図　弥生時代中期の土器



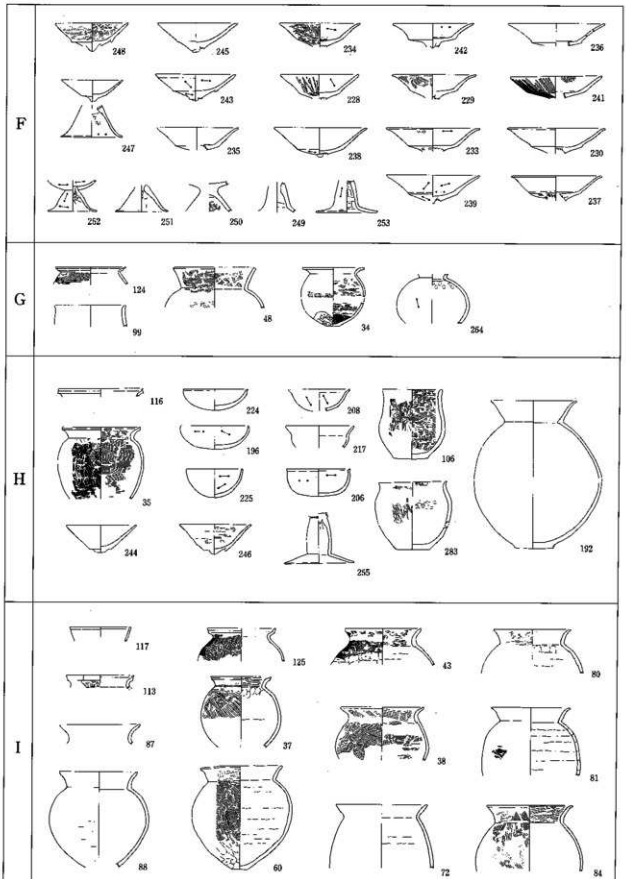
(1：8)

第22図　集中地点別出土土器その1（弥生時代後期～古墳時代）



（1：8）

第22図　集中地点別出土土器その２（弥生時代後期～古墳時代）



第22図　集中地点別山土土器その３（弥生時代後期～古墳時代）　(1：8)

後期の土器（第25図、第31図107、第33図183・184、第36図257・258、第37図273・274）

第25図１～18は、いずれも櫛描波状文を施文した甕形土器である。19～21は後期後半の箱清水式土器の系譜を引いた古墳時代初頭の土器であるが、本項で触れる。

１～４は口縁部で受口状のもの、くの字状に外反するもの、折返し口縁などがみられる。６・７・９は内外面に器面調整のハケ目が顕著に残る例で、同一個体の可能性がある。８・11は頸部が屈曲しており、簾状文が胴の肩部に施文される。12は７本一単位の簾状文と波状文が施文され、口縁部は無文となる。13は６本一単位の簾状文と波状文を施文し、頸部に直径１cmほどの貼り付け文を付ける。15は８本一単位の簾状文と波状文が施文され、波状文の下端部に櫛歯状工具による鋸歯文がみられる。頸部には円形刺突が中心にある直径１cmほどの円形貼付文がある。胴下半部にはケズリ調整がみられる。16は６本一単位の簾状文と波状文がみられるが、波状文は乱れており、簾状文の下の胴部にはまばらに波状文が認められるのみである。17は３本一単位の間隔の広い櫛描文が施文され、胴下半部はハケ目または擦痕がわずかに観察される。18は７本一単位の簾状文と波状文で、２段の簾状文の下部は１条の波状文がみられる。胴部は無文のミガキ調整のみと思われるが、二次焼成により器面が脆弱なため断定できない。19～21には櫛描波状文がみられず、ハケ目調整のみであり、古墳時代初頭に属すると思われるが、器形は箱清水式の甕形土器の系譜上にあると考えられる一群である。12は中期から後期初頭、13・15・18は後期前半、８・11・19～21は弥生後期末から古墳時代初頭の土器である。

183は壷形土器で、小破片であるため頸部の文様構成は不明であり、直線文ではなくＴ字状文である可能性がある。184は広口口縁壺で内外面が赤彩されている。273は赤彩された鉢形土器、274は高坏または鉢形土器で内面にわずかに赤彩が残る。

以上、信州系の土器では甕形土器が主体を占め、それ以外の器種は図示したものがほぼその全容である。本遺跡の土器組成は、他の一般的な集落遺跡にくらべ、甕形土器の比率が圧倒的に多いという特徴を示している。

弥生時代末から古墳時代初頭では、上記の信州系の土器のほかに東海系、北陸系の土器が出土している。第31図107は有段口縁の擬凹線文系土器で、北陸地方の月影式に対比される。第36図257・258は東海地方のヒサゴ壺の口縁部で、いずれも赤彩されている。258は口唇部に内そぎ状の面取りがなされている。

(2)　土師器

器種は甕、壺、坏、高坏、鉢などがある。

甕形土器

口縁部の形態により大まかにＡ類～Ｇ類に分類した（第23図）。Ｆ類は口縁形態による分類ではないが外来系の土器であるため分類に加えた。

Ａ類：口縁端部を面取りした、「く」の字～「コ」の字状口縁をもつ甕

Ａ１：口縁部が外反し、上方あるいは下方へ端部のつまみ出しがみられる。

Ａ２：口縁部は直立気味で、端部は上方つまみ上げにより尖り気味の断面形をもつ。

Ａ３：端部の面取りは平坦な角状で、つまみ出しはみられない。

Ｂ類：口縁端部の丸い、「く」の字状口縁をもつ甕

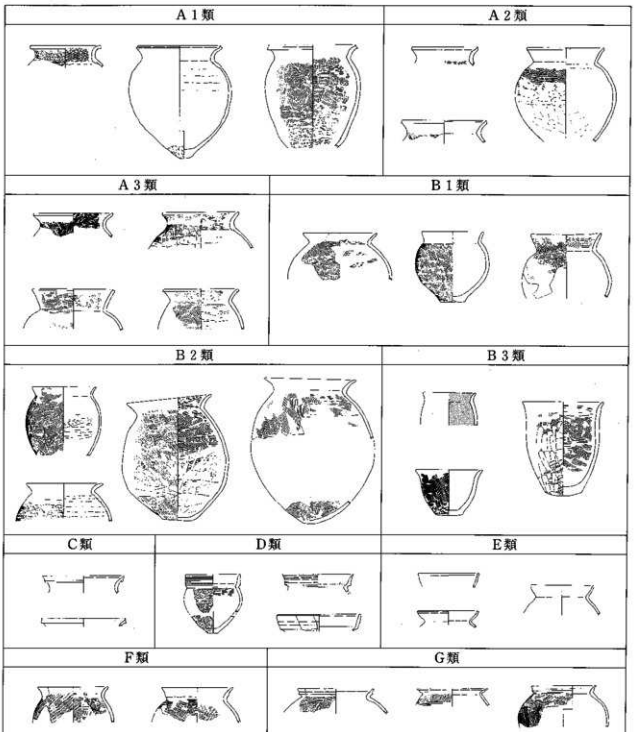
Ｂ１：口縁部が直立する単口縁

Ｂ２：口縁部が外反する

Ｂ３：頸部の屈曲著しく緩い

Ｃ類：受け口状の口縁で、端部がつまみ出され内湾する甕

Ｄ類：有段口縁をもつ甕　（北陸系）



(1：8)

第23図　甕形土器の口縁部形態分類

E類：薄手で口縁部が内湾する甕　(畿内系)

F類：胴部外面にタタキ調整が認められる甕　(畿内系)

G類：口縁部がS字あるいは「く」の字状を呈する台付甕　(東海系)

A１類（第26図22～25・32～39）

北陸地方北東部に多出するものである。

22～25は口縁端部を面取りして下端部をつまみ出し、「コ」の字状に著しく外反させたものである。

22・23は口縁部が短く外面はヨコナデ調整を行っている。24は下方向へのつまみ出しが顕著で、頸部から口縁部にかけて縦位のハケ調整が行われている。32は口縁端部に細かな横位のナデ調整が認められ、頸部から胴部にかけてはハケ調整後ナデを行い、さらにハケ調整が行われている。33・36は口縁端部の上下のつまみ出しが顕著で、口縁部はヨコナデが行われている。長胴の器形である。

34・35・37～39は口縁部を「く」～「コ」の字状に外反させ、端部を上方につまみ上げたものである。34は小型の甕で、口縁部～胴部はナデ調整、底部付近はケズリが行われている。底径は約2.5cmと小さい。37は口縁内面に横方向の粗いハケ調整が行われ、頸部には指頭圧痕が認められる。胴上半部は粗いハケ調整がなされているが、下半部はナデ調整となっている。胎土はにぶい褐色で白色の岩片を多く混入する。39は内外面ともナデ調整が行われ、ケズリにより極めて小さい底部をもつ千種甕である。口縁端部はやや内側につまみ上げ、胴部内面には輪積み痕が残る。

22・23・25・33・34・36・39は、浅黄橙色～にぶい橙色の軟質の胎土で、径２～３㎜の石英やチャートなどの円磨された粗砂を多く混入する。

Ａ２類（第26図26～31・40）

口縁部は直立気味であるが、頸部が緩い「コ」の字状や端部がやや内湾気味のものもある。端部を面取りし、上方をつまみ上げることによって尖り気味の口縁部となっている。完形のものは少ないが、27・28は長胴形または倒卵形と考えられる。口縁部は内外面ともナデ調整されているものが多い。40は胴上半部が横位のハケ調整で、下半部はケズリによる調整が行われている。底径の小さな底部をもつと考えられる。

26・29・30は灰白～灰褐色を呈し、31は海綿状骨針を混入し、これらは北陸系の土器と考えられる。

Ａ３類（第27図41～51）

口縁端部の面取りは平坦で、つまみ出しはみられない。41～43・45は緩い「コ」の字状口縁で、端部がやや尖り気味であるがつまみ上げはみられない。47の胴内面はケズリ調整が行われている。48～50は長口縁でくの字状を呈する。49は口縁内面に横位のハケの後ミガキが行われており、外面は細かなハケ調整である。50は内面に横位のミガキが行われ、外面はハケ調整の後、胴下半部にかけて縦位のミガキがみられる。51は外反する口縁をもつ球胴形の器形で、底部は径６㎝程の平底である。

42・46は灰白色を呈し、45・47は浅黄橙で石英やチャートの円磨された粗砂を多く混入する。北陸系の土器と考えられる。

Ｂ１類（第27・28図52～73）

52は頸部内面に接合痕がみられる小型甕である。

53～55・57・59は口縁部が直立し、頸部が「く」の字に強く屈曲する。54・56・58は口縁内面が横位のハケ調整で、外面は口縁端部まで縦位の細かなハケ調整が行われている。60は歪みの大きい器形で、端部の調整も一部面取りが行われている。砂粒子を含む軟質の胎土で、胴下半部はケズリによる調整で底部を作り出している。北陸系土器の系譜に属するものと考えられる。61～68は口縁部が直立～やや外反気味で、端部が先細り、頸部の屈曲は比較的緩い。67は小型の甕で、胴部は細かなハケ調整がみられ、底部にはわずかにケズリが行われている。70～73は口縁部がやや肥厚し頸部にわずかに窪みが認められる。72は内外面ともナデ調整で、73は口縁部外面の指頭圧痕を消すように頸部付近にのみハケ調整が行われている。

67は海綿状骨針、65・71は円磨された石英やチャートの粗砂を混入し、北陸系の土器と考えられる。

Ｂ２類（第28・29・30図74～97）

口縁部が外反するものを一括したが、端部や口縁部の形状は様々である。

75～78は口縁部が短く外反し、端部は先細りする。76・77は頸部の屈曲が緩く長胴形または倒卵形と考えられる。76は内外面ハケ調整で、口縁部はハケの後ナデ調整が行われているが、かなり粗雑な端部調整

である。79～92は外反する長い口縁部をもち、端部は丸く収められるか、より外反する傾向がある。80は頸部内面に指頭圧痕がみられる。81は倒卵形で、内面には輪積み痕が残る。84は口縁内面に横位のミガキが行われ、外面は縦位のハケ調整である。85・90は肥厚した口縁部が大きく外反し、胴外面は細かな縦位のハケ調整が行われている。85は球胴形の小型甕で、頸部には強いハケ調整がみられる。90は輪積み痕が顕著で、外面にも痕跡が残る。88は胴上半部までナデ調整で、底部は欠損しているが胴下半部には横方向のケズリがみられる。89は胴部が欠落しているが、同一個体で、底部付近はケズリが行われている。石英・雲母を多く混入するにぶい赤褐色の胎土をもつ。91は器形の歪みが著しく、胴部内面には輪積み痕が残り、ハケ調整の後ケズリによる器面の調整がみられる。92も胴部の一部を欠落するが、底部はほぼ丸底で内面に薄状の工具痕が残る。77の胴部と92の口縁内外面にはモミ痕が残る。93・94・95は底径2㎝～4㎝の底部をもつ球胴甕で、95は底部にケズリが行われている。96・97は胴下半部が欠落しているが、93・94に類似した球胴甕と考えられる。

にぶい褐色の胎土をもつものが多い。

B３類（第30図98～106）

98は内面に黒色処理が施され、焼成は良好で緻密である。胎土中にパブル型の火山ガラス（AT）を混入し、特に内面には顕著にみられる。101・103は端部が面取りされた広口の甕で、101は内面に横位のハケ調整が行われている。103は口縁内外面と胴部にミガキが行われ、内面には縦位のまばらなハケ調整がみられる。102・104・105も広口の甕で、口縁部端部がやや外反する。104の底部にはハケ調整がみられる。105はハケ調整の後、ケズリが胴部から底部にかけて行われている。また底部と胴下半部には幅2㎜、長さ2㎝位の細長い薬状の圧痕がみられる。106は灰白色の軟質の胎土で胴下半部にススが付着している。

C類（第31図114・116）

114は灰白色の胎土で、口縁部を折り返して成形した後、端部を薄くつまみ上げたものと考えられる。116は赤褐色粒子が目立つ茶褐色の胎土で、S字口縁甕の可能性も考えられるが小片のため不明である。

D類（第31図107～113・115）

口縁部に擬凹線文を施すものと、ヨコナデ調整のみのものがあり、北陸地方南西部に多出するものである。

108は107と同様に有段口縁の擬凹線文系土器で北陸地方南西部の月影式の系譜に属する。109は擬凹線文を欠きヨコナデ調整が行われている。112・113も短口縁であるが同様のヨコナデ調整である。110は端部が面取りされナデ調整が行われているが、わずかに擬凹線文状の文様が観察される。111の口縁外面は強く粗いヨコナデによって多くの条線がみられる。115は端部が面取りされた有段口縁で、ヨコナデ調整が行われているが、頸部内面には細かなハケ目がみられる。

E類（第31図117～119）

口縁部が内湾するいわゆる布留甕で、117は口縁端部をわずかに内側に折り返し、118は口縁端部を丸く肥厚させている。灰黄褐色の胎土に細粒の石英・長石・雲母を多く混入し、薄手で内外面とも丁寧なナデ調整が行われている。

F類（第31図120・121）

口縁部はナデ調整が行われているが、121は粘土を押し下げることによる口縁下端部の肥厚がみられる。胴部内面は比較的粗いハケ調整で、外面は120は右上がり、121はヨコ方向～やや左上がりのタタキ調整が行われている。

G類（第31・32図122～141）

口縁部がS字状をなす台付甕で、器壁の厚さは薄く、全体の器形が復元できるものはほとんどない。口

縁部と胴部内面はナデ調整が行われ、頸部から胴部にかけては細かなハケ調整がなされている。123・124・126・127は胴上半部の縦位のハケ調整の後、横位のハケ調整が行われている。122は頸部直下に横位のハケ調整がみられる。123～126・128は口径14cm前後の中型のもので、128には横位のハケ調整がみられない。125はやや受け口状の口縁形態をもつ。胎土は灰白色またはにぶい橙～褐色で、石英・長石・雲母を多く混入するものが多い。129は内面ナデ調整の後、底部付近までハケ調整がなされ、さらにまばらなミガキ調整が行われている。外面はハケ調整後ナデ調整を行い、縦位のミガキがみられる。胎土はにぶい橙色で他とくらべて器壁が厚い。130～141は台付甕の脚部分である。131・132・137の外面は細かなハケ調整が行われている。134・140・141の脚端部は内側への折り返しがみられる。

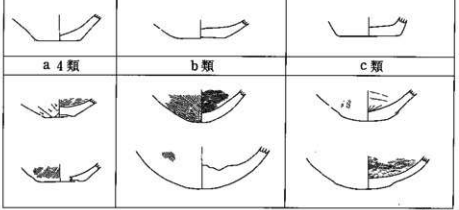
甕形土器の底部（第32図）

甕・壺は完形で出土するものが少ないため、底部のみで器形を類推することはできないが、外面にハケ・ケズリ調整のみられるものを中心に、甕形土器の底部として形態的な分類を行った（第24図）。

ａ類：平底
　ａ１：底側面内面が中心から緩やかに立ち上がる
　ａ２：底側面、内面とも立ち上がり極めて緩やか
　ａ３：底側面内面に稜を作って立ち上がる
　ａ４：底外面中心の窪みやドーナツ状の粘土のはみ出しがみられる
ｂ類：丸底
ｃ類：底部外面にふくらみがみられる

ａ１類（142～153）

142～146は３cm前後もしくはそれ以下の小さい底径で、142は横方向のタタキ調整、143・144・145はハケ調整、146はケズリにより底部を作り出している。器形がわかるものでは第26図34・39・第27図60・第31図107が該当する。147～153は５cm前後の底径の大きなもので、149・150は外面ケズリによる調整が行われている。



第24図　土器の底部形態分類

a 2類（154～157）

底径が大きく外面ナデ調整のものが多い。第27図51が該当する。

a 3類（158～161）

底径の大きなものが多く、胎土は褐色を呈するものが多い。

第29図91・第30図104が該当する。

a 4類（162～170）

162・164・170は外面にケズリ調整が行われている。164は胎土中に海綿状骨針を混入する。第28図67が該当する。

b類（171～177）

171・172・175はチャート・石英・長石などの円磨された粗砂を含む北陸系の胎土である。173・176は外面に細かなハケ目がみられる。175は厚手で、内面に指頭圧痕が強く残る。

c類（178～180）

底部外面に円形のふくらみをもち比較的大型の甕と考えられる。

181は底部に平坦面がみられるがb類に属すると思われ、182はa 4類の範疇と考えられる。

抽出した底部のうち90%近くがa類に属し、約70%をa 1類、a 2類が占める。このうち底径2～3cmの小さな底部をもつものの大半は円磨された粗砂を混入する北陸系の胎土である。b類は約8%で、そのうち1/3が北陸系の胎土である。c類は白色岩片を多く混入するにぶい橙色の胎土で、全体の2%程度である。

壺形土器1（第33図183～192）

185～191は有段口縁をもつ壺である。

185は小型の丸底の壺で、底部付近には細かなハケ目が残るが、胴部外面はナデ調整後ミガキ調整が行われ、内面はナデ調整である。186・187は口縁部が大きく外反し、端部にキザミが施されている。外面はナデ調整後、中位まで細かな縦位のハケ調整が行われ、内面は横位のハケ調整が端部付近までである。186は有段部分に細い粘土帯を貼り付け、端部と同じキザミが施されている。北陸南西部に系譜をたどることができよう。191-1・191-2は同一個体である。口縁端部は面取りされ、内外面はナデ調整の後ミガキが行われていると思われるが、器面が磨耗しており断定できない。外面は縦方向の2条一対の棒状粘土帯によって5分割され、粘土帯にはキザミが施されている。粘土帯の間には、中心に円形の刺突がある直径2cm位の円形貼付文が4個もしくは3個を1単位として施されている。また有段下端部には粘土帯や円形貼付文の後でキザミが行われている。なお、スクリーントーンを貼付して示した部分は欠損部分を復元したものである。底部付近は内外面にハケ調整がなされ、胴部から底部に向かって粘土のはみ出しがみられる。底部穿孔されている可能性も考えられる。192は歪みの大きい器形で器面が磨耗しているが、ハケ調整後ナデ調整が行われているものと思われる。

坏（第31・32図193～227）

193～197・206・222・224・225は口縁部を折り返さず上方に延び、若干内湾する一群である。内外面ともミガキを施す個体が多い。195はチャート・石英などの粗粒砂を含む軟質の胎土で、内面には輪積み痕が残り、ハケ調整後ナデ調整を行っている。222は口縁部外面に指頭圧痕が残り、224は口縁端部をわずかつまむことにより外面に稜を作り出している。223・224は底部に線刻が施されている。206・225は内面に黒色処理がなされている。198～204・206は口縁端部をわずかにつまみナデにより端部に平坦な部分を作り出す一群で、内面に明瞭な稜がみられるものが多い。198は内外面に放射状のていねいなミガキが行われている。

205・207・210～216・210・220は口縁部の折り返しがみられ、内面に稜を作り出し胴部が張る器形である。磨耗しているがナデ調整のものが多い。212は内面黒色処理されているがミガキはみられない。216は内外面に縦方向の細かなミガキが行われている。216・220は口縁部の折り返しが強く、比較的長い口縁部をもつ。

208・209・217～219・221は口縁部内面に弱い稜をもち、あまり外反せず上方に延びる一群で比較的長い口縁部をもつものが多い。208は底部にケズリ調整がみられる。

高坏（第35・36図228～256）

内外面を磨いているものと思われるが、磨耗が著しく調整が不明なものが多い。228～242は坏部外面に稜をもち、やや外反気味に開く一群である。229・232は外面にハケ調整が残り、232はケズリにより稜線を作り出している。241は外面に細かなミガキ調整が行われている。243～248は坏部が直線的に延びるもので243・248は外面に段を作り出している。脚部は円錐形状のものと、中空の屈折脚が出土している。253・254は内面にらせん状の輪積み痕が残り、253は脚の屈折部分にケズリが行われている。254は外面に指頭圧痕が残る。

壺形土器２（小型壺）（第36図259～272）

口縁部が長く直立気味に開き、底部が丸底の形態をもつ一群を壺形土器２（小型壺）とした。259～261は特に小型のものである。259の外面はていねいなナデ調整が行われているが、口縁部中位から頸部にかけてハケ調整の跡が残る。262～272は胴部最大径が16cm以下のもので、263は胴部が扁平で、下半部のハケ目の上にナデ調整による粘土のはみ出しがみられる。外面は横方向のミガキが行われている。264は器面の磨耗が著しく、調整は不明であるが頸部内面に指頭圧痕が残る。266は胴部最大径よりも口径が大きく、口縁部・外面はミガキ調整が行われている。胴部内面の輪積み痕は所々タテ方向の指ナデにより消されている。267は灰白色の緻密な胎土で口縁部は回転ナデである。胴部内面には輪積み痕と指頭圧痕が残る。269～271はやや小型の器形で、胴部内面には輪積み痕が残る。269は胴部外面に多方向のケズリ調整が顕著にみられる。272は平底で外面はハケ調整であるが、同じ器種とした。

鉢・その他の土器（第37図276～282）

281・282はミガキ調整が行われている内黒の鉢で、283は歪みが大きく器面の磨耗も大きい。

276・277・279・280は口縁部がやや外反し、器高より口径が大きい器形である。276は平底でケズリ調整後ナデ調整が行われている。277・278は同じ胎土で、外面には粗いハケ調整が施されている。279は胴部外面にハケ調整後ケズリ調整が行われ、胴部外面にはススの付着がみられる。

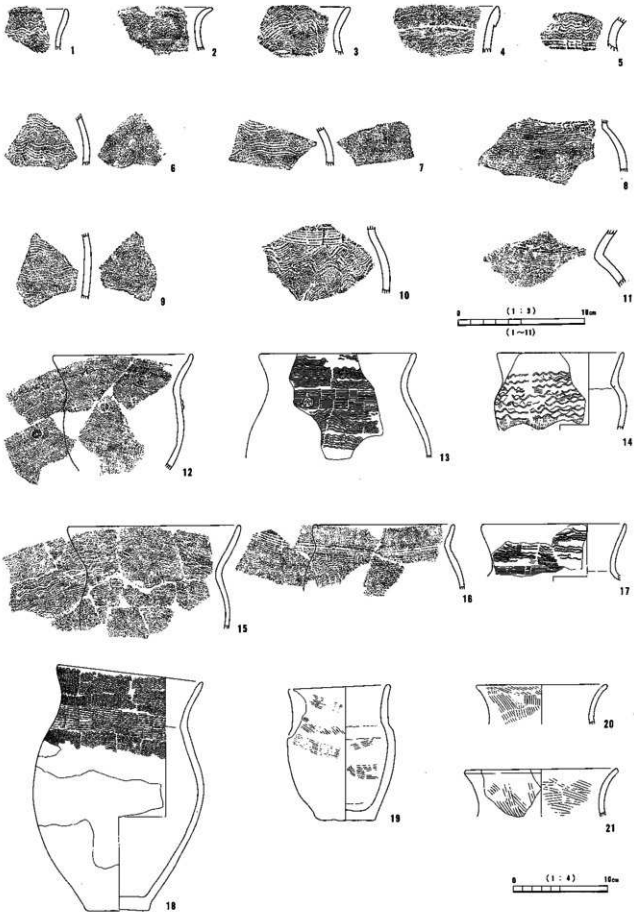
(3)　須恵器（第35図226・227）

当該期の須恵器は２点出土した。226は小片であるが坏蓋、227は底部ヘラきりの坏である。いずれも6世紀末から7世紀初頭に属すると考えられる。

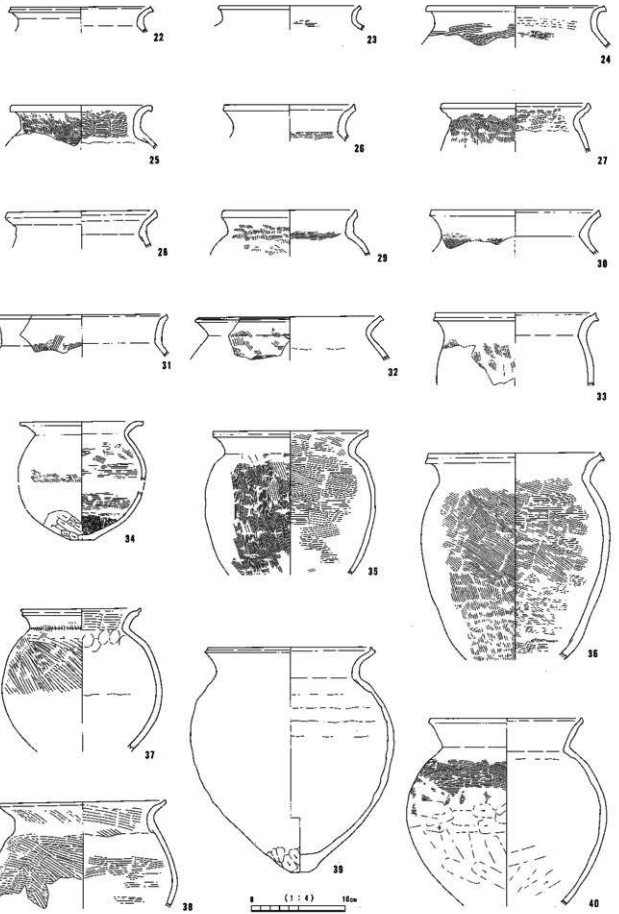
(4)　土製品・石製品・金属製品（第37図284～292）

284・285は線刻がみられる土器片である。３区から出土した284-1・2は同一個体であるが接合せず、285は７区からの出土である。土製品286～289のうち、287・288は土錘で287は一端が欠損する。289は土製の紡錘車で器面が著しく磨耗している。

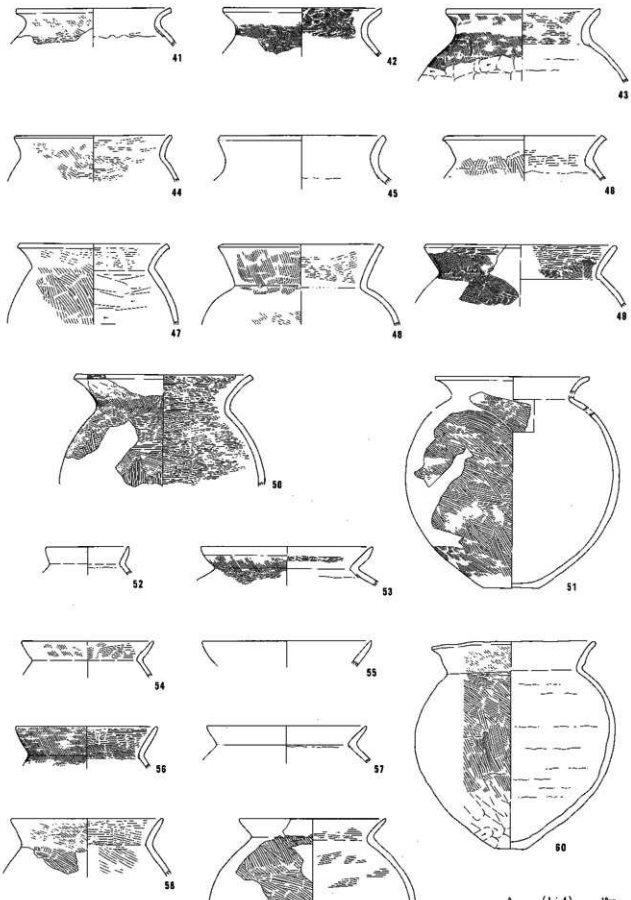
290・291は石製模造品（滑石製）で、それぞれ４区・２区の７層からの出土である。銀環は３区北端の比較的遺物の少ない地点から出土した。鉄表面の剥離もみられるが、銀箔がわずかに残る。出土層位は７層で、丘陵斜面からの崩落、または不規則な流形のSD10に起因するものと思われる。


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
0 (1:3) 10cm
(1~11)
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
0 (1:4) 10cm

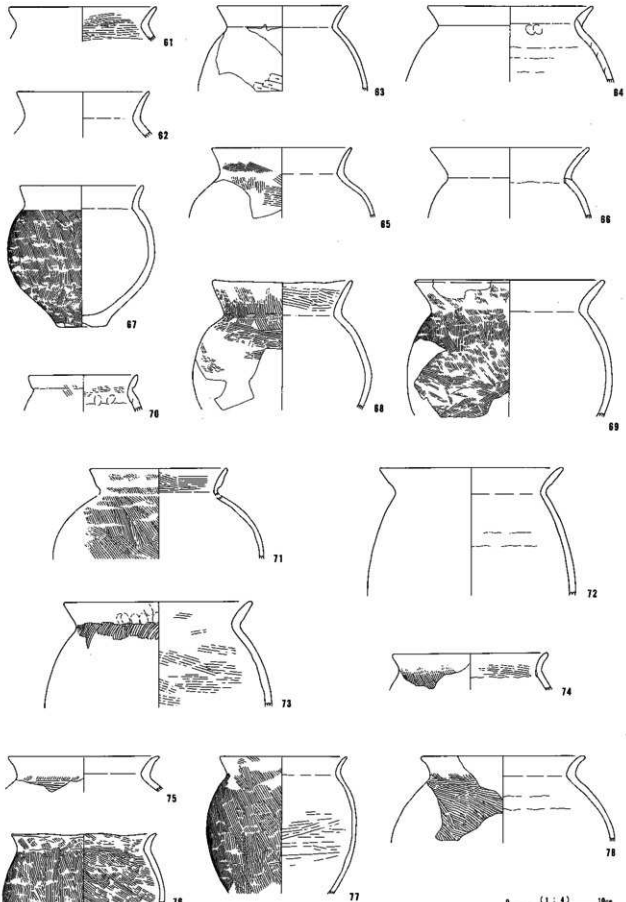
第25図　甕形土器1



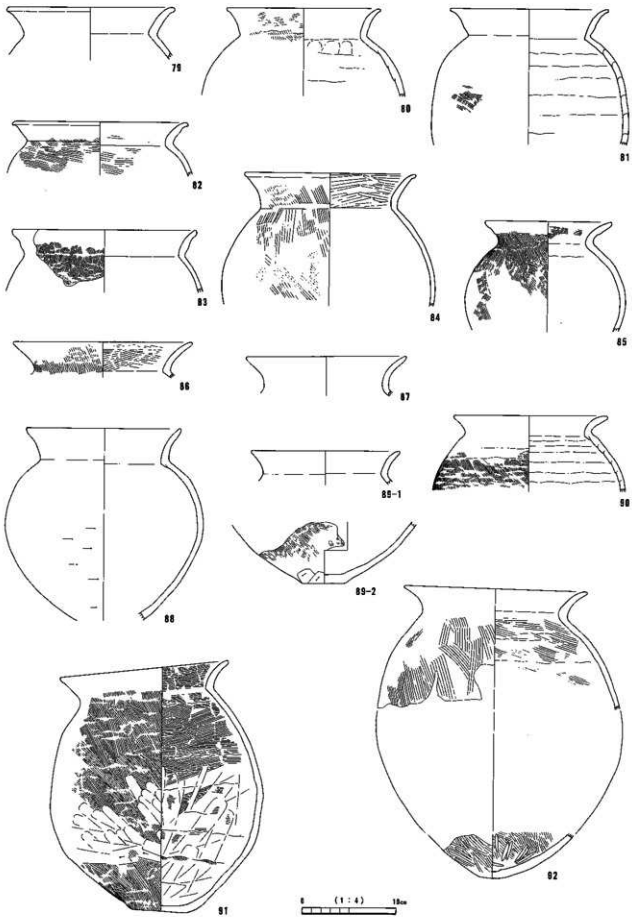
第26図　甕形土器２



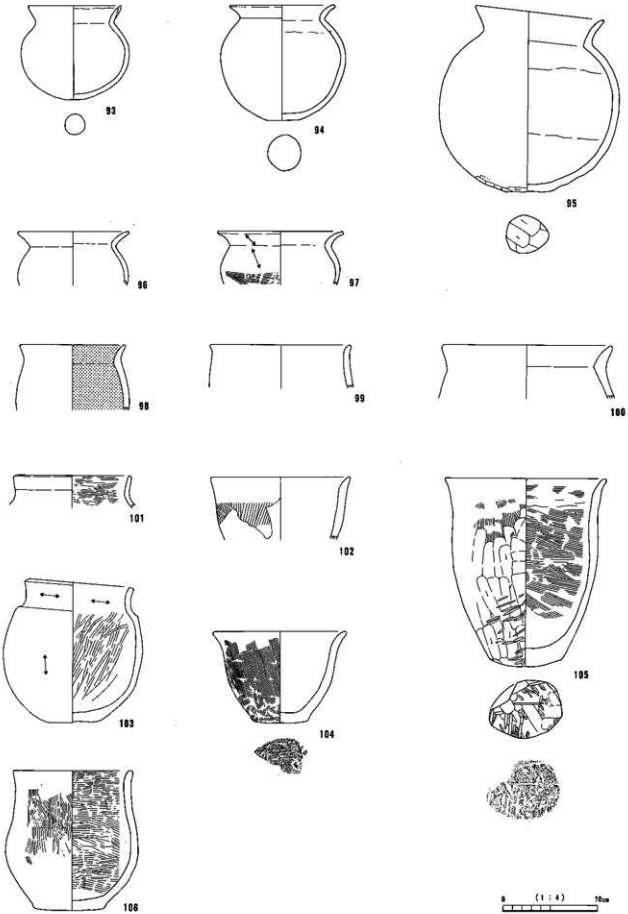
第27図　甕形土器３



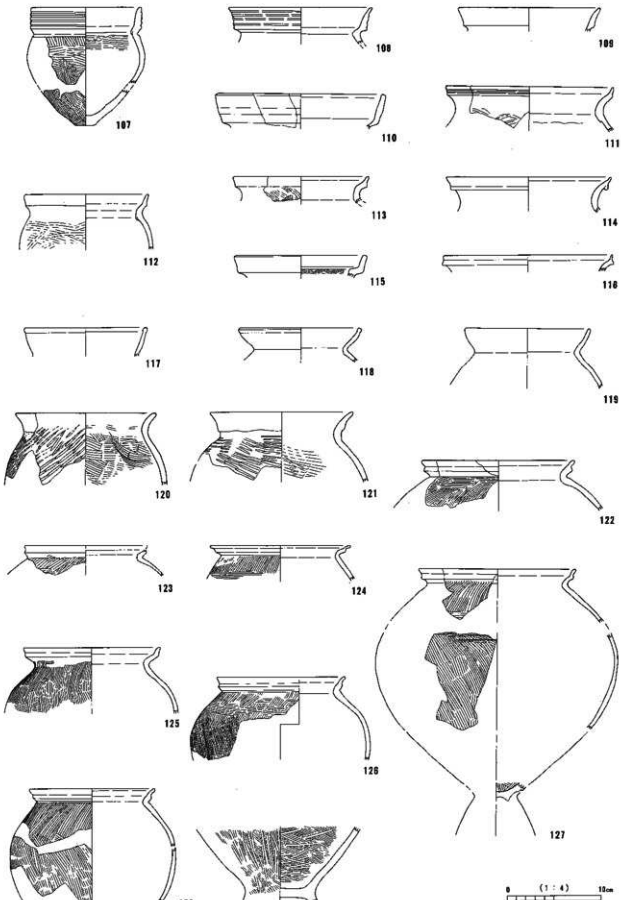
第28図　甕形土器4



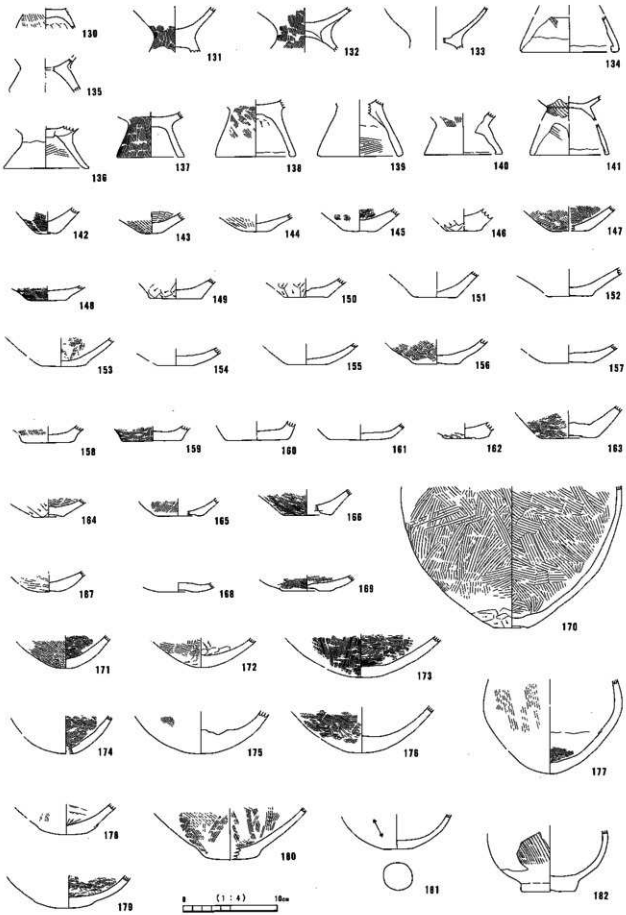
第29図　甕形土器5



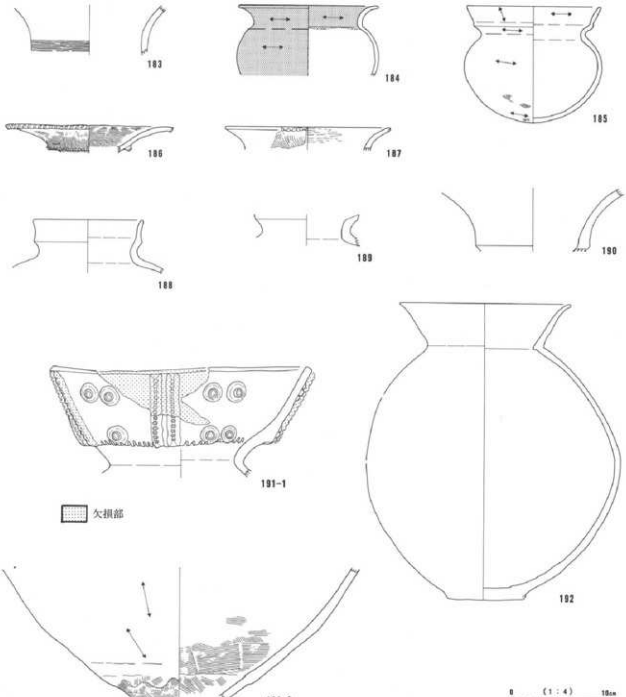
第30図　甕形土器６

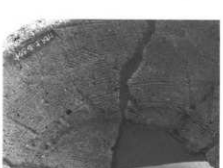

107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
0 (1:4) 10cm

第31図　甕形土器 7

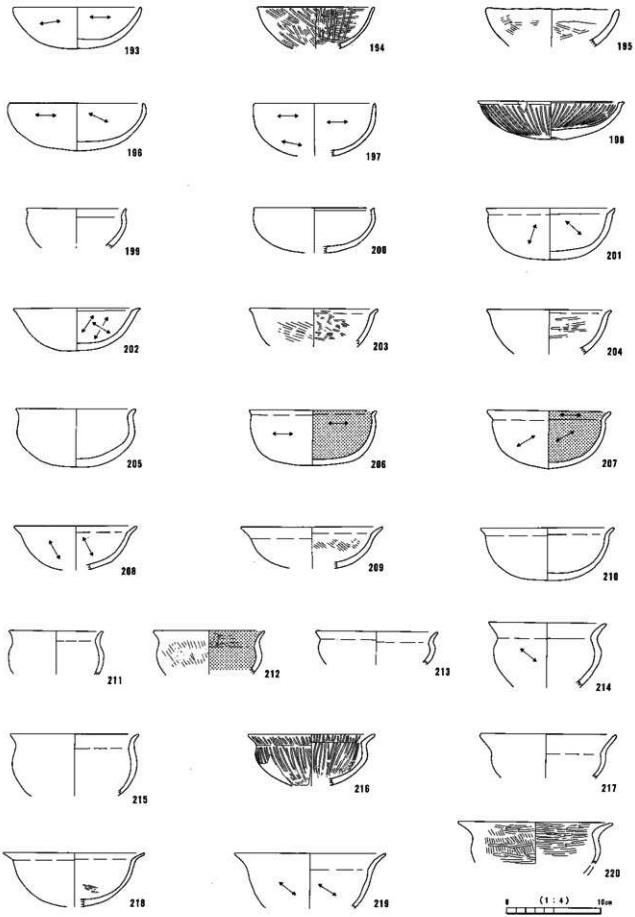


第32図　底部・台付甕脚部

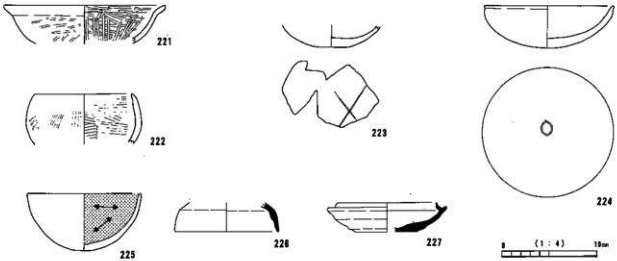


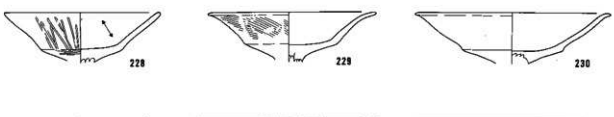


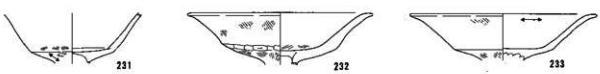
第33図　壺形土器


193
194
195
196
197
198
199
200
201
202
203
204
205
206
207
208
209
210
211
212
213
214
215
216
217
218
219
220
0 (1:4) 10cm

第34図　坏１


221
222
223
224
225
226
227
0 (1:4) 10cm


228
229
230


231
232
233

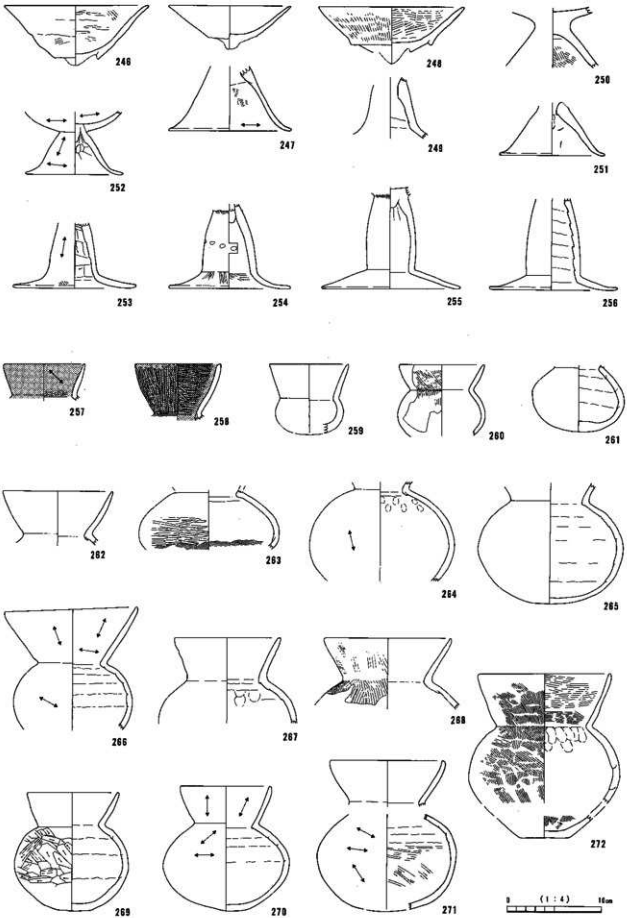
234
235
236

237
238
239

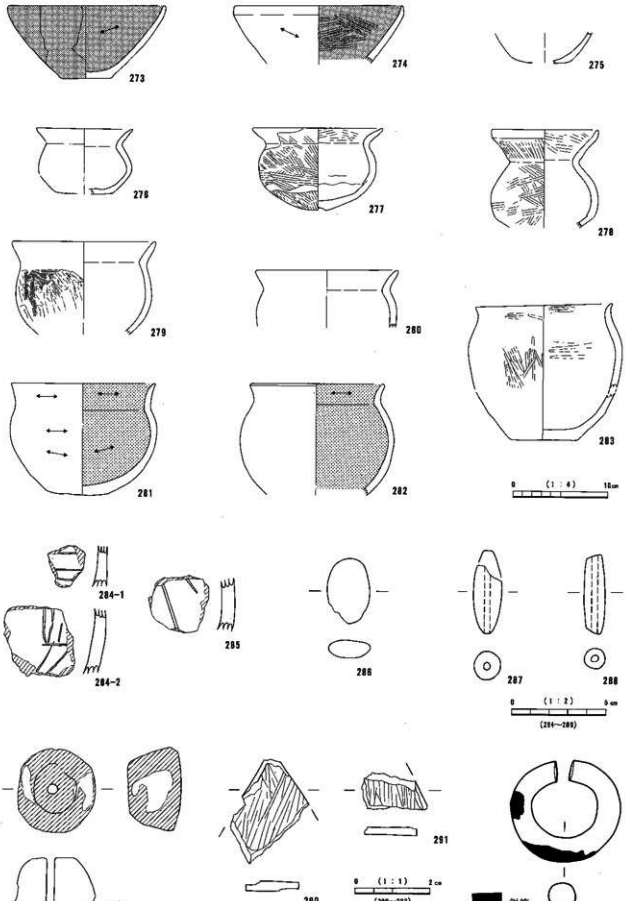
240
241
242

243
244
245

第35図　坏2・高坏1


246
247
248
249
250
251
252
253
254
255
256
257
258
259
260
261
262
263
264
265
266
267
268
269
270
271
272
0 (1:4) 16cm

第36図　高坏２・小型壺



第37図　銀環・石製模造品・土製品・鉢・その他の土器

第４章　奈良時代以降の遺構と遺物

１　調査成果の概要

１区より骸骨が出土した土坑、７区より掘立柱建物跡１棟が検出された。共伴する遺物から中世以降と考えられるが、いずれも明確な時期の確定には至らなかった。

遺物は古瀬戸、青磁、伊万里、唐津などの陶磁器と、珠洲焼、カワラケ、内耳鍋、古銭が出土している。出土地点は６・７区を除く全域で、１層～８層にわたり出土しているが、大半は丘陵斜面部１区５層以上の出土である。出土地点、出土層位による遺物の差異は認められず、５層以上が該期の堆積と考えられる。

また、１区５層より砥石と硯の破片、撹乱部分より羽口の一部が出土しているが、いずれも時期は不明である。

２　遺構

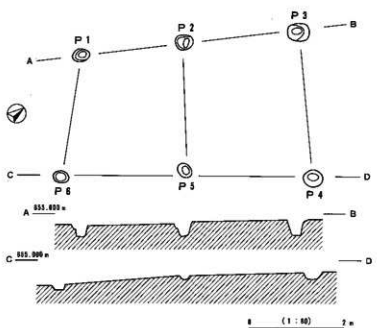
ST01（第38図）

[調査経緯]

平成12年度調査７区８層中において検出された。古墳時代の土器集中部分を検出中、土が乾燥し、円形のピットのプランが確認されたためSTとして調査した。

[遺構の構造]

梁行2.6m～3.1m、桁行4.6m～5.1mの１間×２間の構造で、芯芯間の距離は2.2m～2.8mを示す。主軸の方向はN30E。ピットは直径30～40cm、深さ約30cmでほぼ円形を呈する。付近には他に柱穴らしきものは検出されないため、これらは同時期の柱穴で掘立柱建物跡と考えられる。



第38図　ST01

覆土はHue2.5Y3/1～2/1の黒褐～黒色のシルトで、粘性があり、締りは緩い。全体に鉄分や炭化物粒をごく少量混入する。覆土中から遺物は出土していないが、P1に残存した柱根の下から陶磁器片が出土している。

[出土遺物]

P1より17世紀後半～18世紀の唐津焼が出土。

[遺構の時期]

17世紀後半以降に建てられたものと考えられるが、明確な時期は不明。

SM01・SM02・SK01（第39図・第40図）

これらの遺構は切り合って検出されているが、断面図の状況などプランに不自然な部分が多い。検出面は耕作土直下の灰黄褐色シルトをブロック状に混入する土層で、これらの遺構も攪乱を受けている可能性が高いが、それぞれに獣骨が出土している点を考慮し、遺構として報告する。獣骨については京都大学霊長類研究所の茂原信生氏に鑑定、ご教示をいただいた。

[調査経緯]

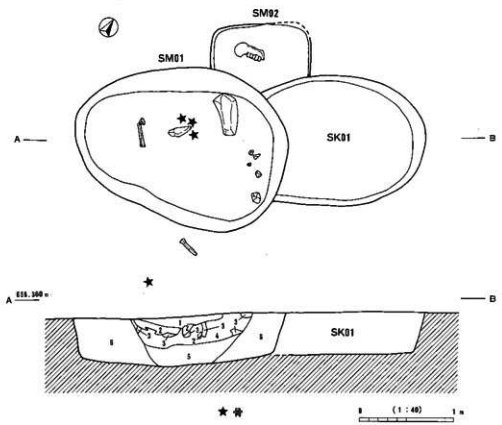
平成11年度調査1区5層黒色シルト上面を重機で検出中、骨の一部が出土した。周辺を精査したところ楕円形のプランが確認されたためSM01として調査に入った。また、北側と南東側に本址と切り合う灰黄褐色の落ち込みが検出され、それぞれSM02、SK01とした。

[遺構の構造]

SM01は、長径225cm、短径170cm、深さ約50cmの楕円形で、断面形状はタライ状を呈する。

耕作土直下のため本址の掘り込み面は不明であるが、獣骨は1層暗褐色土と遺構外からも出土している。したがって、断面図の5・6層は掘り方と考えるのが妥当であろう。また、礫は底部付近から出土しており、本址に伴うものか不明である。

SM02は105cm×70cm、深さ約45cm、SK01は180cm×130cm、深さ40～50cmで、検出面、底部はSM01とほぼ同じレベルにある。覆土は灰黄褐色シルトの単層で、礫や黄褐色土・黒色土をブロック状に混入して



SM01土層注記
1　10YR3/3　暗褐色シルト　粘性なく橙色の微細礫や炭化物を混入。
2　10YR5/8　黄褐色シルト　粘性あり橙色の微細礫混入。
3　10YR2/3　暗褐色シルト
4　10YR3/1　黒褐色シルト　2・3層をブロックで混入。
5　10YR3/2　黒褐色シルト　粘性あり締り緩い。黒色シルトをブロック状に混入。
6　10YR3/2　黒褐色シルト　締り強く鉄分の沈着が見られる。
SK01
10YR4/2　灰黄褐色シルト　粘性あり締り緩い。橙色の微細礫混入し、黒褐色土をブロックで混入。

第39図　SM01・SM02・SK01

いる。SM02からは散骨や歯が出土し、SK01からも歯の一部や骨片が出土している。調査時の所見では別の遺構として捉えられているが、これらは同一である可能性が高い。

[出土遺物]

SM01から出土し取り上げられた骨は、骨端部分が確認できない少量の骨片である。SM02より出土した骨は臼歯の植立したウマの右下顎骨で、第2小臼歯、第3小臼歯、第1大臼歯～第3大臼歯までの5本が確認された（第40図）。保存状態が悪く整理時には歯が脱落していたため、歯のみ掲載した。また、覆土中より土師器、須恵器、陶磁器片（14世紀　古瀬戸の折縁深皿、鎌倉時代　龍泉窯青磁碗）が出土している。

[遺構の時期]

14世紀以降ではあるが不明。歯の残存状況から近～現代の可能性も考えられる。

第40図　SM02出土のウマの歯

3　出土遺物

(1)　奈良・平安時代の須恵器（第41図）

須恵器の破片が8点確認できたのみで、土師器は出土しなかった。須恵器はいずれも小片で、坏と壺の破片である。1は橙褐色の坏で底部は回転糸きりである。2は暗赤褐色の坏B（高台付きの坏）で、明瞭ではないが底部ヘラきりが認められ、8世紀代の可能性がある。出土遺物は少数であるが、調査区の近くに当該期の集落があることを示す資料として重要な意味をもつと考えられる。また、仲町遺跡で確認された8世紀代の遺物と合わせて、東山道支道の沼辺駅との関わりを考慮する必要がある。

第41図　須恵器

(2)　中・近世の焼き物（写真図版 PL.14・第8表）

青磁・白磁　龍泉窯の青磁は13点出土している。1・2・3は13～14世紀前半の蓮弁文の碗、5・6は15～16世紀前半の細線蓮弁文の碗で内面にも文様がみられる。4は13世紀後半以降の盤、7は13～14世紀前半の白磁の口禿げ皿である。大半は1区からの出土である。

古瀬戸・瀬戸焼　9は13～14世紀古瀬戸の瓶子、8は水滴の口で、その他17世紀初頭志野織部の丸皿の破片が出土している。また、近世の碗の小片が2点、明治以降の碗の破片が4区1～4層から6点、1区5層から9点出土した。

唐津焼　17点のうち、大半は1区から出土している。10は17世紀初頭の溝縁皿、11・16は17世紀後半から18世紀の碗、13は18世紀初頭西野窯の瑠璃釉輪禿げ皿である。12は17～18世紀の鉢で、内面には緑釉がみられる。14は5区より出土した18世紀の鉄釉の鉢である。15・17は擂鉢で、17は16世紀末～18世紀前半のもので内面におろし目がみられる。5区より出土した15は18世紀のもので、内面褐色釉が施されている。小片のためおろし目はみられない。

伊万里焼　18・19は17世紀後半以降、20～22は18世紀以降の猪口の破片である。9点出土したがすべて小破片である。大半は1区から出土したが5区からも1点出土している。

カワラケ　6点出土したが、完形品はなく、小型のもの2点とやや大きめのものに分けられる。1点は

底部が厚く盛り上がっており、15世紀前半の善光寺平で多くみられるものである。

内耳鍋　１区から３点出土したが、小片で、外面にススの付着がみられる。

珠洲焼　16点のうち１区から10点、３区１点、４区２点、５区３点が出土した。１は12世紀後半～13世紀前半の擂鉢で、やや内湾し、口唇部は面取りされている。おろし目はみられない。２は13世紀後半の擂鉢で口唇部は面取りされており、13条のおろし目がある。３は擂鉢の底部で、１単位７条のやや散漫なおろし目がみられる。４・５・６は甕で、１区５層から出土している。７・８は14世紀後半～15世紀前半の擂鉢で、１区と４区から出土した。すべて胎土に海綿状骨針を混入するが、特に２・７・８には多く観察された。

(3)　銭貨

１区より銭貨が３点出土し藤沢高広氏に鑑定・ご教示をいただいた（第42図）。

１は磨耗しているがＸ線撮影により真書の朝鮮通宝と確認された。２・３は寛永通宝で、２は新寛永、３は古寛永である。

(4)　木製品（第43図）

木製品は18点出土したが、10点について樹種同定を行い、７点を実測図示した。

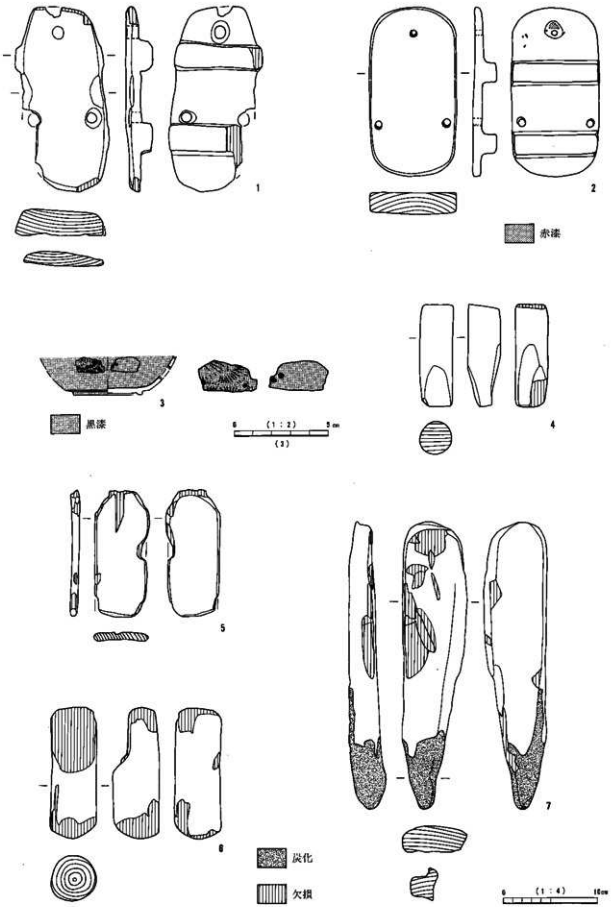
１・２は台および歯を一木で作成する連歯下駄で、いずれも壺を歯の前方に穿孔している。１は歯の下辺幅が台の幅より張り出す作りである。また、先端左側がやや張り出し、表面には親指の跡と思われるわ

第42図　銭貨（下段はＸ線撮影による）１：１

第４表　川久保遺跡出土木製品樹種同定（パレオ・ラボ報告に加筆）

図版番号	整理番号	地区	取上げ番号	層位	器種	樹種
1	2	1区		5層以上	下駄	ケヤキ
2	15	5区		耕土	下駄	イヌガヤ
3	1	1区		5層以上	碗	ケヤキ
	5	1区		5層以上	加工品-1	コナラ節
4					加工品-2	コナラ節
					加工品-3	カツラ
5	4	1区		5層以上	加工品	クリ
6	10	2区	91	7層		
7	13	4区	3028	7層	加工品	クリ
	3	1区		5層以上	加工品-1	ケヤキ
					加工品-2	ネズコ

ずかな窪みがあり右足用の可能性が高い。1区5層から出土し、樹種はケヤキである。2の歯の形態は台に垂直で、壺は小さい。裏面や壺の一部に赤色の塗料が付着しており、子供用のものであろう。5区耕土中から出土し、樹種はイヌガヤで、下駄材としてはあまり類例のないものである。3は挽物の高台付の碗で、器面全体が黒色に塗られ、赤色の文様が描かれている。1区5層から出土し、樹種はケヤキである。2・3は漆の可能性も考えられ、図版上で便宜的に黒漆、赤漆としたが、分析をしていないため不明である。4は丸木削り出しで、両端が加工され、さらに下端は2方向の杭状の加工がみられる。樹種はコナラ節で用途は不明である。5は柾目の板材で上端が欠損している。樹種はクリで用途不明である。6は丸木芯もち材で、両端が欠損する。自然木の可能性が高い。7は割材で、上端にわずかに加工が認められ、下端は炭化している。4区7層出土で、樹種はクリである。図化されなかったが、整理番号5加工品－1はハツリの跡が残る板材である。



第43図　木製品

第５章　自然遺物

１　種実同定

試料の大半は低地からの出土である。１区では５層以上と８層、２・３区では７～８層、７区７～８層、自然流路 SD01、SD06、SD10、SD11より出土しているが、すべて一括取り上げで、集中地点や堆積状況など詳細は不明である。

(1) 分析方法

試料はオニグルミ、トチノキを主とし、顕微鏡下での観察が必要な微細な種子はなかった。したがって、松原遺跡、屋代遺跡の種実同定を参考に、肉眼で形態的特徴から種類を同定した。また、コナラ、コナラ属に関しては種類が多岐に亘るため、同志社香里中・高校の伊東徳治氏に鑑定を依頼し、ご教示をいただいた。

(2) 結果

結果を第５表に示す。同定された種類の形態的特徴は以下のとおりである。

オニグルミ　核は大変緻密で硬く、先端の尖る球形のものから広卵形、大きさは２～５cmとばらつきが多い。本遺跡から出土したものは３cm前後が多い。側面の両側に２本の縫合線が発達し、浅い溝と筋・凹凸が不規則に入る。

ヒメグルミ　核は大変緻密で硬く、扁平で心形、先端は尖る。側面の両側に縫合線が発達し、表面は平滑で、中央に溝がある。大きさは2.5cm程度。

トチノキ　果実は厚くやや柔らかく、表面はざらざらしている。３片に分かれる構造で、その単位で破片になりやすい（薗）。種子は歪んだ楕円形で、下半部は褐色で光沢がなく、上半部は黒褐色で光沢がある。種皮は薄くやや硬いが、自然堆積でも割れていることが多い。

スモモ　核の形は楕円形で、偏平である。一方の側面にのみ縫合線が顕著にみられる。表面は不規則で浅いシワがみられる。

ツノハシバミ　果実はやや円錐状で、長さ６～８mmが多く食用となる。

下段出土の種実はオニグルミが圧倒的に多く、ついでトチノキ、ヒメグルミとなっている。その他クリ、スモモ、ツノハシバミが各１点出土している。

オニグルミは核完形273、核完形食痕96に対して、核半分割は167、食痕21と約半数を占めるが、半分割の核に人為的と思われる割れ目の入ったものは見当らない。食痕とは、げっ歯類による噛み跡が残っているものを意味し、核完形の約35％を占める。トチノキは、完形の果実が19点で効果が多く、３片に分かれる薗の破片が47片出土している。また、種子は完形48点のうち25点は効果のもので、約半数を占める。効果の種子は種実が残っていることから、自然堆積によるものが半数近くを占めると思われる。種子の破片は24点と少ないが、調査区の地形的状況や調査時の出水による困難な調査状況を考えると、破損した小さな種皮が検出されなかった可能性もある。自然堆積だけでなく、食用に利用された残渣もあった可能性も考えられよう。

出土した種実の年代は古墳時代以降ではあるが、自然流路や遺構に伴わない出土状況のため明確な判断

はできなかった。

２　昆虫同定

２・３区の自然流路 SD1,SD10と、古墳～弥生時代検出面から昆虫の羽根が数点出土している。

アオハナムグリかコガネムシ、ハムシの類ではないかと考えられるが、いずれも小破片であり、発掘の行われた季節を加味し同定は実施しなかった。

第５表　川久保遺跡出土の種実

NO	地区	出土層位	種類													その他	備考
			オニグルミ					ヒメグルミ			トチノキ						
											果実		種子				
			完形	完形食痕	半分割	半分割食痕	不明	完形	完形食痕	半分割	完形	一部片	完形	割片			
1	1	上段５層以上	4		4							2					
2	1	上段５層以上一括										2					
3	1	上段８層対応層		1	1				3	1		1				クリ１ ツノハシバミ？１	
4	2	下段東７～８層	38	7	22	3	9				1	3	2	6		不明１	トチノキ種子食痕１
5	3	下段西７～８層砂層	25	19	8	1					6	13	8	12		コナラ属？１	トチノキ種子（幼果）４
6	3	下段西７～８層砂層	22	36	10	1					9	16	33			不明１	トチノキ種子（幼果）12　扁平６
7	3	下段西７～８層ピート層	2	1	6		1										
8	3	下段西７～８層砂層	2	2	2		1										
9	3	SQ13	1														
10	3	SQ20	1														
11	2	下段東 SD1	14	5	12	3	4										
12	3	下段西 SD6	8	2			4										
13	3	下段西 SD10	38	6	9	2	4				3	4	3	2			トチノキ種子（幼果）３
14	3	SD10　9層	3	1	1							11	1	3			
15	3	下段西 SD11	24		18	1	6									スモモ１	
16		下段	16	1	24	3	2										
17		下段	17	4	16	2											
18		下段	23	1	9								1				
19		下段７～８対応層	20	5	5	1	3	1									
20		下段７～８対応層	19	2	15	2	3									不明１	
21		不明	16	4	5	2	1									不明１	
							*				**	***	**	***			

*　完形または半分割で穴が開いているが食痕とは断定できないもの
**　完形または2/3以上残存するもの
***　1/3となった破片を１とする
****　完形またはそれに近いもの
*****　遺度1/3以上の残存

第6章　結語

1　川久保遺跡の調査成果

平成11年度から12年度の2年間にわたり、池尻川低地と丘陵斜面部の発掘調査を行った。調査区の大半が軟弱な有機質の堆積土層であり、出水や工程上の都合により分割調査を行うなど、発掘調査は非常に困難を極めた。また、発掘調査担当者と報告書担当者が異なり、できる限り調査時の所見を尊重したが、発掘当時意図されていたことや状況が本報告書にどれだけ盛り込めたか不安が残る。

川久保遺跡は縄文時代、奈良・平安時代の遺跡とされ、これまでに知られている遺物はごくわずかであったが、本調査により低湿地性の堆積土層から、信濃町では希少な古墳時代の土器が多量に出土し、多くの資料を提示することができた。以下におもな時代について調査成果をまとめ、結語としたい。

縄文時代：草創期表裏縄文や前期諸磯a式並行期、後期後半～晩期の土器が出土した。表裏縄文土器は器形がかなり復元できた貴重な資料である。前期以前の土器は丘陵斜面部の風成層から出土し、後期以降の遺物は丘陵斜面部だけでなく低地部でもみられるようになる。しかし、貫ノ木遺跡・東裏遺跡・市道遺跡など信濃町で多くみられる早期押型文土器は出土していない。中期の土器も1片出土したのみである。

弥生時代：中期の土器は低地部から少量出土し、栗林式の甕と壺が中心であるが、北陸地方との交流がうかがえる小松式土器の甕底部が1点出土した。

信州系の後期土器は櫛描波状文を施した甕形土器を主とし、後期全般の時期のものが含まれる。信濃町やその近辺の山麓部では当該期の遺物の出土は少なく、集落も確認されていないが、今後の調査研究により様相が明らかになっていくことであろう。

古墳時代：丘陵斜面部と低地部から4世紀・5世紀を中心とした多量の土器が出土し、いくつかの遺物集中地点が確認された。特に丘陵斜面部では北陸系を中心に東海系・畿内系の古墳時代前期の土器が多く出土する傾向があり、低地部では坏・高坏・小型壺など、古墳時代中期を中心としたまとまりがみられた。また僅かではあるが土錘や土製紡錘車、石製模造品・銅環が出土したことや、調査区で検出された自然流路の傾斜が少なく多量の土器が流されてきた可能性が少ないことなどから、集落の存在や水辺の祭祀が想定されよう。

時期により遺物の分布範囲が異なる傾向は、低地部の汀線の変動と関係があると想定される。古野尻湖だった池尻川低地は、その後の地殻変動などによって湖から浅い水域もしくは低湿地に変化したものである。縄文時代でも時期による分布範囲の違いがあり、汀線の移動との関わりが考えられる。同じように古墳時代の古い段階に水域であった低地部は、中期以降になって南西方向に汀線が退行していったものであろう。調査区の南区域では遺物の出土量が極めて少なくなることからもうかがえる。水域の変動は、湧水期や融雪期などの季節的な誘因も考えられ、自然流路の検出状況からも繰り返し起きていたものと推定される。

2　古墳時代における川久保遺跡の意義

近年、新潟県の山麓部でも古墳時代の遺跡が発掘調査され、集落域の存在が想定されつつある。また善光寺平では、弥生時代末から古墳時代前期にかけて北陸系の土器を出土する集落跡が調査されている。川

久保遺跡は信濃と越後を結ぶ峠付近に立地し、北陸地方や東海地方・畿内地方との関係を考える上で重要な位置を占める。

また、川久保遺跡の調査と前後して、隣接する山上で円墳と思われる墳丘が発見された。発掘調査を経たわけではなく、墳墓等としての伝承なども聞かないが、現時点では古墳と考えてよいと思われる。信濃町内初の発見であり、長野県内の古墳分布としても最北に近い。所在地の通称から寺山古墳と名付け、川久保遺跡の関連資料として報告する。

寺山古墳の立地と墳丘の状況

寺山古墳は池尻川へ向かって北方から張り出す尾根の頂部にあり、池尻川や川久保遺跡からの比高約60メートルほどで、西側の山裾が川久保遺跡である。

この付近を北方へ通行しようとすれば、旧北国街道や国道18号がそうであるように、丘陵上を北上して仲町遺跡北端付近に達し、池尻川を越えることになる。正面の山上に寺山古墳が立地し、さらに山裾沿いに進めば、川久保遺跡となる。古墳と遺跡の立地は信越間の交通ルートとのかかわりを示すようである。

古墳に至るには急斜面を登るが、尾根の頂部、特に古墳周辺には比較的傾斜の緩い部分が広がっている。墳丘はその南端部にあり、古墳より先はやや傾斜が急になる。下方から見た場合の墳丘の高さを確保しつつ、移動土量が少ない位置ということになる。このような占地はこれが古墳である根拠のひとつとなるかもしれない。墳丘の尾根上方側には丘尾切断の溝があり、墳丘に沿って丸みをもって延びている。尾根下方は傾斜変換点により裾は明瞭である。墳丘周囲にはテラス・段等の施設を明瞭にうかがわせる部分はないが、周溝の延長上にはテラス状に見える部分もわずかに認められる。しかし裾は傾斜に沿っており、基底を水平にしているとは思われない。墳頂は低平で広い。全体としてみると、倒木や流出によると思われる変形が各所にみられ、墳丘規模が小さいだけにそれが目立つ。これは盗掘などの結果というより、墳丘の築成方法が軟弱なものであったことを示しているのかもしれない。

裾部に角をなす部分や、それに対応する斜面の稜線が明瞭にみられないこと、周溝状部分の最深部の形状が円いことから、直径14メートル、尾根下方からの高さ2メートル、周溝底からの高さ0.5メートルの円墳と考えておきたい。ただ、南側・東側の裾はやや直線的にみえる部分もあり、ほかの二辺もそのようにみえないこともない。方形墳とした場合、尾根筋方向と南北方向にほぼ一致していることになる。一辺13メートルほどの方墳である可能性も残る。

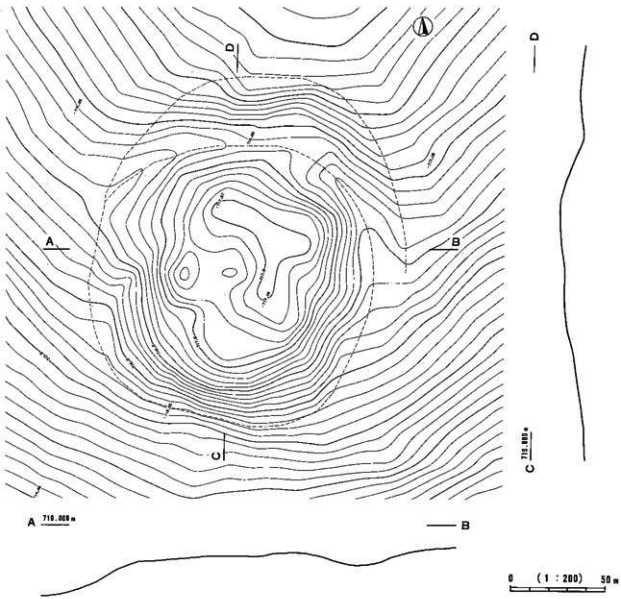
墳丘上および周囲で遺物等はまったく採集されていない。また、礫など埋葬施設・墳丘施設にかかわる痕跡もない。これは石を用いた石室や葺石・埴輪などの施設をもたないことを示すものと考えておきたい。また、周辺の尾根上にはほかに古墳状のマウンドは確認できず、単独墳と考えられる。ただし、尾根上の地形からみると、後述のようなきわめて低平な墳丘が存在して群集墳を構成する可能性もある。

寺山古墳と同様の様相をもつ近隣地域の古墳として、新潟県の上越市黒田古墳群をあげられる。これは立地、墳丘の状況等が良く似た、5・6世紀の群集墳である。多くは直径数メートルから10メートルの小型で低平な円墳で、墳丘施設をもたない。埋葬施設は木棺直葬で副葬品はきわめて貧弱である。また、長野県では中野市七瀬古墳群も時期・様相の類似した古墳群である。七瀬古墳群の副葬品が前者にくらべてやや豊富なのは、先行する大型前方後円墳七瀬双子塚を含む七瀬古墳群の優越性を示している。ともに古墳群を形成することは寺山古墳とは異なるが、黒田古墳群にはマウンドをもたない埋葬や数十センチ程度の高さの墳丘があり、発掘調査以前に地表からは存在の確認できないものも多かったという。寺山古墳も同様の可能性がないわけではない。先行する首長墓の存在が今のところ考えがたいことからも、黒田古墳群にみられるような、5・6世紀の副葬品の貧弱な木棺直葬墳の可能性を考えておきたい。もし、寺山古墳が単独墳であるとすれば、黒田古墳群で一定の時間的・空間的広がりをもった契機が、ここでは古墳1

第44図　寺山古墳立地図（信濃町図其2に加筆）

墓の築造という限られた時間・空間にしか存在しなかったことの反映であろう。

ところで、七瀬古墳群や黒田古墳群の場合、周辺における弥生時代後期から古墳時代前期にかけての集落の展開などから、古墳造営の経済的基盤としての農業生産力の地域内での優越性を指摘できる。しかし、野尻湖周辺では山間の高冷地という気候条件から同様のことはあまり可能性がない。古墳は、造営の有無も含め、他地域との政治的諸関係に規定されている。それはその地域の生産力の反映であるという一面とともに、政治・経済の地域間交流における役割の反映でもある。寺山古墳の地理的位置は、5・6世紀の善光寺平と上越を結ぶ交通路の存在にかかわって、この古墳が築かれたことを考えさせる。そして、両地



第45図 墳丘図

域の古墳の様相からみれば、この古墳は普光寺平の周辺というより、上越地域の最先端の古墳とみたほうが適切かもしれない。川久保遺跡における土器様相も同様なことを示していよう。

川久保遺跡の古墳時代土器にはかなりの時間幅があり、6世紀以降の遺物も存在するが、出土土器の主体は5世紀前半以前である。発掘調査範囲は遺跡中心部ではないが、この時期的様相が遺跡全体の傾向を示すものだとするなら、寺山古墳の年代も川久保遺跡の最盛期と同じく、よりさかのぼる可能性を指摘できるかもしれない。しかし、首長墓系譜をもたない地域で前期に円墳が築造されることは、越後・信濃の状況からみれば可能性が小さい。川久保遺跡は通常の集落というより交通路にかかわって形成された遺跡であろうから、その交通路としての持続性の中には、古墳築造の契機がもたらされた事情が、遺物の質・量・内容などのかたちで残されているはずである。しかし、遺跡・古墳の全体像が明らかでない現時点では、これ以上の年代的限定はむずかしい。

さて、上越地域も含まれる古代越の領域のうち、能登・越中・越後の5世紀は首長墓も含め円墳が卓越

し、前代の前方後円墳・前方後方墳が中絶する。この時期に、それまで古墳のみられなかった地域に黒田古墳群や六日町飯綱山古墳群などの円墳主体の群集墳が形成されるのが信越国境の越後側の状況である。以西の越前とは異なる地域性、つまりは畿内とのかかわりの違いが指摘されている。同時期、信濃善光寺平では前方後円墳が新たな地域にも築造され最盛期を迎えるが、後の時代には継続せず、5世紀半ばころをもって前方後円墳の築造を終える。上越と善光寺平においてみられる現象は一見異なっているが、大きくみればこの時期の政治的再編成を表すものであることに違いない。寺山古墳の位置は、この動きが信越間の地域間関係とも無縁ではなかったことを示しているように思われる。

寺山古墳と川久保遺跡

これまで長野市以北の鳥居川流域では、弥生時代・古墳時代遺跡の状況は明確ではなかった。近世以降、信濃から越後に抜ける交通路は北国街道が主要ルートであり、現在も国道18号・上信越道がその後を継いでいる。しかし、ここが弥生時代・古墳時代の地域間交通路としての意義を示す資料はきわめて断片的である。一方、飯山市から新井市に抜ける富倉峠等、千曲川下流域から上越方面への交通路は、そのルート上の中野市・飯山市に弥生時代後期から古墳時代初期の遺跡が多く、また、遠隔地との直接交流を示す外来系土器の存在、弥生墳丘墓や前方後方墳をはじめとする初期古墳の存在などから、広域にわたる主要交通路であったことが確実である。とくに3・4世紀における列島内の交流ルートと東西関係において、ある時点ではこの地域が最大の焦点となったこともあったと考えられる。それは、弥生後期から古墳時代初期の墳墓や遺物に示されるところだが、その後の寺山古墳も、地域間あるいは広域の交流が古墳形成に大きくかかわっていたことを示している。

律令期になると、信濃国府から越後国府に至る東山道支道の沼辺駅を野尻湖畔付近に推定する説がある。仲町遺跡等では平安時代の遺構がある程度発見されているが、律令期にさかのぼる交通路を実証できる資料は得られていない。まだ十分には明らかにされていない仲町遺跡北端、野尻バイパス調査区周辺には、あるいはその可能性を指摘できるかもしれない。いずれにしても、川久保遺跡と寺山古墳は、この地域の古墳時代史の時間的・空間的空白を埋め、さらに千曲川流域と上越地域との交流の一端を従来とは別な様相で示す新たな重要資料といえよう。

最後に、発掘調査から報告書の刊行に至るまでお世話になった皆様に感謝申し上げるとともに、本書を多くの方々にご活用いただくことを願うものである。

第６表　中・近世遺物観察表

整理番号	写真番号	地区	遺構名・グリッド	出土層位	取上げNo.	器種	備考
1		3	TP2	1～3層		碗	龍泉窯　青磁　無文　13～14世紀
2	2	1	J－22	5層	2590	碗	龍泉窯　青磁　連弁文　13～14世紀前半
3		1	O－03	5層	2717	碗	龍泉窯　青磁　連弁文　13～14世紀前半
4		1	O－07	5層	2747	碗	龍泉窯　青磁　連弁文　13～14世紀前半
5	1	1		8層		碗	龍泉窯　青磁　連弁文　13～14世紀前半
6	3	1		5層上面			龍泉窯　青磁　連弁文　13～14世紀前半
7	4	3	TP2			壺	龍泉窯　青磁　13世紀後半以降
8		1	J－22	5層	2633	玉縁碗	龍泉窯　青磁　14世紀後半～15世紀前半
9		1		5層			龍泉窯　青磁　15世紀中ば
10	5・6	1		5層			龍泉窯　青磁　細線連弁文　15世紀～16世紀前半
11	7	1	O－06	5層	1783	山茶碗皿	龍泉窯　白磁　13～14世紀前半
12	9	1	O－07	5層	2771	瓶子	古瀬戸　13世紀
13	8	1		8層		水滴	古瀬戸　13～14世紀
14		1	O－07	5層	2752	丸皿	志野織部　17世紀初頭
15		1	O－02	5層	2762	碗	瀬戸　近世
16		1		5層			瀬戸　近世
17		3		6層		染錦皿	唐津　17世紀初頭
18	10	4		6層上面		染錦皿	唐津　17世紀初頭
19		1		5層		染錦皿	唐津　17世紀初頭
20		1	O－07	5層	2804	碗	唐津　17世紀後半～18世紀
21	11	2		耕土			唐津　17世紀後半～18世紀
22	16	7	ST－01　P1				唐津　17世紀後半～18世紀
23	12	1	O－07	5層	2750	鉢	唐津　17世紀～18世紀
24		1	O－02	5層	2733	輪禿げ皿	唐津　西野窯（堀構物）　18世紀初頭
25	13	1		5層		輪禿げ皿	唐津　西野窯（堀構物）　18世紀初頭
26		1	O－01	7層	2163	碗	唐津　18世紀
27		1		5層上面			唐津　18世紀
28	17	5		1～4層		擂鉢	唐津　16世紀末から17世紀前半
29	15	5	Y－09	7層	2991	擂鉢	唐津　18世紀
30	14	5		1～4層		鉢	唐津　18世紀
31	18・19	1		5層			伊万里　17世紀以降
32	22	1	J－23	5層	2626		伊万里　18世紀後半
33	20	1		5層		猪口	伊万里　18世紀後半
34	21	5		1～4層			伊万里　18世紀後半
35		1	J－22	5層	2632		伊万里　時期不明
36		1	O－07	5層	2749		伊万里　時期不明
37		1		5層上		カワラケ	15世紀前半
38		1	N－10	7層	1575	カワラケ	
39		2	T－04	7層	1253	カワラケ	
40		1	O－02	5層	2667	カワラケ	
41		1		5層上		カワラケ	
42		1		5層上面		内耳鍋	
43		1		5層		碗	19世紀中ごろ
44		5		1～4層			瀬戸　明治以降
		5	Y－09	7層	2995		瀬戸　明治以降
		1	O－02	5層	2658		瀬戸　明治以降
		1	O－07	5層	2770		瀬戸　明治以降
		1		5層上			瀬戸　明治以降

1	1	1	O－03	5層	2704	擂鉢	珠洲　12世紀後半～13世紀前半
2	2	5	Y－09	7層	2993	擂鉢	珠洲　13世紀後半
3	3	1		5層以上		擂鉢	珠洲
4	4	1	O－07	5層	2755	甕	珠洲
5	5	1	J－22	5層	2631	甕	珠洲
6	6	1	N－10	5層	2086	甕	珠洲
7	7	4	T－07	7層	3002	擂鉢	珠洲　14世紀後半～15世紀前半
8	8	1	O－08	5層	2791	擂鉢	珠洲　14世紀後半～15世紀前半
9		1	J－22	7層	2601	壺	珠洲
10		1		5層以上		壺	珠洲
11		5	Y－09	7層	2991	壺または甕	珠洲
12		1	O－07	5層	2756	擂鉢	珠洲　13世紀後半
13		4	T－09	7層	3044	擂鉢	珠洲　13世紀後半～14世紀
14		1	O－08	5層	2794	擂鉢	珠洲　14世紀後半
15		1	O－03	5層	2713	擂鉢	珠洲　15世紀前半
16		3		6層		甕	珠洲

第7表　縄文土器観察表

図版番号	整理番号	器種	地区	遺構グリッド	層位	残存率	口縁部残存率	口径	底径	器高	色調	胎土中の鉱物ほか									焼成	成形調整	備考
												大きさ	石英	長石	チャート	石質岩片	角閃石	雲母	赤褐色粒子	その他			
1	5	深鉢	7	N-11・12	II・III層		2/32	29				φ1mm±	○	○		○		○	○		良	表裏縄文	
2	17		6	N-12	II層						7.5YR5/6 明褐	φ1mm±	○	○		○	○	○			良	表裏縄文	石英・雲母多い
3	19		6	N-12	III層						7.5YR6/6 橙	φ1mm±	○	○		○	○		○		良	表裏縄文	
4	18		6	N 12	II層						7.5YR4/3 褐	φ1mm±	○				○	○	○		良	表裏縄文	石英・雲母多い
5	20		6	N-12	III層						7.5YR5/4 にぶい褐	φ1mm±	○	○		○		○			良	表裏縄文	雲母ごく少量
6	43		1		8層						7.5YR6/3 にぶい褐	φ1~2mm	○	○	○	○	○	○	○		良		繊維土器 雲母微量
7・8	47		6	N-11 N-16	II層						7.5YR6/4 にぶい橙	φ1mm±	○			○		○			良		繊維土器 石英・雲母多い
9・10	51		7	N-12	II層						7.5YR6/3 にぶい褐	φ1mm±	○		○	○		○			良		円磨されたチャート・酸性岩岩片　雲母微量
11・12・13・14・15	34		6		II層						7.5YR4/2 灰褐	φ1mm±	○	○	○	○	○				良		
16・17	3	浅鉢	6	N-12	II層		11/32	34	13		7.5YR6/4 にぶい橙	φ1~2mm	○	○	○	○	○		○		良		繊維土器 底内面スス付着 丸いチャート多い
18	49		7	N 14・15・19・22	7層 8層						7.5YR4/3 褐	φ1~2mm	○	○		○	○	○			良		白色岩片多い
19	55		2・3	SD2							7.5YR5/2 灰褐	φ1mm±	○	○	○	○		○			良		石英多い
20	38		1	O-06	5層						7.5YR3/2 黒褐	φ1mm±	○			○	○		○	輝石	良		白色岩片と細粒の角閃石多い
21	56		7	N-22	7層						7.5YR6/3 にぶい褐	φ1mm以下	○	○	○	○	○		○		良		
22	41		1		5層						7.5YR5/3 にぶい褐	φ1mm±	○			○	○				良		白色岩片・細粒の角閃石多い
23	52		1		8層						7.5YR6/6 橙	φ1mm±	○	○	○	○		○		輝石？	良		石英多い　雲母微量
24・25・47	32		1		8層						10YR7/3 にぶい黄橙	φ1~2mm	○	○	○	○	○				良		
26	40		2		7層 8層						7.5YR4/3 褐	φ1mm±	○			○	○	○			良		石英多い
27	25		1		8層						7.5YR4/2 灰褐	φ1mm±	○	○			○	○			良		φmax5mmの石質岩片(酸性岩)
28	26		1		5層 8層						7.5YR5/4 にぶい褐	φ1mm±	○	○		○			○		良		
29	44		1		7層 8層						7.5YR6/3 にぶい褐	φ1mm±	○	○		○		○	○		良		雲母微量
30	15	深鉢	1	J-17	8層						10YR3/1 黒褐	φ1mm±	○	○		○	○			輝石	良		白色岩片多い
31	10		1		8層						10YR7/4 にぶい黄橙	φ1mm±	○			○	○		○		良		内黒 石英多い
32	13	深鉢	1	O-02	7層						10YR4/2 灰黄褐	φ1mm±	○	○		○	○			海綿状骨針	良		
33	54		1		5層 8層						7.5YR4/2 灰褐	φ1mm±	○	○		○					良		
34	60		1		5層						7.5YR4/2 灰褐	φ1mm±	○	○	○	○			○		良		
35	30		1		8層						7.5YR6/4 にぶい橙	φ1mm±	○	○	○	○		○			良		
36・46	33		1	J 22	5層 7層 8層						10YR7/3 にぶい黄橙	φ1mm±				○	○				良		白色岩片を多く混入
37・43	16		1	J-22	7層						2.5Y7/1 灰白	φ1mm以下		○		○	○			海綿状骨針	良	内面ミガキ	内面10YR8/3浅黄橙
38・39	58		2・3	SD2							10YR6/3 にぶい黄橙	φ1mm±	○		○	○	○	○		輝石	良		
40	23		1		8層						7.5YR3/1 黒褐	φ1mm±	○	○	○	○		○	○		良		
41・42	22		1	J-22	7層						10YR6/2 灰黄褐	φ1mm以下	○			○				海綿状骨針	良		微細な石英少量
44	50		1		8層						7.5YR7/3 にぶい橙	φ1~2mm	○	○		○	○		○		良		白色岩片・赤色粒子多い
45・48	59		2・3	SD3							7.5YR4/2 灰褐	φ1mm±	○	○	○	○	○	○			良		稀に φ5mmのチャートあり
49	45		1・2・3	SD10	5層						7.5YR7/3 にぶい橙	φ1mm±	○	○	○	○			○		良		
50	53		1		7層 8層						10YR5/3 にぶい黄褐	φ1~2mm	○		○	○	○			輝石？	良		酸性岩の白色岩片を多く混入

図版番号	整理番号	器種	地区	遺構グリッド	層位	残存率	口縁部残存率	口径	底径	器高	色調	胎土中の鉱物ほか 大きさ	石英	長石	チャート	石質岩片	角閃石	雲母	赤褐色粒子	その他	焼成	成形調整	備考
51	27		1		8層						7.5YR5/4 にぶい褐	φ1～2mm				○	○				軟		酸性岩の白色岩片を多く混入
52	29		1		8層						7.5YR3/1 黒褐	φ1～2mm				○	○		○		やや軟		酸性岩の白色岩片を多く混入
53	1		1		8層						7.5YR6/3 にぶい褐	φ1～2mm	○			○	○		○		良		白色岩片・角閃石多い
54・55	61		1		8層						7.5YR6/3 にぶい褐	φ1～2mm	○	○		○			○		良		石英多い
56	42		1	O-06	5層						7.5YR6/3 にぶい褐	φ1～2mm	○			○	○		○		良		白色岩片・細粒の角閃石多い
57	2	注口土器	7	N-15	8層						10YR6/1 褐灰	φ1mm以下	○	○		○	○				良		白色岩片多い
58	11	注口土器	4	T-10	8層						10YR6/1 褐灰	φ1mm以下	○	○		○	○				良		
59	8	深鉢	2	O-24	8・9層		27/32		7.7		10YR6/2 灰黄褐	φ1～2mm	○		○	○			○	海綿状骨針	良		
60	9	深鉢	3	SD2							7.5YR3/1 黒褐	φ1～2mm	○	○		○	○	○			良		
61・62・63	12	?	4	T-10	7層						7.5YR5/4 にぶい褐	φ1mm以下	○	○		○	○		○		良		
64	4	深鉢	3	O-17	8層		17/32	16	5		7.5YR7/3 にぶい橙	φ1～2mm	○	○	○	○	○	○			良		φmax5mm角閃石ごくわずか混入
65	7	鉢	1		10層		9/32	12.2			7.5YR4/2 灰褐	φ1～2mm	○	○	○		○				良		内面スス付着
66	36		2・3	SD2							10YR7/3 にぶい黄橙	φ1mm±	○	○		○	○	○			良		白色岩片を多く混入
67	24		1		8層						10YR7/3 にぶい黄橙	φ1mm±	○	○		○	○				やや軟		石英多い
68	31		1		8層						7.5YR6/3 にぶい褐	φ1mm±	○		○	○	○			輝石	やや軟		
69	37		1		8層						10YR8/2 灰白	φ1mm±	○	○		○		○		輝石	良		
	14			SD3							10YR7/3 にぶい黄橙	φ1mm以下	○	○	○	○	○				良		
	21		6	N-12	II層						7.5YR4/6 褐	φ1mm±	○	○			○	○			良	表裏縄文？	
	28		1		8層						10YR6/4 にぶい黄橙	φ1mm±	○	○	○	○					やや軟		縄線土器 内面朱付着
	35		1		8層						7.5YR4/2 灰褐	φ1mm以下	○	○		○					良		
	39		1		8層						10YR3/2 黒褐	φ1mm以下	○	○	○	○					良		チャート φ2mmくらい
	46		7	O-16 N-15	8層						7.5YR5/4 にぶい褐	φ1mm±	○	○				○			良		縄線土器 石英・雲母多い
	48		2	O-19	9層						2.5Y8/3 淡黄	φ1～2mm	○	○	○	○	○				良		円磨されたチャート稀にφ5mm位
	57		1		8層						10YR6/3 にぶい黄橙	φ1mm±	○	○		○					良		

第8表　弥生中期土器観察表

図版番号	整理番号	器種	地区	遺構グリッド	層位	残存率	口縁部残存率	口径	底径	器高	色調	胎土中の鉱物ほか 大きさ	石英	長石	チャート	石質岩片	角閃石	雲母	赤褐色粒子	その他	焼成	成形調整	備考
1	1015	甕	2	O-23・24	7層	1/2	9/32	18	6.6		7.5YR5/3 にぶい褐	φ1mm以下	○	○		○	○	○			良		雲母微量
2	1020	甕	4	T-05・10	7層	1/4	4/32	17	6.5		7.5YR4/2 灰褐	φ1mm±	○	○	○	○	○	○			良		円磨されたチャート稀に φ5mm
3	1017	甕	4	T-04・09	7層	1/2	13/32	16			5YR5/3 にぶい赤褐	φ1mm±	○	○	○	○	○				良		
4	1016	甕	4	T-03	8層	1/4	14/32	15			7.5YR6/3 にぶい褐	φ1mm±	○	○	○	○	○	○			良		円磨されたチャート
5	2089	甕	2	O-23	8層	1/2			5.7		10YR6/3 にぶい黄橙	φ1mm±	○	○		○	○	○			良	外・内：ハケ	
6	1014	甕	2	O-23	7層	1/4以下			8.2		10YR6/4 にぶい黄橙	φ1mm以下	○	○	○	○	○	○			やや軟	外・内：磨耗し不明	底部穿孔
7	1018	壺	4	T-02	7層	1/2					10YR7/3 にぶい黄橙	φ1mm以下	○	○		○	○				良		
8	1005	壺	3	SQ20・24	7層						10YR5/2 灰褐	φ1mm以下	○	○		○	○				良		白色岩片多い
9	1006	壺	3	SQ20	7層						7.5YR5/2 灰褐	φ1mm以下	○		○	○	○				良		
10	1004	壺	3	SQ20・O-22・23 T 02・03	7層						7.5YR5/2 灰褐	φ1mm以下	○	○		○	○				良		角閃石ごく少量
11	1043	壺	1		5層						7.5YR5/3 にぶい褐	φ1mm以下	○	○		○	○	○			良		

第９表　弥生時代後期～古墳時代土器観察表

残存率は、接合しない破片を含めた表面積全体に対する割合を示す。口縁部残存率は口唇部の残存率を示す。

図版番号	整理番号	器種	地区	遺構グリッド	層位	残存率	口縁部残存率	口径	底径	器高	色調	胎土中の鉱物ほか 大きさ	石英	長石	チャート	石質岩片	角閃石	雲母	赤褐色粒子	その他	焼成	成形・調整	備考
1	1027	甕	1		8層	1/4以下					5YR5/4 にぶい赤褐	φ1mm±	○	○		○	○		○		良		
2	1024	甕	3		7層	1/4以下					7.5YR4/3 褐	φ1mm±	○	○		○	○				良		
3	1026	甕	1		8層	1/4以下					7.5YR6/3 にぶい褐	φ1mm±	○	○		○	○				良		
4	1001	甕	3	SQ6	7層	1/4以下	12/32				7.5YR6/4 にぶい橙	φ1mm+	○	○		○		○	○	輝石？	良		
5	1021	甕	1		7層 8層	1/4以下					7.5YR5/4 にぶい褐	φ1mm±	○	○		○					良		
6	1025	甕	1		8層	1/4以下					7.5YR5/3 にぶい褐	φ1mm±	○	○		○	○	○			良		
7	1028	甕	1		8層	1/4以下					7.5YR4/2 灰褐	φ1mm±	○	○		○	○				良		
8	1022	甕	1		7層 8層	1/4以下					7.5YR5/4 にぶい褐	φ1mm以下	○	○		○	○				良		
9	1023	甕	1		8層	1/4以下					7.5YR6/3 にぶい褐	φ1mm+	○	○	○	○	○				良		
10	1029	甕	1		8層	1/4以下					7.5YR6/3 にぶい褐	φ1mm以下	○	○		○	○				良		
11	1039	甕	4	T-03・04・08・09	7層	1/4以下					10YR8/4 浅黄橙	φ1mm±	○	○	○	○	○				やや軟	外：波状文 内：ナデ	
12	1019	甕	3	SD7		1/4	26/32	15.0			5YR5/3 にぶい赤褐	φ1mm±	○	○	○	○	○		○		良		
13	1002	甕	2	O-13・19	7層	1/4以下	9/32	16.7			7.5YR5/3 にぶい褐	φ1mm±	○	○	○	○	○	○			良		雲母少量
14	1038	甕	4	T-03・04・08・09	7層	1/4以下	1/32	15.3			7.5YR3/3 暗褐	φ1~2mm	○	○		○	○	○	○		良	外：波状文 内：ナデ	
15	1040	甕	3	SQ2・SD10	7層	1/4	14/32	14.8			7.5YR4/1 褐灰	φ1mm以下	○	○		○	○	○			良		
16	1042	甕	3	SQ25	7層	1/4	12/32	18.4			7.5YR5/2 灰褐	φ1mm±	○	○	○	○	○		○		良		粕清水
17	1035	甕	1		7層	1/4以下	4/32	13.4			7.5YR6/4 にぶい橙	φ1mm以下	○	○	○		○	○	○		良	外：ロナデ→波状文 内：ナデ	
18	1003	甕	3	O-23	7層	3/4	32/32	15.6	6.8	25.3	7.5YR7/3 にぶい橙	φ1~2mm	○	○	○	○	○	○	○		やや軟		雲母・角閃石ごく少量
19	2187	甕B	2	O-13	7層	3/4	5/32	10.9	6.4	14.1	10YR7/3 にぶい黄橙	φ1~2mm	○	○		○			○		良	外・内：ハケのちナデ	底外面ケズリ 底部モミ痕 石質岩片多い
20	2262	壺	1	O-02	8層	1/4以下	5/32	13.8			10YR7/2 にぶい黄橙	φ1mm±	○	○		○					良	外：ハケ 内：ナデ	
21	2297	甕A	1		8層	1/4以下	4/32	16.4			7.5YR6/6 橙	φ1mm±	○	○		○	○		○		良	外：ロハケのちナデ→胴ハケ 内：ロナデ→胴ハケ	
22	2307	甕A	1		7層	1/4以下	4/32	15.2			5YR7/6 橙	φ1mm±	○	○	○	○	○				良	外：ナデ 内：ナデ	
23	2306	甕A	1		8層	1/4以下	2/32	15.0			10YR8/2 灰白	φ1~2mm	○	○	○	○		○			良	外：ナデ 内：ナデ	北陸系胎土・丸いチャート多い
24	2304	甕A	1	N-09	7層	1/4以下	13/32	18.9			5YR6/6 橙	φ1~2mm	○	○		○		○			良	外：ロナデ→胴ハケ 内：ロナデ→胴ハケ	
25	2303	甕A	1	O-11	8層	1/4以下	6/32	14.9			10YR8/3 浅黄橙	φ1mm±	○		○	○	○				良	口縁端部ナデ　外：ハケ 内：ロハケ→胴ナデ	北陸系胎土
26	2269	甕A	1		8層	1/4以下	8/32	14.0			10YR8/2 灰白	φ1mm±	○	○		○			○		良	外・内：ナデ　内面頸部ハケ	
27	2213	甕A	1		8層	1/4以下	11/32	15.8			7.5YR6/4 にぶい橙	φ2mm±	○	○				○	○		良	外：ロナデ→胴ハケ 内：口ハケのちナデ→胴ナデ	口縁部スス付着 赤褐色粒子・雲母少量混入
28	2270	甕A	1		8層	1/4以下	4/32	16.0			5YR8/3 淡橙	φ1mm±	○	○	○						良	外・内：ナデ	
29	2142	甕A	2 7	SD10、N-15・20、O-11・16	SD10-6層 8層	1/4以下	30/32	14.4			10YR8/2 灰白	φ1~2mm	○	○				○			良	外：ロナデ→ハケのちナデ 内：ナデ　頸部ハケ	石英・長石多く、雲母少量
30	2305	甕A	1		8層	1/4以下	6/32	18.0			5YR4/2 灰褐	φ1mm以下	○	○		○					良	外：ロナデ→胴ハケ 内：ナデ	石英多い
31	2311	甕A	1		5層上	1/4以下	3/32	18.2			7.5YR7/3 にぶい橙	φ1~2mm	○	○	○	○	○			海綿状骨針	良	外：ロナデ→胴ハケ 内：ナデ	北陸系胎土
32	2308	甕A	3	O-24	7層	1/4以下	4/32	20.0			7.5YR5/3 にぶい褐	φ1mm±	○	○		○					良	外：ロハケ状のナデ→ハケ 内：ナデ	内外スス付着

図版番号	整理番号	器種	地区	遺構グリッド	層位	残存率	口縁部残存率	口径	底径	器高	色調	胎土中の鉱物ほか									焼成	成形・調整	備考
												大きさ	石英	長石	チャート	石質岩片	角閃石	雲母	赤褐色粒子	その他			
33	2310	甕A	1		5層上	1/4以下	17/32	17.4			7.5YR7/3 にぶい橙	φ1~2mm	○	○	○	○		○			軟	外：口ナデ→胴ハケのちナデ 内：ナデ	石質岩片max3mm 北陸系胎土
34	2085	小型甕A	4	T-04	7層		13/32	13.1	2.6		10YR8/2 灰白	φ1mm+	○	○	○	○	○	○			良	外：口～胴ナデ→ハケ→ケズリ 内：口ナデ・胴ハケ	円磨されたチャート多い
35	2083	甕B	4	T-07	7層	1/4	23/32	16.8			7.5YR7/3 にぶい橙	φ1mm±	○	○							良	外：口ナデ→胴ハケ 内：ハケのちナデ	胴外面スス付着
36	2226	甕A	1		8層	1/4	30/32	18.9			7.5YR7/4 にぶい橙	φ1mm±	○		○	○	○		○		良	外・内：口ナデ→ハケ(磨耗)	北陸系胎土 外面スス付着
37	2180	甕A	7	N 19・20・23・24	7層	3/4	20/32	12.7			7.5YR6/3 にぶい褐	φ1~2mm	○	○	○	○			○		良	外：口～胴ナデ→胴ハケ→ナデ 内：口ハケのちナデ→胴ナデ	石英・長石・白色岩片多い。 円磨されたチャート
38	2158	甕A	7	N-24	7層	1/2	25/32	17.9			7.5YR7/3 にぶい橙	φ1~2mm	○	○	○	○					やや軟	外：口ハケのちナデ→ハケ 内：ハケのちナデ	北陸系胎土 外面スス付着
39	2117	甕A	1	N-05	7層 8層	完	30/32	18.1	2.0	23.8	7.5YR8/3 浅黄橙	φ1~2mm maxφ8mm	○	○	○	○	○	○	○		良	外：ナデ→底ケズリ 内：ナデ　輪積み痕あり	雲母ごく少量
40	2100	甕A	7	N-22	7層	3/4	8/32	16.4			7.5YR7/4 にぶい橙	φ1mm±	○	○	○	○		○	○		良	外：口・頸ナデ→胴ハケのちナデ→ケズリのちナデ 内：口・胴ナデ→ケズリのちナデ	スス付着 チャート・白色岩片・赤褐色粒子・雲母少量
41	2144	甕A	1	O-03	8層	1/4以下	12/32	16.4			7.5YR7/4 にぶい橙	φ1mm±	○	○	○	○					良	外：口ハケのちナデ→ハケ 内：ナデ	長石・チャート少量
42	2295	甕A	1		8層	1/4以下	11/32	16.8			10YR8/2 灰白	φ1mm±	○	○	○	○	○				良	外：口ナデ→頸・胴ハケ 内：口ヨコハケ→ナデ	石英多い
43	2104	甕A	7	N 19・20・24	8層	1/4	28/32	16.2			7.5YR5/4 にぶい褐	φ1mm±	○	○	○	○	○	○			良	外：口ハケのちナデ→胴ハケ→ケズリ 内：口ハケのちナデ　胴ナデ　輪積み痕	チャート・石質岩片・角閃石少量
44	2169	甕A	5	Y-09	7層	1/4以下	13/32	16.8			7.5YR7/4 にぶい橙	φ1mm以下	○	○		○					良	外：口ハケのちナデ→ハケ 内：口ハケのちナデ→ハケ	微細な石質岩片多い
45	2296	甕A	1	N-05	7層	1/4以下	5/32	17.9			10YR8/3 浅黄橙	φ1~2mm	○		○	○			○		良	外：ナデ 内：ナデ	北陸系胎土
46	2214	甕A	1		8層	1/4以下	22/32	17.4			10YR8/2 灰白	φ1mm±	○	○		○					良	外：口ナデ→胴ハケ 内：口ハケのちナデ→胴ナデ	口縁部スス付着 白色岩片少量
47	2069	甕A	3	SQ20・SQ25	7層	1/4	16/32	16.0			2.5Y8/3 淡黄	φ1~2mm	○	○	○	○		○			やや軟	外：口ハケのちナデ→胴ハケ 内：口ハケのちナデ→胴ケズリ	北陸系胎土 チャート粒子多い
48	2119	甕A	2	O-24	7層	1/4	20/32	17.6			5YR6/8 橙	φ1mm±	○	○		○					やや軟	外：口ハケ→ハケのちナデ 内：口ハケ→ナデ	
49	2210	甕A	1	O 01	8層	1/4以下	4/32	20.4			2.5YR5/4 にぶい赤褐	φ1mm以下	○	○		○		○			良	外：口唇部ナデ→ハケ→胴ハケ 内：口ハケのちミガキ→胴ナデ	黒色岩片 花崗岩質岩片
50	2231	甕A	1		8層	1/4以下	2/32	19.0			7.5YR5/3 にぶい褐	φ1~2mm	○	○		○					良	外：ハケ→ミガキ 内：口ナデ→ヨコミガキ	長石多い
51	2106	甕A	2	O 18	7層	1/2	4/32	16.2	6.0	22.4	10YR7/2 にぶい黄橙	φ1mm±	○	○	○	○	○	○			良	外：口ナデ→ハケ→底ケズリ 内：ナデ→底ケズリ	
52	2292	甕B	1		5層上	1/4以下	6/32	8.9			7.5YR6/3 にぶい褐	φ1mm±	○	○		○					やや軟	外：ナデ 内：ナデ	
53	2289	甕B	1		8層	1/4以下	8/32	18.3			7.5YR6/4 にぶい橙	φ1mm±	○	○	○	○			○		良	外：口縁端部ナデ→ハケ 内：ナデ(口ハケ残)	白色岩片max3mm
54	2194	甕B	1		8層	1/4以下	18/32	14.0			5YR5/4 にぶい赤褐	φ1~2mm	○	○	○	○					良	外：口タテハケ→胴ナデ 内：口ヨコハケ→胴ナデ	石質岩片(白色・赤褐色)少量
55	2291	甕B	1		8層	1/4以下	4/32	18.0			10YR7/3 にぶい黄橙	φ1~2mm	○	○	○	○					良	外：ハケ状工具によるナデ? 内：ハケ状工具によるナデ?	細粒の黒色鉱物
56	2283	甕B	7	N-15・20, O-11・16	8層		18/32	15.1			10YR6/2 灰黄褐	1mm以下	○	○	○	○				輝石	良	外：タテハケ 内：口ヨコハケ→胴ナデ	
57	2290	甕B	1		8層	1/4以下	5/32	17.0			7.5YR6/3 にぶい褐	φ1mm±	○	○		○	○				良	外：ナデ 内：ナデ	
58	2145	甕B	3	SQ15・O-17	7層	1/4	32/32	16.2			7.5YR7/4 にぶい橙	φ1mm± maxφ7mm	○	○	○	○	○	○	○		良	外：口ハケのちナデ→ハケ 内：ハケのちナデ	
59	2230	甕B	1		8層	1/4	6/32	15.6			10YR8/2 灰白	φ1mm±	○	○	○		○	○	○		良	外：口ナデ→ハケ 内：ハケのちナデ	
60	2167	甕B	7	N 23・24	7層	3/4	32/32	17.5	3.1	21.9	10YR7/3 にぶい黄橙	φ1~2mm		○	○	○		○	○		やや軟	外：口ナデ→胴ハケ→下半部ケズリ 内：ナデ　輪積み痕あり	長石・雲母少量
61	2285	甕B	1		7層下		4/32	15.6			7.5YR7/4 にぶい橙	φ1~2mm	○	○	○	○			○		良	外：ナデ 内：口縁端部ナデ→ハケ	丸いチャート

図版番号	登録番号	器種	地区	遺構グリッド	層位	残存率	口縁部残存率	口径	底径	器高	色調	胎土中の鉱物ほか									焼成	成形・調整	備考
												大きさ	石英	長石	チャート	石質岩片	角閃石	雲母	赤褐色粒子	その他			
62	2282	甕B	2	SQ15	7層		4/32	14.0			7.5YR6/4 にぶい橙	1mm以下	○	○	○		○			白色粒子	良	外：ナデ 内：ナデ	外面スス付着
63	2097	甕A	2	O-19	7層	1/4	19/32	13.8			5YR5/4 にぶい赤褐	φ1~2mm	○	○	○	○	○	○			良	外：口ナデ→胴ハケのちナデ→ケズリ 内：ナデ	
64	2004	甕A	3	SQ13	7層	1/4	15/32	17.4			7.5YR7/4 にぶい橙	φ2mm+	○	○	○	○		○	○		やや軟	外：口ナデ→胴ハケのちナデ 内：ナデ	チャート・白色岩片・赤褐色粒子少量
65	2238	甕B	1		7層	1/4	24/32	14.8			5YR6/6 橙	φ1~4mm	○	○	○	○	○	○	○		やや軟	外：口ナデ→ハケ 内：ハケのちナデ	北陸系胎土
66	2140	甕B	1	O-01-06	7層 8層	1/4以下	20/32	16.6			7.5YR6/3 にぶい褐	φ1mm±	○	○		○					やや良	外：ナデ 内：ナデ	鉱物少量
67	2109	甕B	3	SD10	SD10-9層	3/4	16/32	13.0	5.2	15.0	7.5YR6/6 橙	φ1mm± 稀にφ5~7mm	○	○	○	○			○	海綿状骨針	軟	外：口ナデ→胴ハケ→底ケズリ 内：ナデ　指頭圧痕あり	
68	2029	甕B	3	SQ17		1/4	30/32	14.8			10YR5/2 灰黄褐	φ1mm±	○	○	○	○		○		輝石？	良	外：ナデ→ハケ 内：口ハケ→ナデ	胴外面剥離部分多い
69	2195	甕B	1	N-05	7層 8層	1/2	19/32	20.1			7.5YR6/4 にぶい橙	φ1~2mm	○	○	○	○		－	○	輝石？	良	外：口ハケのちナデ→ハケ 内：ナデ	
70	2260	甕B	1	O-01-06	7層 8層	1/4以下	8/32	11.6			10YR8/2 灰白	φ1mm±	○	○		○			○		やや軟	外：ハケ 内：ハケ→ナデ　頸部指頭圧痕	
71	2176	甕B	1	O-02-03	7層	1/4	11/32	14.5			7.5YR7/3 にぶい橙	φ1mm±	○	○	○	○			○		良	外：口タテハケ→胴ナデ 内：口ヨコハケ→胴ナデ	円磨されたチャート・赤褐色岩片.
72	2115	甕B	7	N-19-20-24	8層		16/32	19.4			7.5YR6/3 にぶい褐	φ1mm±	○	○	○	○		○	○	輝石？	良	外：口ナデ→胴ハケのちナデ 内：ナデ　輪積み痕あり	
73	2013	甕B	2	SQ13	7層	1/4以下	12/32	20.8			10YR6/3 にぶい黄橙	φ1mm±	○	○		○		○			良	外：口ナデ(指押さえ痕)→胴ハケ→胴ナデ 内：ハケのちナデ	雲母少量
74	2284	甕B	1	O-06	5層 8層		5/32	16.5			10YR6/4 にぶい黄橙	1mm以下	○	○	○	○	○	○			良	外：口ナデ→胴ハケ 内：ナデ(口縁部ハケわずか残る)	石質岩片max5mm
75	2288	甕B	1	N-05	7層		7/32	16.0			7.5YR7/4 にぶい橙	φ1~2mm	○	○	○	○	○				良	外：口ナデ→胴ハケ 内：ナデ	
76	2156	甕B	7	N-22	7層	1/4	22/32	15.2			7.5YR7/3 にぶい橙	φ1~2mm	○	○	○	○			○	海綿状骨針	やや軟	外：口ハケのちナデ→胴タテハケ 内：ハケ	口縁のナデはかなり粗雑 赤褐色岩片・石英少量
77	2070	甕B	2	SQ20	7層	3/4	4/32	13.6			10YR7/3 にぶい黄橙	φ1mm以下	○	○	○	○	○	○			良	外：口ナデ→胴ハケ 内：ナデ→ハケのちナデ	円磨されたチャートが多い。
78	2287	甕B	1		8層		1/32	17.5			7.5YR7/4 にぶい橙	φ1mm±	○	○	○	○			○		良	外：口ナデ→胴ハケ 内：ナデ	
79	2174	甕B	3	O-13	7層	1/4以下	20/32	17.7			7.5YR7/4 にぶい橙	φ1~2mm	○			○					良	外・内：ナデ	石英・石質岩片多量
80	2189	甕？ 壺？	7	N-19	8層	1/4	10/32	16.3			7.5YR6/3 にぶい褐	φ1mm以下	○	○	○				○		良	外：口ハケのちナデ→ナデ 内：ナデ　輪積み痕あり	
81	2190	甕B		N-19	8層	1/4以下	3/32	16.6			7.5YR6/3 にぶい褐	φ1mm±	○	○	○	○		○	○		良	外・内：ハケのちナデ 内：ハケのちナデ輪積み痕あり	茶褐色粒子・チャート・雲母少量
82	2025	甕A	3	SQ20-24-25	7層	1/4	11/32	18.6			7.5YR8/2 灰白	φ1~4mm	○		○	○					やや軟	外：口ナデ→胴ハケ 内：口ナデ→胴ハケのちナデ	北陸系胎土　外面スス付着 円磨されたチャート多い
83	2247	甕B	1		8層	1/4	13/32	19.6			7.5YR6/3 にぶい褐	φ1~2mm	○		○	○					良	外：口ナデ→胴ハケ 内：ナデ	石英・チャート多い
84	2149	甕？ 壺？	7	N-19-20-24	8層		21/32	18.2			7.5YR6/3 にぶい褐	φ1mm±	○	○		○	○				良	外：ハケのちナデ 内：口ミガキ胴ナデ	
85	2227	甕B	1		8層	1/2	28/32	13.3			5YR5/3 にぶい赤褐	φ1mm以下	○	○		○	○	○	○		良	外：口ナデ→ハケ 内：ナデ	
86	2293	甕B	1		7層 8層	1/4以下	23/32	19.0			5YR6/4 にぶい橙	φ1mm±	○	○	○	○			○		良	外：口ハケのちナデ→ハケ 内：口ハケのちナデ→ナデ	長石max5mm
87	2286	甕B	7	N-19-20-24	8層		7/32	17.0			7.5YR6/3 にぶい褐	φ1mm+	○	○	○	○	○	○			良	外：ナデ 内：ナデ	
88	2147	甕B		N-19-20-24	8層	3/4	28/32	16.3			10YR6/3 にぶい黄橙	φ1mm以下	○	○	○	○	○	○	○		良	外：口ナデ→ケズリ 内：ナデ	雲母・角閃石少量
89	2279	甕B	7		8層	1/4以下	2/32	15.8	4.3		5YR5/4 にぶい赤褐	φ1mm±	○	○		○		○			やや軟	外：口ナデ→ハケ→底ケズリ 内：ナデ　胴摩耗著しい	底内面炭付着 雲母・石英多い
90	2064	甕B	3	SQ7・SQ15	7層	1/4	32/32	16.2			7.5YR6/4 にぶい橙	φ1mm以下	○	○	○	○	○	○			良	外：口ナデ→ハケ　輪積み痕残 内：ナデ　輪積み痕残	細かなハケ 雲母・角閃石少量
91	2003	甕A	3	SQ13・O-17	7層	3/4	32/32	17.9	6.0	25.7	7.5YR7/4 にぶい橙	φ1mm以下	○	○	○	○	○	○	○		良	外：口ハケのちナデ→ハケ→ケズリ 内：ハケ→ハケのちケズリ	内外面輪積み痕凹み著しい
92	2146	甕B	3	SQ15	7層	1/2	27/32	19.3	1.9		10YR7/3 にぶい黄橙	φ1mm±	○	○	○			○	○		良	外・内：口ナデ→胴ハケのちナデ　外面底部付近ミガキあり。	口縁内外面にモミ痕

図版番号	整理番号	器種	地区	遺構グリッド	層位	残存率	口縁部残存率	口径	底径	器高	色調	胎土中の鉱物ほか 大きさ	石英	長石	チャート	石質岩片	角閃石	雲母	赤褐色粒子	その他	焼成	成形・調整	備考
93	2017	甕B	3	SQ5	7層	1/4	6/32	9.8	2.1	10.0	7.5YR6/4 にぶい橙	φ1㎜±	○	○	○	○			○		やや軟	外：磨耗しているがハケのちナデ→底ケズリ→平にナデ 内：磨耗しているがナデ	
93	2017	甕A	3	SQ5	7層	1/4	6/32	9.8		10.0	7.5YR6/4 にぶい橙	φ1㎜±	○	○	○	○			○		やや軟	外・内：ナデ(磨耗)	
94	2103	甕B	3	O-17	7層	3/4	12/32	11.0	3.2	12.2	7.5YR7/3 にぶい橙	φ1㎜±	○	○	○	○			○		良	外：ナデ→ケズリ 内：ナデ	
95	2256	甕B	3	SD01		ほぼ完	28/32	13.6	4.6	19.2	7.5YR6/4 にぶい橙	φ1㎜±	○			○		○	○		良	外：ナデ→底ケズリ 内：ナデ	内面輪積み痕 雲母・石英多い
96	2023	甕B	3	SQ24・25	7層	1/4	8/32	11.8			7.5YR7/4 にぶい橙	φ1㎜±	○	○	○	○	○	○	○		良	外：ミガキ→ハケのちナデ 内：口ミガキ→磨耗	
97	2057	鉢？	3	SQ15	7層	1/2	17/32	13.3			5YR6/6 橙	φ1㎜±	○	○	○	○	○	○	○		良	外：ミガキ 内：ナデ	
98	2274	甕B	2	O-13	7層	1/4以下	6/32	12.1			10YR8/3 浅黄橙	φ1㎜±	○	○			○		○	火山ガラス(AT)	良	外・内：ナデ	
99	2196	甕B	3	O-24	7層	1/4以下	20/32	14.9			10YR8/2 灰白	φ1～2㎜	○	○	○	○			○		やや軟	外・内：ナデ	
100	2135	甕B	3	SQ17	7層	1/4以下	22/32	18.0			10YR7/2 にぶい黄橙	φ1㎜±	○	○	○	○			○		やや軟	外・内：磨耗するがナデ	チャート・石質岩片(白色・赤褐色)少量
101	2268	甕A	1	O 01	7層	1/4以下	12/32	12.4			5YR4/3 にぶい赤褐	φ1～2㎜	○	○	○	○					良	外：ナデ 内：ハケ	
102	2294	甕B	3	O-18	7層 9層	1/4以下	7/32	14.8			10YR7/3 にぶい黄橙	φ1㎜±	○	○	○		○			海綿状骨針	良	外：口ナデ→ハケ→ナデ 内：ナデ	
103	2224	甕A	1		8層	ほぼ完	28/32	11.6	5.3	14.9	5YR6/6 橙	φ1～2㎜	○	○	○	○	○				良	外：口ヨコミガキ→胴タテミガキ 内：口ヨコミガキ→胴ナデのちハケ	円磨されたチャート
104	2091	甕A	2	SQ18・O-23	7層	1/2	9/32	14.2	5.5	9.7	7.5YR7/3 にぶい橙	φ1㎜± チャートは～3㎜	○	○	○	○	○		○		良	外：口ナデ→胴・底ハケ 内：ハケのちナデ	円磨されたチャート 角閃石少量
105	2055	甕B	3	O-18	7層 8層 9層	ほぼ完	10/32	17.0	7.6	20.0	7.5YR7/4 にぶい橙	φ1～2㎜	○	○	○	○	○		○		良	外：口ハケのちナデ→ケズリ 内：口ハケのちナデ→胴ハケ→ナデ	胴下半部と底部に幅2㎜長さ20㎜位の圧痕あり
106	2076	甕B	4	T-08	7層	完	32/32	12.7	7.7	14.8	10YR8/2 灰白	φ1㎜±	○	○	○	○	○	○	○	輝石	軟	外：口ナデ→胴タテハケ→ナデ 内：ハケ→底ナデ　輪積み痕あり	胴下半部スス付着 石質岩片・赤褐色粒子・角閃石・輝石少量
107	1044	甕D	3	SQ4・12	7層 8層	1/4	10/32	11.6	2.0	12.5	10YR8/2 灰白	φ1～2㎜	○	○	○	○	○	○	○		やや軟	外：口縁凹線文→胴ハケ→底ケズリ 内：口ナデ→ハケ→ナデ	雲母・角閃石・赤褐色粒子少量
108	2215	甕A	1	O 01	7層	1/4以下	3/32	15.0			7.5YR6/6 橙	φ1㎜±	○		○	○					やや軟	外：凝凹線文 内：ナデ	石英・チャート多い
109	2298	甕D	1		8層	1/4以下	8/32	15.0			7.5YR6/3 にぶい褐	φ1㎜±	○	○	○	○					良	外：ナデ 内：ナデ	
110	2299	甕D	1		8層	1/4以下	2/32	18.0			5YR6/4 にぶい橙	φ1～2㎜	○		○	○			○		良	外：ナデ 内：ナデ	石質岩片(白・赤褐・黒)
111	2301	甕D	1		8層	1/4以下	4/32	17.6			10YR7/2 にぶい黄橙	φ1～2㎜	○	○	○			○			良	外：口ナデ→胴ハケ 内：ナデ	石英・長石 maxφ4㎜
112	2212	甕D	1		8層	1/4	22/32	13.2			7.5YR6/3 にぶい褐	φ1～2㎜	○	○		○					良	外：口ナデ→ハケ 内：ナデ	
113	2217	甕A	7	N-19・20・24	8層	1/4以下	4/32	14.2			10YR7/3 にぶい黄橙	φ1㎜± maxφ8㎜	○		○	○					やや軟	外：口ナデ→胴ハケ 内：ナデ	石英・チャート多い
114	2267	甕A	1		7層 8層	1/4以下	2/32	17.2			10YR8/2 灰白	φ1㎜±	○	○		○					良	外・内：ナデ	
115	2300	甕D	2	SQ17	7層	1/4以下	3/32	14.0			7.5YR6/2 灰褐	φ1㎜±	○		○					海綿状骨針	良	外：ナデ 内：口ナデ→胴ハケ	
116	2302	甕C	4	T-03・04・08・09	7層	1/4以下	6/32	18.0			7.5YR7/4 にぶい橙	φ1㎜±	○	○	○	○			○		やや軟	外：ナデ 内：ナデ	石質岩片(白・赤褐・黒)北陸系
117	2275	甕E	7	N-19・20	8層	1/4以下	5/32	13.0			10YR6/2 灰黄褐	φ1㎜以下	○	○		○		○			良	外・内：ナデ	
118	2272	甕E	1		7層 8層	1/4以下	12/32	13.0			10YR8/3 浅黄橙	φ1㎜±	○	○	○			○	○		良	外・内：ナデ	
119	2132	甕E	3	SQ7・SQ15	7層	1/4以下	7/32	13.4			10YR7/2 にぶい黄橙	φ1㎜±	○	○		○		○			良	外：口ナデ→ハケのちナデ 内：口ハケのちナデ→ハケ	布留甕 雲母・石質岩片少量
120	2273	甕F	1	N-06	8層	1/4	8/32	14.8			7.5YR6/3 にぶい褐	φ1～2㎜	○	○		○	○	○	○		良	外：口ナデ→タタキ 内：口ナデ→ハケ	
121	2271	甕F	1		7層 8層	1/4	16/32	15.1			10YR8/2 灰白	φ1㎜±	○	○	○	○		○	○		やや軟	外：口ナデ→タタキ 内：口ナデ→ハケ	胴部内面指頭圧痕
122	2244	甕G	1		7層 8層	1/4以下	14/32	16.2			7.5YR5/3 にぶい褐	φ1㎜±	○	○				○	○		良	外：口ナデ→ハケ 内：ナデ	

挿図番号	整理番号	器種	地区	遺構グリッド	層位	残存率	口径値/残存率	口径値	底径	器高	色調	胎土中の鉱物ほか 大きさ	石英	長石	チャート	石質の方	角閃石	雲母	赤褐色粒子	その他	焼成	成形・調整	備考
123	2116	壺G	1	N-05	7層	1/4以下	6/32	13.6			7.5YR7/3 にぶい橙	φ1mm土	○	○			○		○		良	外：ロナデ→調ハケ 内：ナデ	白色岩片・雲母少量
124	2092	壺G	2	O-23-24	7層	1/4以下	9/32	15.6			10YR8/2 灰白	φ1mm土	○	○			○		○		良	外：ロナデ→調ハケ 内：ナデ	
125	2170	壺G	7	N-19	8層	1/4以下	4/32	14.4			7.5YR5/4 にぶい褐	φ1~2mm	○	○	○	○	○	○			良	外：ロナデ→調ハケ 内：ナデ	雲母・角閃石少量
126	2248	壺G	1		7層 8層	1/4	30/32	13.6			7.5YR7/4 にぶい橙	φ1mm土	○	○	○	○	○	○	○		良	外：ロナデ→ハケ 内：ナデ	断面土層による比線状のナデ
127	2245	壺G	1		7層 8層	1/4以下	5/32	16.8			10YR8/2 灰白	φ1mm以下	○	○	○	○					良	外：ロナデ→ハケ 内：ナデ	石質岩片（白色・赤褐色）
128	2249	壺G	1		8層	1/4	26/32	13.4			7.5YR7/4 にぶい橙	φ1mm以下	○	○			○		○	○	良	外：ロナデ→ハケ 内：ナデ	断面土層による比線状のナデ
129	2113	壺G	3	O-13	8層	1/4	17/32				5YR6/4 にぶい橙	φ1mm土	○	○	○	○			○		良	外：ハケのちナデミガキ 内：ハケのちヨコミガキ	
130	2232	壺G	1		8層	1/4以下					5YR6/8 橙	φ1~2mm	○	○			○	○		○	やや軟	外：ハケ 内：ナデ	
131	2234	壺G	1		8層	1/4以下					5YR5/4 にぶい赤褐	φ1mm土	○	○			○				良	外：ハケ 内：ナデ	
132	2252	壺G	1		5層	1/4以下					7.5YR8/2 灰白	φ1~2mm	○	○			○				良	外：ハケ 内：ナデ	
133	2235	壺G	1		8層	1/4以下					10YR7/3 にぶい黄橙	φ1mm土	○	○	○	○	○	○			やや軟	外・内：ナデ 胴内面に指頭圧痕	雲母 三角少量
134	2243	壺G	1		8層	1/4以下				10.4	10YR8/3 にぶい黄橙	φ1mm土	○	○	○						良	外・内：ナデ	内面されたチャート
135	2242	壺G	1		8層	1/4以下					7.5YR5/3 にぶい褐	φ1mm土	○	○		○					良	外・内：ナデ	
136	2068	壺G	3	SQ20	7層	1/4以下				9.0	10YR8/2 灰白	φ1mm土	○	○		○	○				軟	外・内：ナデ	
137	2241	壺G	1		8層	1/4以下				7.1	7.5YR5/3 にぶい褐	φ1mm土	○	○		○					良	外：ハケ 内：ナデ	白色岩片多い
138	2240	壺G	1		8層	1/4以下				8.5	7.5YR5/3 にぶい褐	φ1mm土	○	○		○			○		やや軟	外・内：ナデ	白色岩片多い
139	2250	壺G	1		7層 8層	1/4以下					7.5YR6/3 にぶい褐	φ1mm以下	○	○		○					良	外・内：ハケのちナデ	混入物少ない
140	2237	壺G	1		8層	1/4以下				8.2	10YR7/2 にぶい黄橙	φ1mm一	○	○		○	○		○		良	外・内：ナデ	
141	2236	壺G	1		7層	1/4以下					7.5YR7/4 にぶい橙	φ1mm土	○	○				○	○		良	外：ハケ 内：ナデ→ハケ	角ばった石英・長石多い
142	2313		1	O-01	8層					2.0	10YR8/2 灰白	φ1~2mm	○	○	○				○		やや軟	外：タタキ→並ナデ 内：ナデ	a1類 花崗岩胎土
143	2315		1		8層					2.0	7.5YR6/3 にぶい橙 内面	φ1~2mm	○	○	○	○		○			良	外：ハケ→並ナデ 内：ハケ	a1類 花崗岩胎土 花崗岩系の岩片
144	2344		7	N-22	7層					2.9	7.5YR6/2 灰褐	φ1mm二	○	○		○		○			良	外：ハケ→並ナデ 内：ナデ	a1類 底径小
145	2345		2	SQ15	7層					3.1	2.5YR6/4 にぶい橙	φ1~2mm	○	○	○	○	○				良	外：ハケのちナデ 内：ハケのちナデ	a1類 底径小 石形結晶の石英多い
146	2342		2	SQ15	7層					3.7	7.5YR6/3 にぶい橙	φ1mm土	○	○	○	○	○				良	外：ケズリ 内：ナデ	a1類 底径小
147	2335		1		7層					4.1	5YR6/4 にぶい赤褐	φ1mm土	○	○	○	○	○				良	外：ハケ 内：ナデ	a1類
148	2340		2	O-14	7層					4.0	5YR5/4 にぶい赤褐	φ1mm以下	○	○	○	○	○				良	外：ハケ→並ケズリ 内：ナデ	a1類 底径小
149	2333		1		7層 8層					5.4	7.5YR6/3 にぶい橙	φ1mm土	○	○	○	○	○				良	外：ケズリ→底部 内：ナデ	a1類
150	2341		1		5層					4.5	7.5YR6/3 にぶい橙	φ1mm十	○	○		○		○			良	外：ケズリ 内：ナデ	a1類 底径小
151	2334		7	N-15-20, O-11-16	8層					4.6	7.5YR6/4 にぶい橙	φ1~2mm	○	○	○	○	○				良	外：ナデ 内：ナデ 内底スス付着	a1類
152	2332		7	N-19-20-24	8層					4.7	7.5YR4/2 灰褐	φ1mm十	○	○		○		○			良	外：ナデ→並ケズリ 内：ナデ（ハケ痕）	a1類 石英・長石多い 内面スス付着
153	2343		1		8層					3.9	7.5YR4/2 灰褐	φ1mm土	○	○	○	○					良	磨耗し不明	a1類 底径小
154	2346		2	SQ16	7層					4.2	7.5YR6/4 にぶい橙	φ1mm土	○	○	○					○	良	外：ナデ 内：ナデ	a2類
155	2347		1	O-06-07	5層 7層					4.6	5YR5/4 にぶい赤褐	φ1~2mm	○	○			○		○		やや軟	外：ナデ 内：ハケのちナデ	a2類
156	2349		1		8層					4.8	5YR5/4 にぶい赤褐	φ1mm以下	○		○	○	○				良	外：ナデ 内：ハケのちナデ	a2類 全体に混入物少ない
157	2349		7	N-19	8層					3.2	10YR5/3 にぶい黄褐	φ1mm土	○	○	○	○		○	○		良	外：ナデ 内：ナデ	a2類

図版番号	整理番号	器種	地区	遺構グリッド	層位	残存率	口縁部残存率	口径	底径	器高	色調	胎土中の鉱物ほか 大きさ	石英	長石	チャート	石質岩片	角閃石	雲母	赤褐色粒子	その他	焼成	成形・調整	備考
158	2337		1	N-10	8層				5.6		10YR5/4 にぶい黄褐	φ1mm以下	○	○	○	○	○	○			良	外：ハケ→底ナデ 内：ナデ	a3類
159	2336		1		7層 8層				6.2		10YR5/4 にぶい黄褐	φ1mm以下	○	○	○	○	○	○			良	外：ハケ 内：指ナデ痕	a3類
160	2338		1		7層 8層				6.7		10YR5/4 にぶい黄褐	φ1mm以下	○	○	○	○					良	外：ナデ→底ケズリ？ 内：ナデ	a3類
161	2339		2	SQ18	7層				6.5		5YR6/3 にぶい橙	φ1mm±	○	○		○	○				良	外：ミガキ(磨耗)底ナデ 内：磨耗し不明	a3類
162	2322		2	SQ15	7層				4.8		7.5YR7/4 にぶい橙	φ1～2mm	○	○		○	○				良	外：ケズリ→底ナデ 内：ナデ	a4類
163	2314		2	SQ20	7層				5.6		10YR8/2 灰白	φ1～2mm	○	○	○	○		○			やや軟	外：ハケ→底ナデ 内：ナデ→底指頭圧痕	a4類　北陸系胎土　底部内面に指頭圧痕あり
164	2312		1	O-01	8層				3.0		7.5YR8/2 灰白	φ1～2mm	○	○	○	○				海綿状骨針	やや軟	外：ケズリ→底ナデ 内：ハケ	a4類 北陸系胎土
165	2324		1		8層				5.0		7.5YR6/6 橙	φ1mm以下	○	○	○	○	○				良	外：ハケ→底ナデ 内：ナデ	a4類
166	2323		1	O-06、N-05	5層 7層				5.0		7.5YR6/4 にぶい橙	φ1mm以下	○	○	○		○	○			良	外：ケズリのちハケ→底ナデ 内：ミガキ	a4類
167	2319		2	SQ15	7層				2.4		7.5YR6/3 にぶい褐	φ1mm±	○	○	○	○	○		○		良	外：ハケ 内：ナデ	a4類
168	2320		2	T-03・04・08・09	7層				3.6		10YR6/2 灰黄褐	φ1mm以下	○	○	○	○	○				良	外：ナデ 内：ナデ	a4類
169	2321		7	N-24	7層				5.0		10YR6/2 灰黄褐	φ1～2mm	○	○	○						良	外：ハケ→底ナデ 内：ハケ	a4類
170	2186	甕	3	SD10	SD10-9層	1/2			3.7		10YR8/3 浅黄橙	φ1～2mm	○	○	○	○	○	○			良	外・内：ハケ　底部外面ケズリ	a4類　稀にφ5～8mmのチャート・白色岩片
171	2316		1		8層				1.7		7.5YR6/3 にぶい褐	φ1～2mm	○	○	○			○	○		良	外：ハケ 内：ハケ	b類 北陸系胎土
172	2317		2	SQ15	7層				－		10YR8/2 灰白	φ1～2mm	○	○	○	○			○		良	外：ハケ→底ケズリ 内：指ナデ	b類 北陸系胎土
173	2328		2	SQ15	7層				－		7.5YR6/3 にぶい褐	φ1mm±	○	○		○			○		良	外：ハケ→底ナデ 内：ハケ	b類　内黒
174	2330		2	SQ15	7層				－		7.5YR6/4 にぶい橙	φ1mm±	○	○	○	○		○	○		良	外：ハケのちナデ 内：ハケ	b類
175	2318		2	O-13	8層				－		10YR8/2 灰白	φ1～2mm	○	○	○	○		○			やや軟	外：ナデ 内：ナデ→底指頭圧痕	b類　北陸系胎土　花崗岩系の岩片
176	2329		2	SQ7	7層				－		7.5YR6/3 にぶい褐	φ1mm±	○	○	○	○	○				良	外：ハケ→底ナデ 内：ナデ	b類
177	2331		2	O-17	7層				－		7.5YR5/4 にぶい褐	φ1mm以下	○	○	○	○	○				良	外：ハケのちナデ→底ナデ 内：ナデ→底ハケ	b類
178	2326		2	SQ15	7層				6.1		7.5YR6/4 にぶい橙	φ1mm±	○	○		○		○			良	外：ナデ 内：ナデ	c類　白色岩片多い
179	2325		2	SQ15	7層				6.0		7.5YR6/4 にぶい橙	φ1mm以下	○	○	○	○	○	○			良	外：ナデ→底ケズリ 内：ハケ	c類
180	2327		7	N-19・20・24	8層				5.7		7.5YR4/4 褐	φ1mm以下	○	○	○	○					良	外：ハケ→底ナデ 内：ハケ	c類
181	2208		3	SQ7・15	7層	1/4			3.0		7.5YR6/3 にぶい褐	φ1mm±	○	○		○					良	外：ナデのちミガキ→底ケズリ 内：ハケのちナデ	微細な石質岩片多い
182	2207	?	3	SQ13	7層	1/4					10YR8/3 浅黄橙	φ1mm±	○	○	○	○					良	外：胴ハケ→底ナデ 内：ナデ	
183	1033	壺	3	SD11		1/4以下	－	－			7.5YR7/6 橙	φ1～2mm	○	○	○	○		○	○		軟	磨耗し不明	北陸系胎土
184	1041	小形壺	1	N-10	8層	1/2	8/32	14.8			10R4/6 赤	φ1mm+	○	○		○		○	○		良	外：赤彩ミガキ 内：口赤彩ミガキ→胴ナデ	石英・雲母多い
185	2225	壺	1		8層	3/4	16/32	14.0		12.5	7.5YR8/2 灰白	φ1mm以下	○	○	○			○	○		良	外：口～胴ミガキ→下半部ハケのちミガキ 内：口ミガキ→胴ナデ	円磨されたチャートが多い。
186	2211	壺	1		8層	1/4以下	21/32	17.7			7.5YR6/3 にぶい褐	φ1mm±	○	○		○			○		良	外・内：ハケ	角ばった石英・長石
187	2259	甕	1		5層 7層 8層	1/4以下	16/32	17.6			7.5YR6/3 にぶい褐	φ1mm±	○			○			○		良	外・内：ハケ	
188	2261	甕	3	SD10	SD10 9層	1/4以下	4/32	11.6			10YR8/2 灰白	φ1mm±	○	○	○	○	○			海綿状骨針	良	外・内：ナデ	
189	2281	壺	1		8層	1/4以下	－				7.5YR7/3 にぶい橙	φ1mm±	○	○	○			○	○		良	外・内：ナデ	角ばった石英・長石
190	2257	壺	4	T-05・10	7層	1/4以下	－				7.5YR5/3 にぶい褐	φ1～2mm	○		○	○	○				良	外・内：ナデ	白色岩片多い
191	2019	壺	1	O-01	8層	1/4	16/32	27.7			7.5YR7/4 にぶい橙	φ1mm±	○	○	○	○	○		○		良	外：ミガキ？(磨耗) 内：ミガキ	
192	2074	甕	4	T-09	7層	1/4	22/32	18.0	8.0	31.4	7.5YR6/4 にぶい橙	φ1mm±	○	○	○	○	○		○		やや軟	全体に磨耗、底ケズリ	角ばった石英・長石

図版番号	整理番号	器種	地区	遺構グリッド	層位	残存率	口縁部残存率	口径	底径	器高	色調	胎土中の鉱物ほか 大きさ	石英	長石	チャート	石質岩片	角閃石	雲母	赤褐色粒子	その他	焼成	成形・調整	備考
193	2032	坏	3	SQ17	7層	3/4	12/32	13.7		4.4	7.5YR5/3 にぶい褐	φ1㎜±	○	○	○	○					良	外・内：ミガキ	max5㎜
194	2124	坏	2	SQ15	7層	1/4以下	6/32	12.4			5YR6/6 橙	φ1㎜以下	○	○			○				良	外：斜め方向のミガキ 内：ヨコのちタテミガキ	砂粒子 角閃石ごく少量
195	2067	坏	2	SQ15	7層	1/4	20/32	14.0			7.5YR7/4 にぶい橙	φ1～2㎜	○		○	○			○		軟	外・内：ハケのちナデ 内：ハケのちナデ輪積み痕あり	砂粒子
196	2082	坏	4	T-07	7層	ほぼ完	26/32	14.4		5.0	10YR8/2 灰白	φ1㎜±	○	○		○	○				良	外：ナデのちヨコミガキ→ケズリのちミガキ 内：ナデのちミガキ	
197	2110	坏	2	SD10	SD10-9層	1/4	16/32	13.0			7.5YR7/3 にぶい橙	φ1㎜以下	○	○					○		良	外・内：ヨコミガキ	石英・長石多い
198	2106	坏	3	SD10	SD10-9層	3/4	12/32	15.4		4.0	2.5Y7/3 浅黄	φ1㎜±	○	○		○	○				良	外・内：放射状のミガキ	石英ごく少量
199	2177	坏	2	O 13	7層	1/4以下	3/32	10.6			7.5YR7/4 にぶい橙	φ1㎜±	○	○			○		○	輝石	良	外：ナデ 内：ナデ→ミガキ？(磨耗)	
200	2062	坏	3	SQ7-15、O 17	7層	1/2	8/32	12.8			7.5YR7/6 橙	φ1㎜±	○	○	○	○					やや軟	外：磨耗し不明 内：ヨコミガキ(磨耗)	
201	2060	坏	3	SQ15	7層	ほぼ完	24/32	13.6		5.5	2.5YR5/6 明赤褐	φ1㎜以下	○	○	○	○	○				良	外：斜め方向のミガキ→底ケズリのちミガキ 内：斜め方向のミガキ	
202	2058	坏	3	SQ15	7層	ほぼ完	28/32	13.5		4.5	7.5YR7/3 にぶい橙	φ1㎜以下	○	○	○		○				良	外：磨耗し不明 内：斜め方向のミガキ	チャート少量
203	2197	坏	2	SQ15	7層	1/4以下	9/32	13.6			7.5YR7/3 にぶい橙	φ1㎜以下	○	○		○	○		○		良	外：ロナデ→ハケのちナデ 内：細かなハケのちミガキ　磨耗	細粒の角閃石
204	2182	坏	4	T-15-20	7層	1/4	25/32	13.1			7.5YR6/6 橙	φ1㎜以下	○	○			○		○		良	外：ナデ 内：ロナデ→ヨコミガキ	石英・長石多い
205	2018	坏	3	SQ6-14	7層	3/4	20/32	12.8		6.2	7.5YR6/4 にぶい橙	φ1㎜以下	○	○	○	○	○		○		やや軟	外：磨耗し不明 内：ナデ	
206	2079	坏	4	T-03	7層	3/4	6/32	13.4		5.8	5YR7/6 橙	φ1㎜±	○	○		○					やや軟	外・内：ヨコミガキ	内黒 石英ごく少量
207	2021	坏	3	SQ24	7層	1/4	15/32	13.1		6.1	10YR7/2 にぶい黄橙	φ1㎜±	○	○	○				○		良	外：ミガキ？(磨耗) 内：ミガキ	内黒 石英・長石多い
208	2171	坏	4	T-03-04-08-09	7層	1/4	5/32	13.1			7.5YR7/3 にぶい橙	φ1～2㎜	○	○	○	○					良	外：斜め方向のミガキ(磨耗)→底ケズリ 内：ミガキ	チャート砂粒子少量
209	2102	坏	3	O-17	7層	3/4	20/32	15.0			7.5YR6/4 にぶい橙	φ1㎜+	○	○		○					やや軟	外・内：磨耗し不明	
210	2278	坏	2	O-13	7層	1/4	9/32	14.1		5.5	2.5YR6/6 橙	φ1㎜±	○	○	○	○		○	○		やや軟	外・内：ナデ(磨耗)	
211	2131	坏	3	SQ15	7層	1/4以下	4/32	10.0			10YR8/2 灰白	φ1㎜±	○	○		○	○				良	外・内：ナデ	角閃石・白色粒子少量
212	2126	坏	3	SQ15	7層	1/2	3/32	11.8			10YR7/3 にぶい黄橙	φ1㎜以下	○	○	○		○		○		良	外：ハケのちナデ 内：ハケのちナデ→ナデ	
213	2157	坏	2	O 13	7層	1/4以下	8/32	13.0			2.5YR6/6 橙	φ1㎜以下	○	○	○	○					やや軟	外・内：ナデ(磨耗)	
214	2179	坏	3	SQ15	7層	1/4	8/32	12.4			10YR8/3 浅黄橙	φ1㎜以下	○	○		○	○		○		やや軟	外：ミガキ 内：磨耗し不明	石英少量
215	2133	坏	3	SQ15	7層	1/2	7/32	13.6			7.5YR7/4 にぶい橙	φ1㎜±	○	○	○	○			○		良	外：ナデ 内：ナデ→ハケのちナデ	石英・長石多い
216	2061	坏	3	SQ15	7層	1/2	13/32	13.6			5YR6/3 にぶい橙	φ1㎜以下	○	○	○	○			○		良	外・内：タテミガキ	
217	2183	坏	4	T-03	7層	1/4	6/32	14.5			10YR4/1 褐灰	φ1㎜±	○	○		○					良	外・内：ナデ	
218	2134	坏	3	SQ15	7層	1/2	14/32	15.0			7.5YR7/4 にぶい橙	φ1㎜±	○	○		○					良	外：ナデ→ミガキ？ 内：ナデ→ミガキ	
219	2034	坏	3	SQ16	7層	1/4	11/32	16.1			7.5YR6/6 橙	φ1㎜±	○	○	○						良	外・内：斜め方向のミガキ(磨耗)	
220	2128	坏	3	SQ15	7層	1/4	12/32	16.5			7.5YR8/2 灰白	φ1㎜±	○	○		○	○		○		良	外：ハケのちミガキ 内：ヨコミガキ	角閃石・赤褐色粒子少量
221	2009	坏	2	SQ23	7層	1/4以下	4/32	17.0			7.5YR5/4 にぶい褐	φ1㎜+	○	○		○			○		良	外：ヨコミガキ 内：コミガキのちタテミガキ	細粒
222	2059	坏	3	SQ15	7層	1/4	13/32	10.3			7.5YR7/3 にぶい橙	φ1～2㎜	○	○	○	○	○				良	外・内：ハケのちナデ	口縁端部外側に指頭圧痕
223	2073	坏	4	T-15	7層	1/4	－				7.5YR6/4 にぶい橙	φ1～2㎜	○	○	○	○					良	外・内：磨耗し不明(ナデ？)	底部×印の線刻
224	2077	坏	4	T-07	7層	ほぼ完	26/32	13.6		4.3	10YR8/3 浅黄橙	φ1～2㎜	○	○	○	○	○				やや軟	外・内：磨耗し不明	底部に円形の線刻
225	2172	坏	4	T-03-04-08-09	7層	1/2	5/32	12.0		6.0	7.5YR8/3 浅黄橙	φ1㎜以下	○	○		○	○		○		やや軟	外：磨耗し不明 内：ミガキ	石英少量
226	2263	坏蓋	2	O-24-25	7層	1/4以下	6/32	11.0			N5/灰	φ1㎜以下	○	○		○					良	外・内：ナデ	須恵器 石英多い
227	2084	坏	2	O-24-T-05	7層	1/4	10/32	12.6	6.4	3.2	N5/～N6/灰	φ1㎜以下	○	○		○					良	外・内：ナデ	須恵器

図版番号	整理番号	器種	地区	遺構グリッド	層位	残存率	口縁部残存率	口径	底径	器高	色調	胎土中の鉱物ほか 大きさ	石英	長石	チャート	泥質岩片	角閃石	雲母	赤褐色粒子	その他	焼成	成形・調整	備考
228	2043	高杯	2	SQ15	7層	1/4	10/32	16.6			7.5YR6/4 にぶい橙	φ1mm±	○	○	○	○					良	外・内：ミガキ	細粒
229	2036	高杯	3	SQ15	7層	1/4	20/32	17.8			10YR7/3 にぶい黄橙	φ1mm±	○	○	○		○		○		良	外：ハケのちナデ 内：磨耗著しいがミガキ	円磨されたチャート
230	2158	高杯	3	SQ7	7層	1/4	24/32	20.6			7.5YR8/2 灰白	φ2mm± maxφ6mm	○	○	○	○			○		軟	外・内：磨耗しているがミガキ	北陸系胎土
231	2087	高杯	2	O-23	7層	1/4	18/32	—			7.5YR8/5 浅黄橙	φ1mm±	○	○	○				○	輝石？	やや軟	外・内：磨耗著しいが、ハケのちミガキ	
232	2095	高杯	2	O-17	7層	1/2	15/32	19.7			7.5YR8/2 灰白	φ1mm以下	○	○	○	○	○				良	外：ハケのちナデ(屈曲部ケズリ) 内：ナデ	
233	2160	高杯	3	SQ7	7層	1/2	22/32	19.7			7.5YR8/2 灰白	φ2mm+	○	○	○	○	○		○		軟	外・内：磨耗しているがミガキ	円磨された石英・長石・チャートも少量混入
234	2045	高杯	2	SQ15	7層	1/4	20/32	17.0			7.5YR8/3 浅黄橙	φ1mm±	○	○	○	○					やや軟	外・内：ヨコミガキ	細粒
235	2002	高杯	2	SQ13	7層	1/2	32/32	17.2			7.5YR7/3 にぶい橙	φ1mm±	○	○		○			○		良	外：ハケのちナデ→ナデ 内：ナデ→ミガキ	赤褐色粒子多い
236	2047	高杯	3	SQ15	7層	1/4	16/32	20.2			5YR7/6 橙	φ1mm±	○	○	○		○	○			軟	外・内：磨耗し不明	円磨されたチャート
237	2254	高杯	3	SD11		1/4以下	5/32	19.0			7.5YR8/3 浅黄橙	φ1mm±	○	○	○	○		○	○		やや軟	外・内：ミガキ(磨耗)	角ばった鉱物
238	2038	高杯	3	SQ15	7層	1/4	12/32	19.6			7.5YR7/4 にぶい橙	φ1mm±	○	○	○				○			内：ナデ？	角ばった細粒の長石多い
239	2037	高杯	3	SQ7-15	7層	1/4	2/32	19.6			5YR8/3 淡橙	φ1mm以下	○	○		○		○	○		良	外・内：ミガキ	
240	2163	高杯	3	SQ15	7層	1/2	22/32	17.6			2.5YR6/6 橙	φ1～2mm	○	○	○	○			○		軟	外・内：磨耗し不明	
241	2096	高杯	2	O-17	7層	1/2	29/32	19.2			7.5YR7/3 にぶい橙	φ1mm±	○	○	○	○					良	外：放射状のミガキ 内：磨耗　ミガキ？	チャート少量 2107と同一か
242	2046	高杯	2	SQ15	7層	1/4	8/32	17.0			7.5YR8/4 浅黄橙	φ1mm±	○	○	○				○		やや軟	外：磨耗しているがミガキか？ 内：ヨコミガキ	円磨されたチャート
243	2007	高杯	3	SQ13	7層	1/2	24/32	17.0			10YR7/4 にぶい黄橙	φ1mm±	○	○		○	○		○		良	内：横方向のミガキ	角ばった細粒の長石多い
244	2078	高杯	4	T 03-04-08-09	7層	1/2	16/32	14.8			2.5YR6/6 橙	φ1mm±	○	○	○	○	○				軟	外・内：磨耗著しく不明	チャート・角閃石少量 歪み著しい
245	2048	高杯	3	SQ7-SQ15	7層	1/2	30/32	16.9			5YR6/6 橙	φ2mm± maxφ5mm	○	○	○	○	○				軟	外・内：ミガキと思われるが磨耗著しく不明	歪み著しい。泥岩質の岩片が多い
246	2080	高杯	4	T-03	7層	1/2	2/32	15.2			7.5YR6/4 にぶい橙	φ1mm±	○	○	○	○	○		○	輝石	やや軟	外・内：磨耗しているがハケのちミガキ　輪積み痕あり	細粒
247	2086	高杯	2	O-22	7層	ほぼ完	31/32	12.8	12.9		5YR8/3 淡橙	φ1mm±	○	○	○	○			○		軟	外・内：磨耗著しく不明 内：裾ヨコミガキ	赤褐色粒子多い
248	2024	高杯	2	SQ17	7層	1/4	2/32	15.4			7.5YR7/2 明褐灰	φ1mm±	○	○	○	○					良	外：ハケのちナデ 内：ハケ	2088と同一 チャート少量
249	2088	高杯	2	O 23	7層	1/4					7.5YR7/3 にぶい橙	φ1mm±	○	○	○	○					良	外：ナデ 内：ナデ(輪積み痕・絞り痕あり)	2088と同一 チャート少量
250	2101	高杯	2	O 17	7層	1/2					5YR6/8 橙	φ1～2mm	○	○	○	○	○				やや軟	外：磨耗しているがミガキまたはナデ 内：ナデ→ハケ	円磨されたチャート・長石多い
251	2042	高杯	2	SQ15	7層	1/2			11.1		7.5YR7/4 にぶい橙	φ1mm±	○	○	○	○	○		○	輝石	良	外：ナデ 内：ナデ　絞り痕、ツメ痕あり	細粒 チャート少量
252	2099	高杯	2	SQ15-O-17	7層	1/2			10.3		7.5YR7/4 にぶい橙	φ1mm±	○	○	○	○			○		良	外：ミガキ→脚ハケのちミガキ裾ナデ 内：ミガキ→脚ナデ　絞り痕、工具痕あり	細粒
253	2200	高杯	2	O-23	7層	1/2			13.0		10YR7/2 にぶい黄橙	φ1mm以下	○	○	○	○	○		○		良	外：ナデのちミガキ→裾ハケのちナデ 内：絞り痕、輪積み痕あり　一部ケズリ	細粒 角閃石・赤褐色粒子・岩片少量
254	2107	高杯	3	O 18	7層	1/2			12.9		7.5YR6/4 にぶい橙	φ1mm±	○	○		○		○	○		良	外：ナデ→裾ミガキ　指押え痕あり 内：ケズリ→裾ハケ→ナデ　絞り痕あり	細粒 赤褐色粒子・岩片・雲母少量
255	2081	高杯	4	T 03-04	7層	1/4			14.7		7.5YR8/4 浅黄橙	φ1mm±	○	○	○		○		○	海綿状骨針	やや軟	外：磨耗著しいがナデ　接合部にハケ 内：ナデ　絞り痕あり	チャート・角閃石少量
256	2165	高杯	3	SD10	SD10-9層	1/2			13.6		7.5YR6/4 にぶい橙	φ1mm±	○	○		○	○	○			良	外：磨耗著しいがミガキか 内：ラセン状の輪積み痕→縦方向の指ナデ	雲母少量
257	1034	壺	3	SQ15	7層	1/4以下	6/32	8.6			2.5YR6/6 橙	φ1mm以下	○	○			○	○	○		良	磨耗し不明	石英・雲母多い
258	1031	壺	1		8層	1/4以下	7/32	9.1			10Y4/8 赤	φ1mm以下	○	○		○					良	外：タテミガキ 内：ヨコミガキ	

図版番号	整理番号	器種	地区	遺構グリッド	層位	残存率	口縁部残存率	口径	底径	器高	色調	胎土中の鉱物ほか									焼成	成形・調整	備考
												大きさ	石英	長石	チャート	石質岩片	角閃石	雲母	赤褐色粒子	その他			
259	2118	小型壺	1		5層 8層	1/4	2/32	8.4		7.5	10YR7/3 にぶい黄橙	φ1mm±	○	○	○	○	○	○	○		良	外・内：ナデ	角ばった石英・長石
260	2175	小型壺	2	O-19	7層	1/4	24/32	8.8			7.5YR8/3 浅黄橙	φ1mm±	○	○		○	○				良	外：口ハケ→ハケ→磨耗 内：磨耗し不明	
261	2053	小型壺	3	SQ15	7層	1/2					10YR7/2 にぶい黄橙	φ1mm以下	○	○	○				○	輝石	良	外・内：磨耗し不明	
262	2039	小型壺	3	SQ15	7層	1/4	11/32	11.6			5YR7/4 にぶい橙	φ1mm±	○			○	○	○			良	外・内：ナデ	石質岩片(白色・黒色)
263	2049	小型壺	3	SQ7・15	7層	1/4					7.5YR8/3 浅黄橙	φ1mm±	○	○	○	○	○	○	○		良	外：胴ハケのちミガキ 内：胴ナデ→ハケ	円磨された鉱物・黒色岩片 微細な雲母・角閃石
264	2154	小型壺	2	O-24	7層	1/2	—				5YR7/4 にぶい橙	φ1mm±	○	○	○	○			○		やや軟	外・内：磨耗して不明	頸部内面指頭圧痕
265	2185	小型壺	3	SD10	SD10 -6・8・ 9層	3/4	—				10YR8/3 浅黄橙	φ1mm±	○	○	○	○	○		○		良	外：ロナデ→磨耗 内：ナデ	
266	2051	小型壺	3	SQ15・ O 17	7層	3/4	30/32	14.3			7.5YR7/3 にぶい橙	φ1~2mm	○	○	○	○		○			良	外：ミガキ 内：ロミガキ→胴ナデ 輪積み痕あり	石質岩片(白色・黒色)
267	2050	小型壺	3	SQ7・ 15・ SD6	7層	1/2	32/32	11.2			7.5YR8/2 灰白	φ1mm±	○	○	○	○	○	○	○		良	外・内：ナデ	
268	2041	小型壺	3	SQ15	7層	1/4	15/32	13.7			7.5YR6/4 にぶい橙	φ1mm±	○	○	○	○		○			良	外：ロナデ→ハケ 内：ナデ	雲母・黒色岩片少量
269	2105	小型壺	2	O-18	7層	3/4	23/32	9.8		12.6	7.5YR5/3 にぶい褐	φ1~2mm	○	○	○	○	○	○	○		良	外：ロナデ→胴ケズリ 内：ナデ	白色岩片多い
270	2071	小型壺	3	SQ24	7層	ほぼ完	30/32	9.7	13.2		7.5YR6/3 にぶい褐	φ1mm±	○	○	○	○			○		良	外：口ハケのちミガキ→底ケズリのちミガキ 内：ハケのちミガキ→ナデ	
271	2001	小型壺	3	SQ13	7層	3/4	10/32	12.3			10YR8/2 灰白	φ1mm以下	○	○	○	○	○	○	○		良	外：胴ナデのちミガキ 内：ナデ→ハケ	石質岩片(白色・黒色)赤褐色・黒色)
272	2153	小型甕	1	N-10	8層	1/4	7/32	14.1	5.1	17.5	10YR6/3 にぶい褐	φ1~2mm	○	○	○	○		○	○		やや軟	外：ロナデ→ハケ　胴ハケ→ナデ 内：ハケのちナデ　輪積み痕、頸部指頭圧痕あり。	円磨されたチャート・雲母少量
273	1030	坏	1	O-02	7層 8層	1/4	3/32	17.2	4.6	7.7	10R4/6 赤	φ1mm±	○	○		○	○				良	外：縦方向のミガキ(磨耗) 内：ナナメ方向のミガキ(磨耗)	赤彩
274	1036	高坏?	4	T-04	8層	1/4以下	3/32	18.0			7.5YR6/4 にぶい橙	φ1mm以下	○	○		○	○		○		良	外・内：ナナメ方向ミガキ	内面　赤彩
275	2205	坏?	3	SQ15	7層	1/2	—		4.0		7.5YR7/3 にぶい橙	φ1mm以下	○	○		○	○		○		良	外：ミガキ(磨耗) 内：ナデ	
276	2040	鉢?	3	SQ15	7層	3/4	6/32	10.2	5.9	6.9	7.5YR7/4 にぶい橙	φ1mm±	○	○	○	○			○		良	外：ハケのちナデ→ケズリのちナデ 内：ナデ	円磨されたチャート
277	2276	?	3	SD6 SD11		1/2	14/32	14.0			10YR6/3 にぶい黄橙	φ1mm以下	○			○	○		○		良	外：ロナデ→ハケ 内：ナデ	
278	2277	?	3	SD11		1/4	16/32	11.2			10YR6/3 にぶい黄橙	φ1mm以下	○	○		○	○		○		良	外：ロナデ→ハケ 内：ナデ	
279	2229	甕A?	1		8層	1/2	12/32	15.2			10YR8/2 灰白	φ1mm±	○	○	○	○	○	○	○		良	外：ロナデ→ハケ 内：ナデ	
280	2022	小型甕B	2	SQ24	7層	1/4	10/32	15.2			10YR7/3 にぶい黄橙	φ1mm±	○	○	○	○			○		やや軟	外：ロナデ→胴磨耗し不明 内：ナデ	角ばった石英・長石多い
281	2130	鉢	2	O-18	7層 8層 9層	3/4	2/32	15.3	6.6	11.9	7.5YR7/3 にぶい橙	φ1mm±	○	○	○	○			○		良	外：ナデのちミガキ→底ケズリ 内：ミガキ	内黒 少量のチャート
282	2251	鉢	5			1/2	15/32	14.3			10YR7/3 にぶい黄橙	φ1mm以下	○	○	○	○					やや軟	外：磨耗 内：ロヨコミガキ	内黒
283	2075	鉢	4	T-08	7層	3/4	7/32	14.5	7.1		10YR8/3 浅黄橙	φ1mm以下	○	○	○		○	○	○		軟	外：ミガキ(磨耗) 内：ナデ	歪み著しい
第39図-1	2265	坏	1			1/4以下	—		7.4		7.5YR5/2 灰褐	φ1mm以下	○	○	○	○					良	外・内：ナデ	須恵器
第39図-2	2264	坏	1		5層	1/4以下			7.2		7.5YR7/6 橙	φ1mm以下	○	○	○			○			良	外・内：ナデ	須恵器 回転糸切り
	1011		1		5層 8層	1/4以下			8.6		7.5YR7/4 にぶい橙	φ1mm±	○	○	○	○	○			輝石	やや軟	外・内：磨耗し不明	弥生高坏?脚
	1037	壺	3	O-23・ T-03	7層	1/4以下					10YR6/4 にぶい黄橙	φ1mm以下	○	○	○		○						弥生後期壺頸部
	2246		1	O 03	7層	1/4以下	7/32	13.4			7.5YR8/3 浅黄橙	φ1mm±	○	○		○		○			良	外・内：ナデ	石質岩片(白色・赤色)

引用・参考文献

敢代勤　1980「野尻湖周辺の人類遺跡と古環境」地質学論集第19号日本地質学会

野尻湖地質グループ　1990「野尻湖発掘地とその周辺の地質　その６」『地団研専報』37号

野村　哲ほか　1992「野尻湖周辺の自然史―最終氷期以降の古環境―」『地球』vol.14

早津賢二ほか　1994「妙高火山群の活動史」『地学雑誌』vol.103

赤羽貞幸　1996「野尻湖の生い立ちとその変遷」『アーバンクボタ』No.35

信濃町教育委員会　2001「市道遺跡発掘調査報告書」

坂井秀弥・川村浩司　1993「古墳出現前後における越後の土器様相―越後・会津・能登―」　「文部省科学研究費補助金（総合Ａ）研究成果報告書」

三ツ井朋子ほか　1997「大渕原Ｃ遺跡」『上信越自動車道関係発掘調査報告書Ⅱ』新潟県埋蔵文化財調査報告書第85集　(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団

春日真実　2001「新潟県大渕原Ｃ遺跡の弥生時代末から古墳時代初頭の土器」研究紀要第３号　(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団

(財)長野県埋蔵文化財センター　1994『七瀬栗林』上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書13　―小布施町内・中野市内その１・その２

(財)長野県埋蔵文化財センター　1997『石川条里遺跡』中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書26　―長野市内その３―

長野県埋蔵文化財センター　1999　『種田遺跡』上信越自動車道埋蔵文化財調査報告書12　―長野市内その10―

原色日本本植物図鑑　保育社

長野県埋蔵文化財センター　2000『松原遺跡』上信越自動車道埋蔵文化財調査報告書５　―長野市内その３―

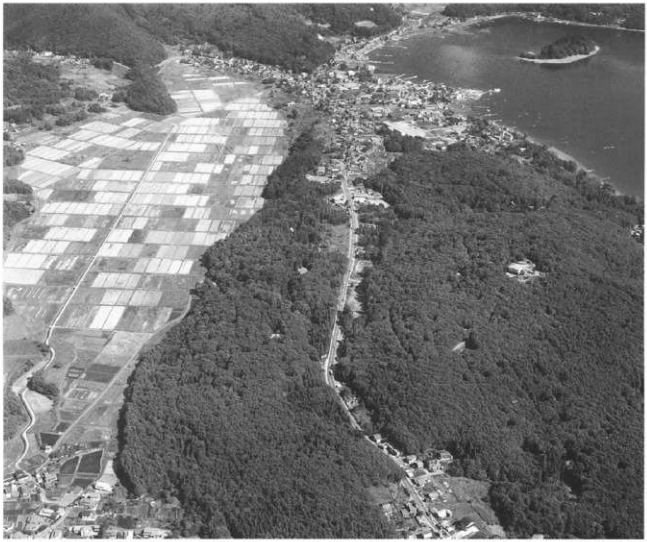
長野県埋蔵文化財センター　2000『更埴条里・屋代遺跡群―古代２・中世・近世編―』上信越自動車道埋蔵文化財調査報告書27　更埴市内その６

橋本博文ほか　1997『発掘された北陸の古墳報告会資料集』まつおか古代フェスティバル実行委員会

岩崎卓也ほか　1989『七瀬古墳群・田麦中畝古墳群』中野市教育委員会

甘粕健ほか　1994『東日本の古墳の出現』山川出版

早津賢二ほか　1994「妙高火山の活動史―多世代火山―」地学雑誌103(3)　207-220



遺跡遠景

左上：2区
遺物出土状況

左下：1区
遺物出土状況

右：TR2
深掘り土層断面

左：調査区全景

右：3区
調査風景

左：1区・2区
調査風景

右：6区・7区
全景

左：6区
遺物出土状況

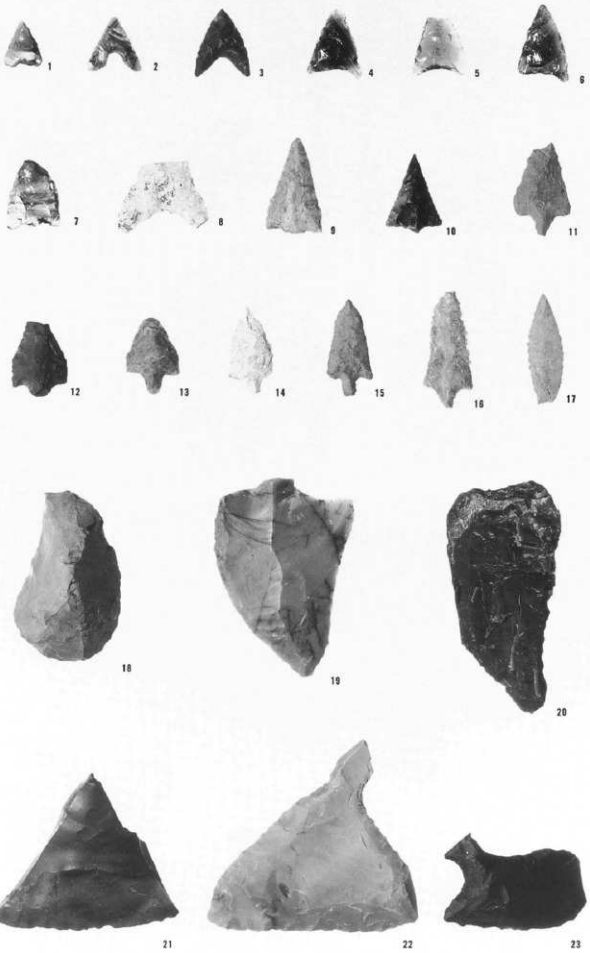
右：第15図 No.16
出土状況

左：7区
遺物出土状況

右：ST01完掘

左：SM02
牛歯出土状況

右：1区　第26図
No.39出土状況



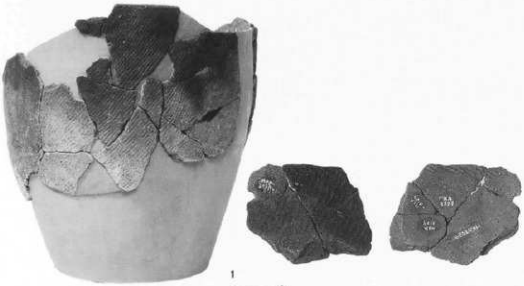
石鏃
(1～17)

掻器
(18)

削器
(19～21)

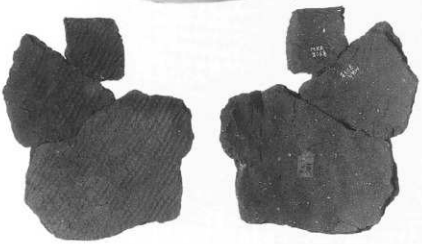
石匙
(22・23)

縮尺
(ほぼ1：1)



1

表裏縄文土器
（1）
口縁部
（縮尺１：２）



16

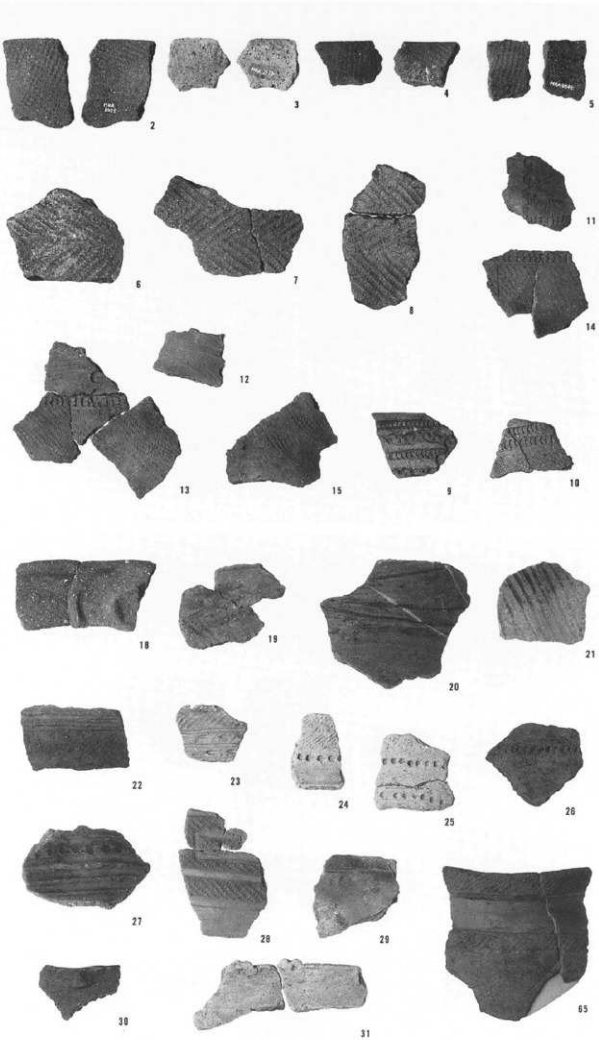
前期　土器
（16）

60

64

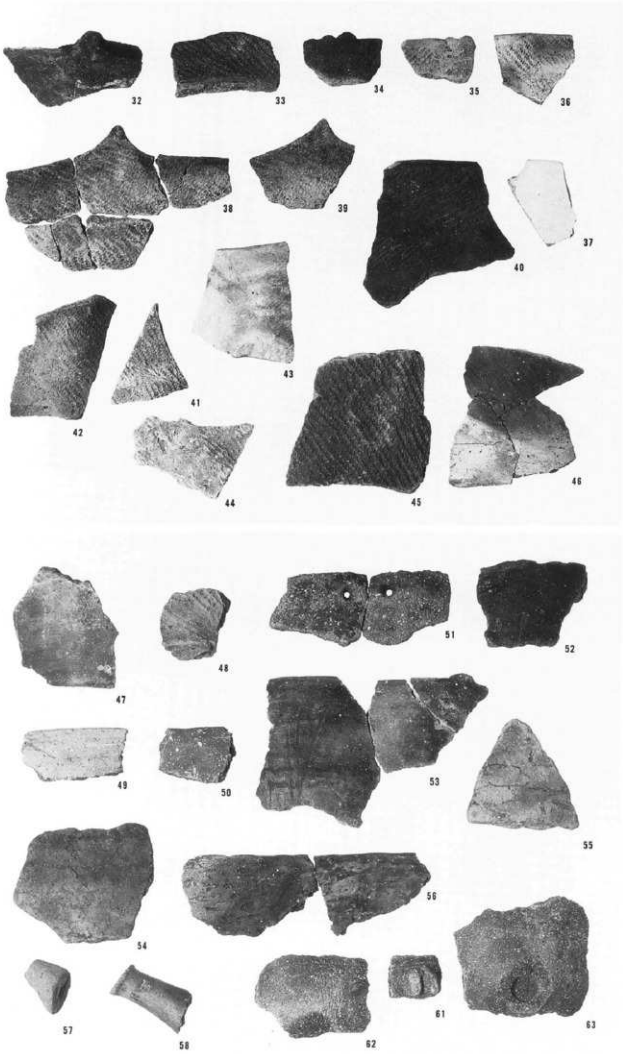
59

後期　土器
（59・60・64）

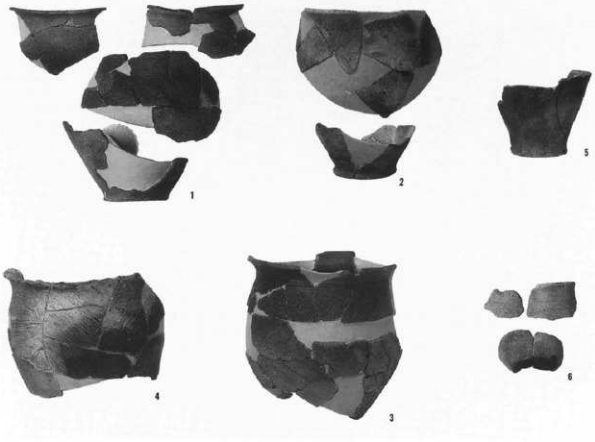


上段：草創期
～前期土器
（縮尺1：2）

下段：中期
～晩期土器
（縮尺1：2）

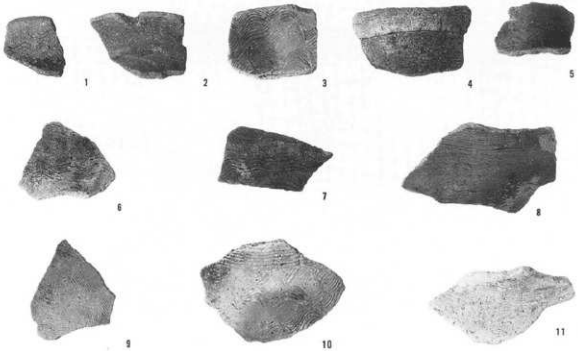


上段・下段：
後期・晩期土器
（縮尺 1：2）



中期 甕
(1～5)
壺(6)

中期 壺
(縮尺1：2)



甕
(縮尺1：2)

13

17

14

波状文　甕
(縮尺 1 : 2)

12

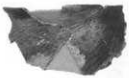
16

15

18

波状文　甕

107


120

121

擬凹線口縁甕
(107)
タタキ甕
(120・121)
S字口縁甕
(125・128・126)

125

128

126

19

37

38

40

39

60

67

85

古墳時代　甕

84

88

90

94

95

96

91

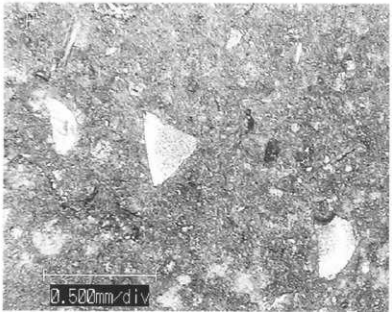
104

106

103

古墳時代　裏

105



第30図
No.98
内面拡大
(ATの混入)

202

201

196

224

227

229

232

233

235

241

243

245

254

251

247

253

267

古墳時代
坏
高坏
小型壺

269

270

271

184

185

186

192

191

壺
(184～186・191・192)

276

281

282

289

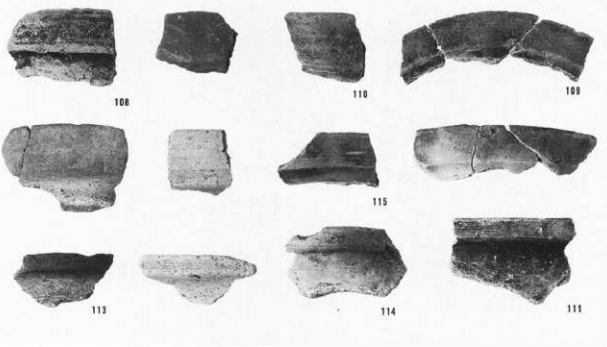
鉢
(276・281・282)

223

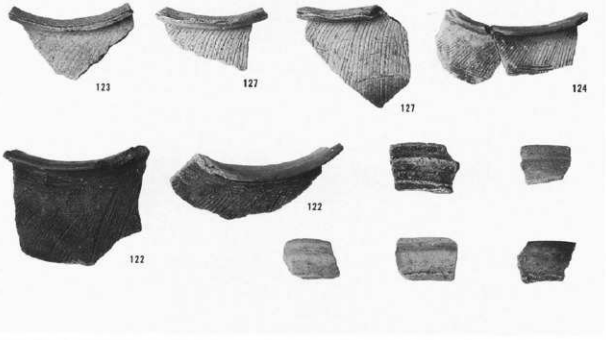
289

292

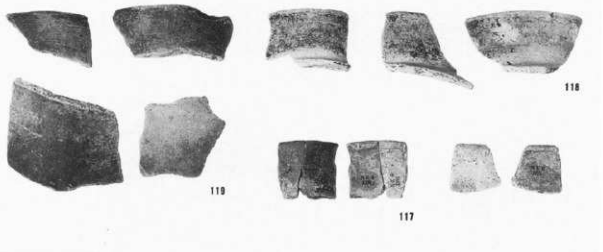
線刻 (289・223)
紡錘車 (289)
(縮尺1：2)
紡環 (292)
(縮尺1：1)



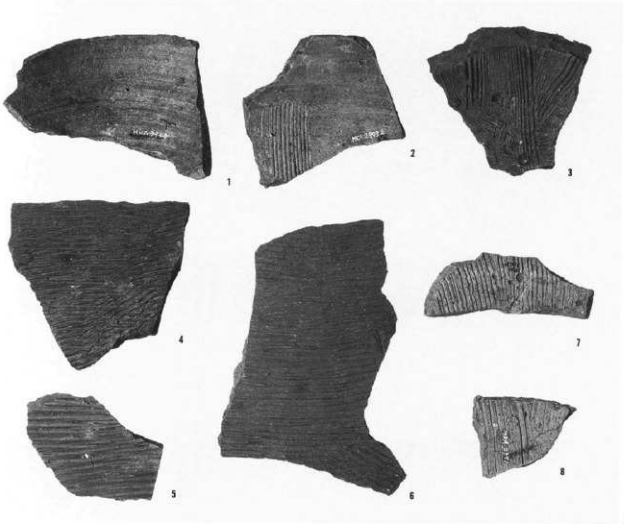
北陸系土器
口縁部



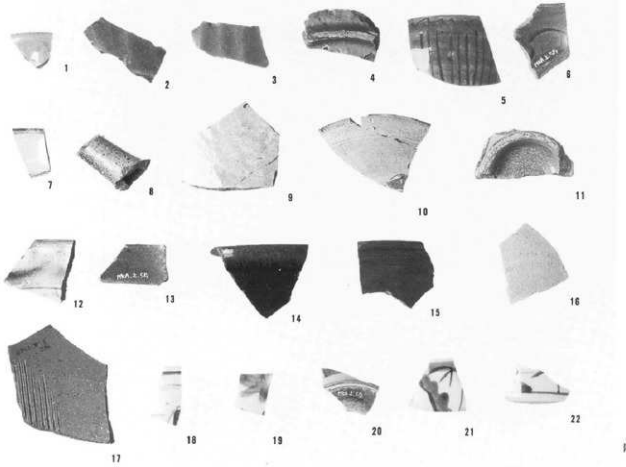
東海系土器
口縁部



畿内系土器
口縁部



珠州焼



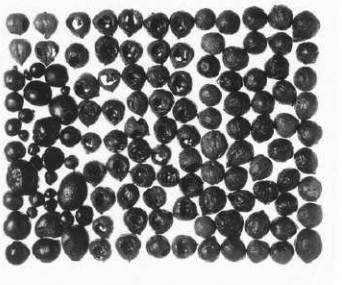
陶磁器

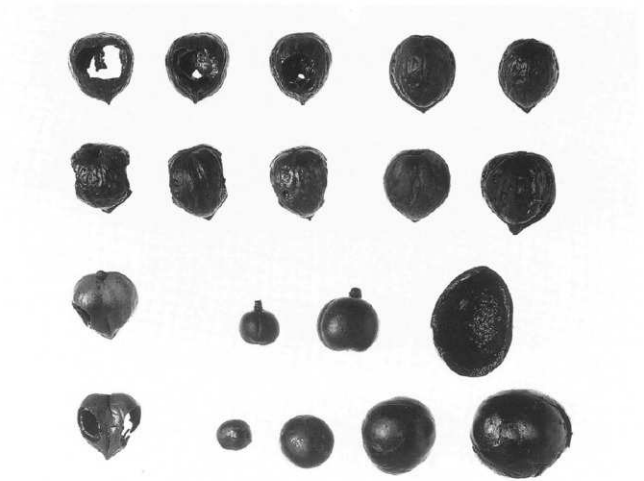
下駄
（1・2）

椀
（3）

用途不明品
（4）

右：下段出土の
種実





オニグルミ
左6点は食痕が
みられる

左：ヒメグルミ
右：トチノキの
果実・種子
（ほぼ2：3）

報告書抄録

ふりがな	いっぱんこくどう18ごう（のじりばいぱす）まいぞうぶんかざいはっくつちょうさほうこくしょ
書名	一般国道18号（野尻バイパス）埋蔵文化財発掘調査報告書4
副書名	川久保遺跡
巻次	4
シリーズ名	長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	64
編著者名	土屋積　鶴田典昭　山崎まゆみ
編集機関	財団法人　長野県文化振興事業団　長野県埋蔵文化財センター
所在地	〒388－8007　長野市篠ノ井布施高田963-4　TEL 026-293-5926
発行年月日	2004年3月19日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	°′″	°′″		㎡	
川久保遺跡	長野県上水内郡信濃町大字野尻字野尻	205834	33	36°50′06″（旧日本測地系） 36°50′17″（世界測地系）	138°12′29″（旧日本測地系） 138°12′18″（世界測地系）	1999年5月7日～1999年10月29日 2000年5月17日～2000年6月29日	6,500	国道建設に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
川久保遺跡	散布地	縄文	なし	石鏃・石匙・掻器・削器 草創期（表裏縄文土器）・前期土器 中期～晩期土器	
		弥生	なし	中期～後期土器	
		古墳	なし	銅環・石製模造品・土師器・須恵器・土製品	低湿地から多量の土師器が出土
		奈良・平安	なし	須恵器	
		中世以降	掘立柱建物 土坑	陶磁器 獣骨 珠洲焼・古銭・陶磁器・木製品	

長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書64

一般国道18号（野尻バイパス）
埋蔵文化財発掘調査報告書４
―信濃町内その４―

川久保遺跡

発　行　平成16年（2004年）３月19日
発行者　（財）長野県文化振興事業団
　　長野県埋蔵文化財センター
　　〒388-8007　長野市篠ノ井布施高田963-4
　　TEL　026-293-5926
　　FAX　026-293-8157
印　刷　第一印刷株式会社